

学位論文

生涯学習の観点からみた高等学校保健体育科における
「教材づくり」に関する研究

広島大学大学院教育学研究科
博士課程後期学習開発専攻
D093127 村上恭子

目 次

序 論	1
第1節 研究の背景と目的	2
第2節 先行研究の検討	4
第3節 研究の方法	5
本 論	9
第I部 保健体育科における「教材づくり」論	10
第1章 保健体育科における「教材づくり」の位置づけ	11
第1節 保健体育という教科の捉え方	11
第1項 保健という科目の捉え方	11
第2項 体育という科目の捉え方	11
第3項 学習指導要領における保健体育の捉え方	13
第2節 保健体育科における「教材」の特性	16
第1項 教材に関する論考	16
第2項 保健体育科における「教材」の特性	17
第3節 保健体育科における「教材づくり」とは何か	18
第1項 保健における「教材づくり」	18
第2項 体育における「教材づくり」	19
第2章 保健体育科における「教材づくり」論 —高田典衛を中心にして—	23
第1節 高田の体育授業観と略歴	23
第2節 高田における「教材づくり」の視点	24
第3節 「高田4原則」とは何か	26
第4節 「高田4原則」を導き出した研究方法	30
第II部 高等学校保健体育科における「教材づくり」と実践研究	35

第3章	3つの視点を含んだ「教材づくり」による実践研究	
	—エイズの授業実践に焦点づけて—	36
第1節	保健分野におけるエイズ教材を取り上げる背景	36
第1項	エイズ教材を取り上げる理由	36
第2項	高等学校におけるエイズの先行研究	36
第3項	エイズの「教材づくり」の視点	38
第2節	本実践研究の目的と方法	39
第1項	本実践研究の目的	39
第2項	本実践研究の方法	39
第3節	結果と考察	45
第1項	事前・事後の知識理解からみた変容	45
第2項	感想文の分類からみた変容	53
第4節	成果と今後の課題	57
第1項	「教材づくり」を成立させるために必要とされること	
	—エイズ教材からの示唆—	57
第2項	成果と今後の課題	59
第4章	3つの視点を含んだ「教材づくり」による実践研究	
	—創作ダンスの授業実践に焦点づけて—	64
第1節	体育分野における創作ダンスを取り上げる背景	64
第1項	創作ダンスを取り上げる理由	64
第2項	高等学校における創作ダンスの先行研究	64
第3項	創作ダンスの「教材づくり」の視点	66
第2節	本実践研究の目的と方法	66
第1項	本実践研究の目的	66
第2項	本実践研究の方法	66
第3節	結果と考察	72
第1項	A子の感想文の記述内容の変容	72
第2項	創作ダンス教材によるA子の行動変容	73

第3項 創作ダンス教材による学習の効果	
—A子の内的変容—	81
第4節 成果と今後の課題	82
第1項 「教材づくり」を成立させるために必要とされること	
—創作ダンスからの示唆—	82
第2項 成果と今後の課題	85
結 論	90
第1節 本研究から得られた新たな知見	91
第2節 今後の課題	93
参考・引用文献一覧	94
参考資料一覧	102
参考 web ページ一覧	102
資 料	105
資料1 エイズの授業に関する調査資料と学習指導案及び振り返り用紙	106
資料2 創作ダンスの授業に関する調査資料及び振り返り用紙	117

序 論

第1節 研究の背景と目的

内閣府の「体力・スポーツに関する世論調査」をみると、「普段、運動不足を感じる」と答えている人が、平成18年では67.6%¹⁾、平成21年では、73.9%²⁾と増加しており、継続的にスポーツライフを営んでいる人は30%程度であることが見て取れる。厚生労働省は「健康づくりのための身体活動や運動の実践状況」³⁾の調査を、平成23年に成人男女を対象に実施した。その中の、「あなたは現在、健康づくりのための身体活動や運動を実践していますか」という問いに対して、総数7,036人のうち、39.4%の人が「はい」と回答をしている。「はい」と回答した人を年代別に見てみると、20歳代では26.0%、30歳代では27.5%、40歳代では30.3%、50歳代では37.4%、60歳代では49.0%、70歳代では50.5%となっている。つまり、加齢と共に健康づくりに対して数値は上昇しているものの、20歳代から50歳代までは自分自身の健康づくりへの取り組みが少なく、労働年齢を終える60歳代から健康づくりのための身体活動や運動を実践している人が多いことが示唆された。

しかし、厚生労働省「平成22年度国民医療費の概況」の「年齢階級別国民医療費」が示すように、人口1人当たりの国民医療費は、「65歳未満は16万9,400円、65歳以上は70万2,700円となっている」⁴⁾。つまり、65歳以上は、65歳未満の4.14倍の介護医療費がかかっているといえる。このように、医療の管理下に置かれている高齢者も存在する。

さらに、内閣府「平成23年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況 第1章高齢化の状況」によれば、「総人口が減少するなかで高齢者が増加することにより高齢化率は上昇を続け」⁵⁾、わが国においては、2013年には65歳以上の高齢者の割合は4人に1人、2035年には3人に1人、2060年には約2.5人に1人となる高齢社会が到来すると推計されている。また、2060年には、総人口における75歳以上の後期高齢者の割合は26.9%となり、4人に1人が該当すると推計されている。このことから、健康づくりへの取り組みが少ない20歳代が高齢者になった際、国民医療費は、さらに増加することが予測される。

そこで、厚生労働省は、団塊の世代の全てが75歳以上となる2025年に向け、日本再興戦略や健康・医療戦略などを踏まえ、「『国民の健康寿命が延伸する社会』に向けた予防・健康管理に関する取組の推進」⁶⁾を公表した。つまり、健康寿命の延伸への取り組みには、産学官合同で最先端の医療技術の開発、青年期からの健康づくりへの習慣化、行政の国民の健康を支え守るための保健・医療・福祉政策と就労条件の整備という各種の連携が必要だといえる。

本研究は、現在の高校生が50年後に当事者として生きる高齢社会において、健康づくりに主体的に取り組めるような認識を育むために、青年期からの健康づくりへの習慣化を図る高等

学校保健体育科の存在意義を考えるとところから出発している。

小・中・高等学校と続く学生時代を終え社会人となるライフステージにおいて、高等学校保健体育科は、健康づくりへの学習を必修として学ぶ最後の機会である。平成 21 年に改定された高等学校保健体育科の教科目標においては、「小学校、中学校及び高等学校の教科の一貫性を踏まえ」⁷⁾、体育と保健とを関連させていく考え方が強調されている。また、育成すべきことがらとして、「心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的、計画的な実践を通して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる」⁸⁾、と述べられている。ここでは、高等学校における保健体育科の役割のひとつとして、学校教育と生涯にわたるスポーツライフとの架け橋になり、健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力の育成が示されているといえる。

次に、高等学校保健体育科の学習を生涯学習との関連で考えてみると、保健と体育は別の授業として行われているが、目的面からみれば独立して存在するのではなく、両者を関連させて生涯教育の統合理念⁹⁾へ収束するのが望ましいと考えられる。『新訂 生涯学習概論』（ぎょうせい、2010）において、「生涯教育（lifelong integrated education）は、生涯のいずれの時期においても学習が有効に行われるよう、全ての教育機会が、生涯という垂直的統合理念（縦軸）、教育の場という水平的統合理念（横軸）、三次元的視座で総合的推進するという内容的統合理念（深みの軸）で関係づけられている」¹⁰⁾と述べられている。これにしたがえば、高等学校の保健体育科は、「生涯という垂直的統合理念（縦軸）」からすれば、高等学校卒業後の生活に関係づけ、「教育の場という水平的統合理念（横軸）」からすれば、高等学校と高等学校外の社会とを関係づけるといえよう。「三次元的視座で総合的推進するという内容的統合理念」からすれば、保健体育科は、高等学校での学習と卒業後の豊かなスポーツライフを継続する健康の保持増進との接続が関係づけられるといえよう。

このように、「三次元的視座で総合的推進するという内容的統合理念」という視点から保健体育科という教科をみると、体育の授業研究で有名な高田の理論が注目される。高田は保健体育科を、「『技能』を高める科目としてではなく、健康のための『認識能力』、つまり健康のための『学力』を高める科目」¹¹⁾として捉えている。高田は、1953年から1968年の学習指導要領の小学校体育編、中学校保健体育編を編纂した経験から、保健体育科における小学校から高等学校までの教科内容の系統性を把握しており、「体育という科目を『技能教科』としてではなく、『保健体育科』として捉え、例えば『理科』とか『社会科』とかと同様の合科教

育科目として見る見方をしてきた」¹²⁾と述べている。このように保健体育科を技能教科としてではなく、健康のための学力を高める教科として捉えている点は、本研究で取り上げる「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図る」という、今日の学習指導要領保健体育編の考え方にも通底する視座を保持しているといえる。また、保健体育科の目標は、健康寿命の延伸にも繋がることでもあり、高齢化が進む社会にとっても有益だといえる。そのためには、生涯学習の観点に立った「教材づくり」が是非とも必要である。そこで、本研究では、高田の理論に依拠しながら、生涯学習の観点から、健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力をもった学習者の育成を図る「教材づくり」¹³⁾の基礎的知見を明らかにすることを目的とする。

第2節 先行研究の検討

(1) 高等学校保健体育授業に関する先行研究の検索

「高等学校保健体育授業」、「高等学校保健体育」をキーワードにして、広島大学 OPAC で検索すると、学習指導要領の解説書や教科書がヒットしたが、研究論文や研究書はヒットしなかった。次に、CiNii で検索した結果、56 件がヒットした。ここでは CiNii での検索に従って先行研究を検討することにした。その結果を大別すると3つに分けられた。第1に、具体的な種目の指導法に関する実践研究が、26 件 (46.4%) であった¹⁴⁾。第2に、体育授業の数量化を目指した研究やカリキュラムに関する研究が、19 件(32.7%)であった¹⁵⁾。第3に、保健授業の指導法に関する研究が、11 件 (20.9%)であった¹⁶⁾。つまり、高等学校保健体育授業の先行研究においては、教える側の方法論的研究がほとんどであり、学習者が卒業後も健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力の育成に関する研究は、管見の限りではあるが、ほとんど見られなかった。

(2) 「教材づくり」に関する先行研究の検索

広島大学 OPAC で「教材づくり」をキーワードにして検索した結果、ほとんどは小・中・高等学校の教諭、教員養成系の学生を対象にした各教科の指導法とその評価であった。「教材づくり」の理論研究としては藤岡信勝『教材づくりの発想』（日本書籍, 1991 年）が該当した。また、CiNii で「教材づくり」を検索すると、238 件がヒットした。そのなかでも、稲垣忠彦は、教師の「教材づくり」によって子どもの学びが変わる大切さを論述しており¹⁷⁾、注目に値するといえる。さらに、「教材づくり」のキーワードに関して保健体育に関する研究論文は 90

件（保健 23 件，体育 67 件）あり，全体の 37.8%を占めていることが明らかとなった。ここから，保健体育科においても「教材づくり」の研究が進められているといえよう。

次に，保健体育関係の月刊誌『体育科教育』（1990 年 1 月～2011 年 8 月まで）と，『学校体育』（1990 年 1 月～2002 年 3 月まで）の約 20 年間の書誌を調査対象として「保健体育」と「教材づくり」に関して，保健と体育に分けてタイトルに「教材づくり」が付加されている文献を検索した。『学校体育』誌は，休刊になるまでの 2002 年 3 月号までを検討対象とした。

『体育科教育』には 55 件，『学校体育』には 85 件あった。両誌とも内容を検討すると，論題には「〇〇の教材づくり」と記述してあったが，「よい授業をするため」の教材や教具，指導法の紹介や工夫した教材事例が紹介されている内容がほとんどだった。その中では岩田靖の「教材づくり」に関する論考¹⁸⁾は，「教材づくり」の概念規定や概念に基づいた実践事例が提示されており，注目に値するといえる。

内閣府の調査や先行研究の検討から，生涯にわたって健康で豊かなスポーツライフを継続する実践力の育成を図ることの必要性が指摘された。にもかかわらず，高等学校保健体育科ではこの観点からの「教材づくり」に関する研究がほとんど行われていない。そこで，本研究では，この観点による「教材づくり」の検討をし，生涯にわたり健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力の育成を図るための基礎的知見を得ることを目的とする。

第 3 節 研究の方法

本論文は，2 部構成とした。第 I 部では理論研究を行い，第 II 部では実践研究を行った。第 I 部の理論研究としては，保健体育という教科の特性から，「教材づくり」の観点を示すことにした（研究 1，第 2 章）。第 II 部の実践研究として，研究 2，研究 3 を行った。研究 2 では，研究 1 によって明らかになった「教材づくり」の観点に基づいた保健教材による実践研究を行うことにした（第 3 章）。研究 3 では，研究 1 によって明らかになった「教材づくり」の観点に基づいた体育教材による実践研究を行うことにした（第 4 章）。

第 I 部では，教材という用語が曖昧に多義的に用いられる現状において，教材とはいかなるものかを明らかにすることから始めた。「教材づくり」とは，文字通り「教材をつくること」を意味するのであるが，教材をいかに捉えるかによって，解釈は変わってくる。そこで，本論文が対象とする「教材づくり」の方向性を明確にするために，保健体育科という教科を技能教科ではなく健康認識を育てる教科として捉えた高田典衛の考え方に注目して，本論文で対象とする保健体育科における「教材づくり」の視点を明らかにした。高田の研究方法は，個々の授

業を事例として観察、記録、分析、解釈、討議をした中から「高田4原則」¹⁹⁾という授業評価の観点を導き出し、授業改善を図った方法である。実践の場で生み出された理論に着目することにより、「教材づくり」を実践的に捉えることにした。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で導出された「教材づくり」の視点を含んだ「教材づくり」を行い、それによる実践研究を行った。保健からはエイズの教材を、体育からは創作ダンスの教材を取り上げた。本論文では、従来のように同一のフィールドに対して、授業者と研究者がそれぞれの立場から研究を行い、研究者が参与観察を行うのではなく、授業者と研究者が同一人物で、自己の実践を授業者＝研究者として立場を変えて振り返る方法を実施した。つまり、アクション・リサーチの方法論である。

アクション・リサーチとは、『新版 現代学校教育大事典』によれば、「1940年代後半から50年代前半にかけて、社会心理学者のレヴィン Lewin, K. によって提唱された実践的調査研究方法である。たとえば、人間関係の改善、集団活動の生産性の向上など、研究と実際の問題解決や具体的改革とを結びつける手法であり、問題の所在の探求→仮説・計画→第1段階の実験・行動→測定・評価・検証→再仮説・計画→第2段階の実験・行動……という螺旋的な循環過程をたどっていく」²⁰⁾と述べられている。

『新版 現代学校教育大事典』によれば、新しいアクション・リサーチでは、次の2点が注目されている。それは、「① 計画・実行・観察・省察のすべての局面において、調査過程に参加するすべての人は平等である。理論的、実践的、政策的議論に協同的に参加することが教育問題のアクション・リサーチを支える核である。② 教育実践を対象とするアクション・リサーチは一つの社会過程 **social process** である。そこでは、教育実践そのものだけでなく、実践が展開していくさまざまな状況に対して、参加した人々がどのような意味を付与しているかということも問題になる」²¹⁾と、述べられている。このうち本論では、①に着目し、実践者が研究者として実践研究に参画する方法をとる。以下、本論文では、「授業者＝研究者」と表記する。

注

1) 平成18年度世論調査「体力スポーツに関する世論調査」。

<http://www8.cao.go.jp/survey/h18/h18-tairyoku/index.html> (2014年9月21日取得)。

- 2) 平成 21 年度世論調査 「体力・スポーツに関する世論調査」。
<http://www8.cao.go.jp/survey/h21/h21-tairyoku/index.html> (2013 年 10 月 24 日取得)。
- 3) 「平成 23 年国民健康・栄養調査報告 第 3 部 生活習慣調査の結果」。
www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyou/dl/h23-houkoku-06.pdf (2013 年 10 月 28 日取得)。
- 4) 「平成 22 年度国民医療費の概況」。
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-iryohi/10/dl/keka.pdf> (2014 年 9 月 21 日取得)。
- 5) 「平成 23 年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況 第 1 章高齢化の状況」。
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/pdf/1s1s-1.pdf> (2014 年 9 月 21 日取得)。
- 6) 厚生労働省「国民の健康寿命が延伸する社会」に向けた予防・健康管理に関する取組の推進。<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000019326.html> (2013 年 10 月 21 日取得)。
- 7) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』東山書房, 2009 年, 11 頁。
- 8) 同上。
- 9) 伊藤俊夫編集代表・国立教育政策研究所社会教育実践センター『新訂 生涯学習概論』ぎょうせい, 2010 年, 3 頁。
- 10) 同上。
- 11) 高田典衛『体育授業研究シリーズ 2 よい体育授業の構図』大修館書店, 1983 年, 25 頁。
- 12) 同上。
- 13) 本論文では一般の教材づくりと区分して, 保健体育科の教材づくりに限定して「教材づくり」と表記する。また, 実践場面では「教材づくり」の用語の分類が困難であるので, 「指導技術」「教材開発」「教材研究」を含むこととする。
- 14) 取り上げられている種目には, マット運動, 持久走, ハードル走, 水泳, サッカー, ベースボール, 創作ダンス, 太極拳, ウィンタースポーツ, 野外活動などがある。
- 15) 研究内容は, 体育授業の因子分析や生徒の態度構成要因の分析, 及び選択制授業などである。

- 16) 研究内容は、保健授業における指導内容の紹介や健康調査などである。
- 17) 稲垣忠彦「学びの扉を開く教材づくりを」『悠』20巻2号、ぎょうせい、2003年、12-15頁。
- 18) 岩田靖「体育における教材づくりの意義と課題」『体育科教育』第38巻第1号、大修館書店、1990年、58-61頁、岩田靖「運動の楽しさと教材づくり」『体育科教育』第46巻第8号、大修館書店、1998年、16-18頁、岩田靖「体育になぜ教具が不可欠か」『体育科教育』第51巻第10号、大修館書店、2003年、10-13頁、岩田靖「改めて『教材づくり』の意義を問う」『体育科教育』第56巻第4号、大修館書店、2008年、56-59頁、岩田靖「授業のイメージに支えられた教材づくりの必要性」『体育科教育』第58巻第4号、大修館書店、2010年、60-63頁参照。
- 19) 「高田4原則」とは、「(1) 快適な運動」「(2) 技能の伸長」「(3) 明るい交友」「(4) 新しい発見」である(高田典衛『体育授業入門』大修館書店、1976年、26-28頁参照)。
- 20) 安彦忠彦他編『新版 現代学校教育大事典』ぎょうせい、2002年、20頁。
- 21) 同上。

本 論

第 I 部 保健体育科における「教材づくり」論

第1章 保健体育科における「教材づくり」の位置づけ

第1節 保健体育という教科の捉え方

第1項 保健という科目の捉え方

まず、保健について述べる。友定によれば、「わが国で『教科』として保健の授業が本格的に始まるのは戦後のことであるが、学校教育の中では明治5(1872)年の学制発布以来、何らかの形で『保健の教育』が行われてきた」¹⁾。戦後、保健の本格的な実施に影響を与えたことは2つある。第1は、環境衛生の担い手を育成する必要があったということであり、第2は、日本国憲法、教育基本法(旧法)の制定に伴って「保健学習」が教育課程に含まれたことである。第1の環境衛生の担い手を育成する必要性としては、友定によれば、戦後「生活環境の悪化に伴う伝染病の蔓延などに対処するための公衆衛生活動が活発となり、学校も衛生知識の普及・啓蒙の場、そして環境整備の担い手として期待されたことによる影響である」²⁾。第2の点については、友定によれば、日本国憲法、教育基本法(旧法)の制定の下で「『心身ともに健康な国民の育成』が教育目標となり、米国教育視察団の勧告もあって保健学習の必要性が指摘され、『保健体育科』の誕生へと」³⁾進んだことである。友定によれば、保健の教科は、「目標・内容からみると、健康的な生活の実践力を育成する公衆衛生教育から健康認識を育てる保健科学教育へと進んできた。現代においては、『共生』や『社会的参加』などの新たな視点を加え、健康認識と実践力の育成・統合をめざした教科内容構成が課題となっている」⁴⁾。つまり、保健においては、「心身ともに健康な国民の育成」を図る実践力の育成が求められているといえよう。

第2項 体育という科目の捉え方

次に体育について述べる。体育⁵⁾の捉え方を、他教科との関連で考えると大別して2つの考え方がある。第1に、広岡亮蔵の「第二義的」⁶⁾教科とする捉え方である。第2に、細谷俊夫の技能的教科⁷⁾とする捉え方である。第1に、広岡は、国語・算数を一義的な教科、体育を二義的と捉え、「国語と算数の能力は、社会、理科、体育などの他教科のほとんどを横断して、基礎的位置を占めている」⁸⁾、と述べている。つまり、「第二義的」な体育という教科には、第一義的な言語能力と数量能力が含まれていると言えよう。第2に、細谷は、体育を他教科と並列的に捉えてはいるが、技能的教科の分類に含めている。細谷によれば、「十八世紀以後の自然科学の発達、それに基づく生産技術の進歩は、理科、地理、歴史などと並んで

図画，工作，音楽，体操，裁縫のような技能的教科を学校教育に導入する機運を作るようになった。こうして第二の付加的教科が生まれたのである。こうした付加的教科の組織化にはペスタロッチーの直観教授の思想やフレーベルの活動主義教授の思想が多大の影響を与えている⁹⁾と述べている。細谷は、「これらの技能教科は，芸術的表現活動もしくは実用的製作活動を主とする教科である」¹⁰⁾，と述べている。以上のように，体育という科目は，「第二義的」，技能的と捉えられているといえよう。

次に，体育においてつける学力を岩田にしたがって分類すると次の4つに大別される。第1に，高田典衛や小林篤のように，体育科教育において認識的側面を強調する¹¹⁾立場である。第2に，荒木豊や内海和雄のように，学力を計測可能性，あるいは評価可能性を軸として，その到達度を客観的に把握することによって，教科内容の科学的組織化や指導法の系統化・順次性を実質的に追求しようとする¹²⁾立場である。第3に，小林一久，中森孜郎・久保健のように「体育科教育の教科としての機能(働きかけの構造)を識別し，構造化しながら，体育で育てるべき身体的・人格的諸能力や学習者の内面的・主体的側面などとの内的関連のなかで学力を論じようとする」¹³⁾立場である。第4に，草深直臣のように，「スポーツの主体者像の追求から，体育科教育において獲得させるべき諸能力を吟味し，教科目標・教科内容を捉え直そうとする」¹⁴⁾立場がある。岩田によれば，高橋健夫も「『学力』という名辞・概念は用いていないが，『スポーツに自立する人間の形成』という教科目的から，教科目標・学習内容を論じた」点で¹⁵⁾，第4の立場に属するといえる。

以上4つの分類について岩田にしたがって検討する。岩田によれば，「『学力』把握とその背後にある問題意識を，先の『学力』問題への接近のすじ道と関係づけてみるならば」¹⁶⁾，第2と第3の立場は主として「『教授学的視点』からのアプローチ」¹⁷⁾であり，「第4は，社会科学的な分析を通した『学校論的視点』からのアプローチ」¹⁸⁾を内包しているものといえよう。岩田靖は，第1の立場として掲げた「認識的側面の強調」¹⁹⁾は，他の第2～第4の立場にも共有されているものである²⁰⁾と述べている。岩田によれば，これは「学力」の学校論的把握の一つの重要な視野であるといえる²¹⁾。

以上のことから，「体育科教育において認識的側面を強調する立場」の高田典衛や小林篤は，体育で身につける学力を健康づくりへの認識能力と捉える基盤を築いたといえよう。

第3項 学習指導要領における保健体育の捉え方

ここでは、平成20年、平成21年に告示された学習指導要領に示されている保健体育の捉え方について述べる。

『小学校学習指導要領解説 体育編』においては、次のように、運動領域と保健領域において、改善の具体的事項が示されている。『小学校学習指導要領解説 体育編』によれば、「運動領域については、幼児教育との円滑な接続を図ること、体力の低下傾向が深刻な問題となっていることや積極的に運動する子どもとそうでない子どもの二極化への指摘があること、各学年の系統性を図ることなどを踏まえ、低学年を『体づくり運動』、『器械・器具を使つての運動遊び』、『走・跳の運動遊び』、『水遊び』、『ゲーム』及び『表現リズム遊び』で構成し、中学年を『体づくり運動』、『器械運動』、『走・跳の運動』、『浮く・泳ぐ運動』、『ゲーム』及び『表現運動』で構成する。高学年については現行どおりの構成とする」²²⁾と示されている。

保健領域については次のように述べられている。「保健領域については、身近な生活における健康・安全に関する基礎的な内容を重視するという観点から、指導内容を改善する。その際、けがの防止としての生活の安全に関する内容について取り上げ、体の発育・発達については、発達の段階を踏まえて指導の在り方を改善する。また、健康な生活を送る資質や能力の基礎を培う観点から、中学校の内容につながる系統性のある指導ができるよう健康に関する内容を明確にし、指導のあり方を改善する。低学年は、運動領域との関係を踏まえ、健康と、運動のかわりなど、運動領域の運動を通して健康の認識がもてるよう指導の在り方を改善する」²³⁾と示されている。また、「第3学年・第4学年では、『毎日の生活と健康』及び『育ちゆく体とわたし』の指導内容を明確にし内容を構成した。また、第5学年・第6学年では、『心の健康』、『けがの防止』及び『病気の予防』を構成した」²⁴⁾と示されている。

『中学校学習指導要領解説 保健体育編』においては、次のように体育分野と保健分野において改善の具体的事項が示されている。

「体育分野については、小学校高学年からの接続及び発達の段階のまとまりを踏まえ、体育分野として示していた目標及び内容を、『第1学年及び第2学年』と『第3学年』に分けて示すこととする。また、多くの領域の学習を十分させた上で、その学習体験をもとに自らが更に探求したい運動を選択できるようにするため、第1学年及び第2学年で、『体づくり運動』、『器械運動』、『陸上競技』、『水泳』、『球技』、『武道』、『ダンス』及び知識に関する領域をすべて履修させ、第3学年では『体づくり運動』及び知識に関する領域を

履修させるとともに、それ以外の領域を対象に選択して履修させることを開始する。第3学年における選択については、運動に共通する特性や魅力に応じて、『器械運動』、『陸上競技』、『水泳』、『ダンス』のまとまりと『球技』、『武道』のまとまりからそれぞれ選択して履修することができるようにする。その際、『球技』については、取り扱う運動種目は原則として従前どおりとするが、特性や魅力に応じて、ゴール型、ネット型、ベースボール型に分類し示すこととする。なお、すべての生徒に履修させることとなる『武道』と『ダンス』については、これまで以上の安全の確保に留意するとともに、必要な条件整備に努めるなどの取組が必要である」²⁵⁾と、示されている。

「保健分野については、個人生活における健康・安全に関する内容を重視する観点から、二次災害によって生じる傷害、医薬品に関する内容について取り上げるなど、指導内容を改善する。また、自らの健康を適切に管理し改善していく思考力・判断力などの資質や能力を育成する観点から、小学校の内容を踏まえた系統性のある指導ができるよう健康の概念や課題に関する内容を明確にし、知識を活用する学習活動を取り入れるなどの指導方法の工夫を行うものとする」²⁶⁾と、示されている。同解説には、具体的な保健の学習内容として、1年生では、「(1)心身の機能の発達と心の健康」、2年生では「(2)健康と環境」、(3)傷害の防止」、3年生では「(4)健康な生活と疾病の予防」²⁷⁾が示されている。

『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』においては、次のように改善の具体的な事項が示されている。

「科目『体育』については、生徒の運動経験、能力、興味、関心等の多様化の現状を踏まえ、各学校が生徒の実情に応じて、自ら運動に親しむ能力を高め、卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにするため、入学年次においては、中学校第3学年との接続を踏まえ、『体づくり運動』及び知識に関する領域を履修させるとともに、それ以外の領域については『器械運動』、『陸上競技』、『水泳』、『ダンス』のまとまりと『球技』、『武道』のまとまりからそれぞれ選択して履修することができるようにする。また、その次の年次以降においては、それぞれの運動が有する特性や魅力に深く触れることができるよう『体づくり運動』及び知識に関する領域を履修させるとともに、それ以外の領域については『器械運動』、『陸上競技』、『水泳』、『球技』、『武道』、『ダンス』から選択して履修することができるようにする。その際、『球技』については、取り扱う運動種目は原則として現行どおりとするが、特性や魅力に応じて、ゴール型、ネット型、ベースボール型に分類し示すこととする」²⁸⁾と、示されている。

「科目『保健』については、個人生活及び社会生活における健康・安全に関する内容を重視する観点から、指導内容を改善する。その際、様々な保健活動や対策などについて内容の配列を再構成し、医薬品に関する内容について改善する。また、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し改善していく思考力・判断力などの資質や能力を育成する観点から、小学校、中学校の内容を踏まえた系統性のある指導ができるよう健康の概念や課題に関する内容を明確にし、指導のあり方を改善する」²⁹⁾と、示されている。その学習内容としては、「(1) 現代社会と健康」, 「(2) 生涯を通じる健康」, 「(3) 社会生活と健康」³⁰⁾が示されている。

以上の改善の具体的事項は、保健体育科の目標の改善と関連している。小学校体育科の目標は、「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しくあかるい生活を営む態度を育てる」³¹⁾と、示された。

中学校保健体育科の目標は、「心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践をとおして、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる」³²⁾と、示された。

以上により、「義務教育段階における教科の目標として一層の関連性」³³⁾が示された。

高等学校保健体育科においては、中学校保健体育の目標をより発展させた目標が示されている。それは、「心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的な実践をとおして、生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる」³⁴⁾と、示されている。

以上のことから、高等学校保健体育科においては、小・中学校の学習内容を発展させて「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力の育成」, 「健康の保持増進のための実践力の育成」及び「体力の向上」の「三つの具体的な目標が相互に密接に関連していることを示すとともに、保健体育科の重要なねらいであることを示した」³⁵⁾と、されている。このうち、本論では、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力の育成」, という目標に着目する。

学校種別	小学校						中学校			高等学校		
	体育						保健体育			保健体育		
	1・2	3・4	5・6	1	2	3	1※	2※	3※			
目標	心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しくあかるい生活を営む態度を育てる。						心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践をとおして、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。			心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的な実践をとおして、生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。		
改訂の趣旨	生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し改善を図る						①生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを一実現することを重視する。 ②心と体をより一体にとらえ、引き続き保健と体育を関連させ指導する			①豊かなスポーツライフを実現する資質と能力を育成する観点から、発達段階に応じた指導内容の明確化・体系化 ②卒業後に一つの運動やスポーツを継続できるように、中学3年間との連携を図る ③個人生活・および社会生活における健康安全に関する内容を再構成		
体育・保健体育	体づくり運動			A体づくり運動			○	○	○	○	○	○
	器械・器具を用いた運動遊び	器械運動		B器械運動(種目選択)			○			BCDGから①以上選択	BCDE FGから②以上選択	BCDE FGから②以上選択
	走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動	C陸上運動(種目選択)			○					
	水遊び	浮く・泳ぐ運動	水泳	D水泳(種目選択)			○					
	ゲーム		ホール運動		E 球技			○				
					F 武道			○				
	表現リズム遊び	表現運動			Gダンス(種目選択)			○			BCDGから①以上選択	BCDGから①以上選択
					H 体育理論			○	○	○	○	○
				保健			(1)	(2), (3)	(4)	(1)現代社会と健康, (2)生涯を通じる健康, (3)社会生活と健康		
(注) 1 小学校の各運動領域及び保健は必修。中学校、高等学校は、○印の領域等必修。 2 高等学校の学年の1※、2※、3※は、それぞれ「入学年次」、「その次の年次」及び「それ以降の年次」を指す。 3 保健の中学校(1)から(4)は、「(1)心身の機能の発達と心の健康」、「(2)健康と環境」、「(3)傷害の防止」、「(4)健康な生活と疾病の予防」を指す。												

(注：文部科学省『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』東山書房、2009年、105頁の表に、論者が教科目標を付け加えたものである。)

第2節 保健体育科における「教材」の特性

第1項 教材に関する論考

『日本国語大辞典』によれば、教材の「教」、「教える」とは、「① 行動や身の処し方などについて注意を与えて導く。いましめる。さとす。② 知っている事や自分の気持、要求など

を他の人に告知させる。③ 知識，技芸などを身につけるようにさせる。教授。」³⁶⁾とある。「材」とは、「② 能力。才能。持ち前。才。また，それを持っている人。③ 製造，加工のもとになる物質。原料。材料。」³⁷⁾とある。つまり，教材とは，辞書的な意味では知識，技芸などを身につけるように，他の人に告知らせて行動や身の処し方などについて注意を与えて導くためのものとなる物や材料，といえるだろう。

教材の辞書的な意味を踏まえて考えると，教授学習場面での教材は，教科内容を学習者に身につけさせるために，不可欠のものといえよう。

教材を授業場面に限定して考えれば，山口が指摘するように，「教師の教授活動と学習者の学習活動が教材を媒介にして一体化されることになる」³⁸⁾。つまり，教材は，教科内容の概念や認識を形成させるために，教師と生徒との間を「繋ぐ物」といえる。このように，教材は，授業を構成する三要素（教師・教材・生徒）のうちのひとつとして，授業の成立と展開に媒介的な役割を果たすといえる。そこで，本論文では「教材」とは，「教師から生徒へと間接的に受け渡す媒介物であり，教育的な意図を伴って両者を繋ぐ物」と定義する。

第2項 保健体育科における「教材」の特性

ここでは，保健と体育に分けて「教材」の特性について述べる。保健における「教材」の特性として，数見は「現在および将来を生きる子どもたちにとって，ある意味での実用性が必要であるがゆえに，『後では取り返しがつかない(今まさに教えなければ価値を持たない)教材』と『やがて必要になってくる(将来を展望したとき価値をもってくる)教材』」³⁹⁾の2つがあると述べている。つまり，小・中・高等学校の発達段階に即して，現代社会が抱える健康課題を将来展望との関わりで取り扱うところに特性があるといえよう。一方，体育における「教材」の特性として，江刺は，「昭和30年代以降の学習指導要領に顕著に見られるもので運動は教材でもあり，学習内容でもあるという見方」をしている⁴⁰⁾。要するに，教育内容と「教材」は一体化しているという見方である。この見方に対して，1980年代の後半には，体育における「教材」を教師の教授行為の目的意識性を前提として，捉える見方が現れている。岩田靖は，「『教材』とは，学習内容を習得するための手段であり，その学習内容の習得をめぐる教授=学習活動の直接的な対象になるものである」⁴¹⁾と，述べている。つまり，岩田は，「教材とは，常に『なにを』教えようとしているのかが問われるのと同時に，その『手段』としての質が問題とされる」⁴²⁾と指摘しているのである。このように体育における「教材」は，学習内容と「教材」とが一体であるところに特性がある。

以上から、「教材」は、保健においては過去と未来を繋ぐ「媒介物」であること、体育においてはわかることとできることを繋ぐ「媒介物」であることが示されたといえよう。

第3節 保健体育科における「教材づくり」とは何か

第1項 保健における「教材づくり」

保健における「教材づくり」は、数見によれば、「何がしかの観点から、教材を教師自らの意図のもとに『つくる』、つまり創造していく姿勢を指している。もちろん、生徒に教科書を持たせているのに、それを無視してたいした考慮もなく、勝手に何を教えてもよいということではない。現代社会の課題から将来を生きる子どもたちにどんな力をつけておく必要があるかを十分熟考したうえでの創造であるべきである」⁴³⁾。さらに、数見は、「教材は教師によって選定・研究され、授業化の構成や工夫もなされて初めて生徒に生きるものになるという意味が込められているのだということである。つまり、『つくる教材』という発想には、内容（何を）と方法（いかに）を統合したレベルでの教材化を、創造的に構築していくものとしてとらえるプロ教師としての果たすべき役割、力量、責務が含意されている」⁴⁴⁾と述べ、教師の価値観が反映していることを指摘している。つまり、「教材づくり」は、現実に生きる子どもたちに、何をこそ教えるべきかという教育的価値から出発しているといえよう。

また、数見は、「教材づくり」から授業構想づくりへの手順について、4点述べている。第1に、教材の選定と題材の明確化を図る段階である。数見によれば、「『教材づくり』を意識する立場とは、たとえ教科書内容を扱う場合でもそれを所与のものとしないうで、教師の主体性のもとに何を子どもにメッセージし、どんな力をつけたいと願うのかを明確にする段階である」⁴⁵⁾。第2に、教師の役割として、教材研究をして子どもを変える大切さについて考える段階である。数見によれば、「その教材の背景になっている保健の諸科学に照らしながら、素材になっている問題に、教師のありつたけをだして問いかけ、学ぶ教材研究をすることである。子どもを変え、健康に生きる力になるものは、教育内容であり教材の質であるが、それを仲介するのは教師である」⁴⁶⁾。このことに気づき、子どもを変える大切さについて考える段階である。第3に、子どもたちの実態や意識を想定して、一定の時間枠の中で授業構成をする段階である。数見によれば、「子どもを学習主体にするには、タネやシカケを仕組み、しっかり考えさせながら腑に落としめていくような展開を練る」⁴⁷⁾が必要である。この段階は、具体的な教具や実験などの工夫を検討する段階でもある。第4は、「授業前の最後の準備段階として

の具体的な授業構想を明確にする段階」⁴⁸⁾であり、授業案に仕上げていく段階である。

保健における「教材づくり」は、学習者に、現象的事実として生起している健康問題の本質的理解を促すような科学的な知見を、「教材」という明確な形で提示することにより、主体的な学びの準備状態を作ることといえよう。

第2項 体育における「教材づくり」

岩田は、「教材」そのものから「教材づくり」の基本的視点を捉え、「その教材が、習得されるべき学習内容を典型的に含み持っていること」、「その教材が子ども（学習者）の主体的な諸条件に適合しており、学習意欲を喚起することができること」⁴⁹⁾と、指摘している。岩田は、「教材づくり」は、しばしば「教材構成」、「教材開発」といった用語で説明されることがあることから、「『素材』としてのスポーツ種目や技を、教え学ばれるべき『学習内容』を見通しながら、学習者が取り組み、チャレンジしていく直接的な課題に再構成(加工・修正)していくプロセス」⁵⁰⁾を、「教材づくり」と定義している。

岩田は「教材づくり」の位置づけを授業構想の中で、次のように述べている。岩田によれば、「教材づくり」は「教師が授業を構想する際の諸側面、つまり、『なんのために、なにを、なにで、どのように教えるのか』についての一連の教授学的思考の中で行われる」⁵¹⁾教授行為である。その具体として岩田は、次の6点をあげている。「単元や授業の目的・目標の検討(子どもたちにどんな能力を育てるのか)」、「授業で取り上げる素材としてのスポーツの分析(対象となるスポーツの特性や魅力)、本質的な課題性、その運動を成り立たせている技術・要素をどのように理解するのか」、「学習者の主体的条件(興味・関心や発達段階、先行の学習経験)、および指導に必要な時間的・物理的な条件の考慮」、「学習内容の抽出・選択(『なにを』教えるのか)」、「学習内容を教えるための教材・教具の構成(『なにで』教えるのか)」、「学習内容の教授=学習の展開に関する検討(どのような発問を準備するのか、いかなる学習形態を選択するのか)」⁵²⁾である。岩田は、これらの行為を総称して「教材研究」と呼ばれることが多い、と述べている⁵³⁾。岩田は、「『教材づくり』こそが『教材研究』なのである」⁵⁴⁾として、「教材づくり」と教材研究を同義として取り扱っている。

高田は、「教材づくり」について次のように述べている。高田は「本当の意味の教材」を成立させるためには、「運動の持つどんな点が子どもをひきつけるのか、そしてそれはなぜか、運動の特性を子どもの立場で分析し、それぞれの本質を受けとめやすいように構成しなければならない」と指摘している⁵⁵⁾。岩田が「教材づくり」と教材研究を同義として取り扱っている

のに対し、高田は、子どもの立場から「教材づくり」の必要性を述べているといえる。

以上のように、保健体育科における「教材づくり」には様々な観点があるが、本論文では、学習者の喜び、楽しさ、面白さを「教材づくり」の中核とする高田の「教材づくり」論に依拠することとする。

注

- 1) 友定保博「わが国の保健科教育の歩み」森昭三・和唐正勝編著『新版 保健の授業づくり 入門』大修館書店，2002年，19頁。
- 2) 同上書，24頁。
- 3) 同上。
- 4) 同上書，19頁。
- 5) 本論文では、「体育という科目」の表記は、文部科学省『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』（東山書房，2009年）に従って記載した。『小学校学習指導要領解説 体育編』では、体育は教科と記載してある。広岡亮蔵『教育学著作集第1巻 学力論』（明治図書，1968年）と細谷俊夫『教育方法 第4版』（岩波書店，2006年）では、体育を教科と記載していたので、それに従って教科と記載した。
- 6) 広岡亮蔵『教育学著作集第1巻 学力論』明治図書，1968年，83頁。
- 7) 細谷俊夫『教育方法 第4版』岩波書店，2006年，105頁。
- 8) 広岡亮蔵，前掲書，82頁。
- 9) 細谷俊夫，前掲書，105頁。
- 10) 同上。
- 11) 岩田靖「体育における学力論の出現と発展」『戦後体育実践論第3巻 スポーツ教育と実践』創文企画，1998年，199頁。
- 12) 同上書，199-200頁。
- 13) 同上書，200頁。
- 14) 同上書，201頁。
- 15) 同上書，202頁。
- 16) 同上。
- 17) 同上。

- 18) 同上。
- 19) 同上。
- 20) 同上。
- 21) 同上。
- 22) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 体育編』東洋館出版社，2008年，3-4頁。
- 23) 同上書，4頁。
- 24) 同上書，8頁。
- 25) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 保健体育編』東山書房，2008年，4頁。
- 26) 同上書，5頁。
- 27) 同上書，148-163頁参照。
- 28) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』，4頁。
- 29) 同上。
- 30) 同上書，111-121頁参照。
- 31) 文部科学省，小学校学習指導要領，平成20年3月告示。
- 32) 文部科学省，中学校学習指導要領，平成20年3月告示。
- 33) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』，6頁。
- 34) 文部科学省，高等学校学習指導要領，平成21年3月告示。
- 35) 同上。文部科学省『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』，6頁。
- 36) 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版 第二巻』小学館，2006年，1130頁。
- 37) 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版 第五巻』小学館，2006年，1249頁。
- 38) 山口満「教材とは」日本教材学会『日本教材学会設立20周年記念論文集「教材学」現状と展望』（上巻），協同出版，2008年，22頁。
- 39) 数見隆生「保健の教材づくりとそのあり方」森昭三・和唐正勝編著『新版 保健の授業づくり入門』大修館書店，2002年，144頁。
- 40) 江刺幸政『体育教育における教材構成の理論的基礎』創文企画，1999年，154頁。
- 41) 岩田靖『体育の教材を創る－運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて』大修館書店，2012年，19頁。

- 42) 同上書，19-20 頁。
- 43) 数見隆生，前掲書，146 頁。
- 44) 同上。
- 45) 同上書，154 頁。
- 46) 同上。
- 47) 同上書，155 頁。
- 48) 同上。
- 49) 岩田靖「教材づくりの意義と方法」高橋健夫編著『体育の授業を創る』大修館書店，2007 年，30 頁。
- 50) 岩田靖『体育の教材を創る－運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて』，20 頁。
- 51) 同上。
- 52) 同上。
- 53) 同上書，21 頁。
- 54) 同上。
- 55) 高田典衛『子どものための体育科教育法－体育科の授業と教材－』大修館書店，1967 年，頁数記載なし。

第2章 保健体育科における「教材づくり」論

—高田典衛を中心に—

第1節 高田の体育授業観と略歴

出原によれば、体育の「教材づくり」において、『子どものために』という精神を貫き通した¹⁾高田典衛(1915-1993)の理論を取り上げる理由は、3点ある。

第1に、体育を技能を高める教科ではなく、「健康のための『学力』を高める科目」²⁾として捉えていることである。高田は、1953(昭和28)年から3度学習指導要領の体育科・保健体育科の改訂に関わってきたことから、健康に着目したと考えられる。また、小林によれば、高田の生い立ちにおいて病気体験があり、そこから健康であることを重要視するようになったと考えられる³⁾。第2に、高田は実践の中から体育授業4原則を創出し理論化している点である。高田の体育授業4原則は、多くの研究者が関心を寄せているなど⁴⁾しており、現在の体育授業研究の礎のひとつといえる理論である。高田が導き出した体育授業4原則を、「高田4原則」と表記する。第3に、岩田によって、体育の授業研究において、高田が「教材づくり」という用語を前面に押し出したとされている点である⁵⁾。

ここで高田の略歴を述べる。高田は、1941(昭和16)年、25歳で東京高等師範学校を卒業して、埼玉県立小川高等女学校に奉職したが、2年足らずで母校の附属小学校に招聘された。約20余年の東京高等師範附属小学校勤務(学制改革で後に東京教育大学附小、さらに後に筑波大学附小)のうち、5年間は軍隊で生活を送った。その後、教頭になった彼は、1968(昭和43)年53歳で文部省(当時)体育官に異動して6年間勤めた。その後、1974(昭和49)年筑波大学体育科学系教授として転出して、同大学で63歳の定年まで勤務した。さらに、1979(昭和54)年には、横浜国立大学へ異動して65歳の定年まで勤務し、1981(昭和56)年に退職した。その後は研究・執筆活動に専念していたが、1986(昭和61)年、脳梗塞で倒れ、回復することなく1993(平成5)年、78歳で永眠した⁶⁾。

高田は78年の生涯において、文部省(当時)で学習指導要領の改訂に関わったり、大学教授などを歴任したりしただけでなく、小学校から大学まで40年の教員生活の傍ら、膨大な著作を執筆した。高田は、『子どものための体育』(明治図書、1963年)をはじめとして、『子どものための体育科教育法』(大修館書店、1967年)、『児童体育入門』(明治図書、1967年)など、「単著23冊、編書48冊、共著32冊、共編著9冊、指導書6冊、監修23冊と合計

141冊もの膨大な著書を執筆した」⁷⁾。また、月刊誌『体育科教育』『体育の科学』では、編集に携わるとともに健筆をふるった。『体育科教育』においては、1968年から1986年の間、100回以上の連載を行った。教育全般の分野では斎藤喜博（1911-1981）と「同じ位置を体育科教育の分野で占めていたのが高田典衛であった」⁸⁾と、小林は指摘している。高田の著作は、小林によれば、「生き生きと学習する子どもの姿や、そのような子どもを指導する教師の姿など、ポイントを的確に捉えた授業風景の写真が数多く載せられていることも大きな特色」⁹⁾であった。また、全国の多くの小学校を訪問して実践を記す高田の著作は、現場の実践者から圧倒的な支持を得て、「『授業の神様』とまで呼ばれ」¹⁰⁾、優れた体育授業実践研究を続けてきたのである。以上から、実践者でもあり研究者でもあった高田の「教材づくり」論を取り上げる。

第2節 高田における「教材づくり」の視点

保健体育科を、高田は「健康のための学力を高める科目」と捉えている。高田の「教材づくり」論の根底には、次の3点がある。第1は、「子どものために」という精神を貫きとおした児童中心主義である。第2は、児童中心主義の根底にある「弱者の視点」に立っていることである。高田は、先輩教師から指導法の原点は体や心に障害を持つ子どもを教えること、初めて分かることと論されたこと¹¹⁾、『大関松三郎詩集 山芋』（1951年）に所収されている「巾とび」¹²⁾の詩に触発されたことから、弱い子やできない子に寄り添うことの大切さを認識したのである。第3は、保健体育科は、健康のための「認識」を育てる教科だと考えていることである。高田は体育では、運動技能を身につけるだけでなく、運動に関連した実践的な知識も学ぶことから、他教科と同様に体育も認識教科であると述べている¹³⁾。以下、それぞれについて詳しく述べる。

第1に、「子どものために」という精神を貫きとおした児童中心主義とは、「学習者の側から見て体育科のよい授業とはどんなものか、その実態を明らかにすること」¹⁴⁾に、端を発している。この観点は、作家の小田が、平和問題を世界的歴史的な視野の中で捉える見方を「鳥瞰図」的な見方とすれば、庶民一人一人の悩みや望みを知ることを通して見る見方を「虫瞰図」^{ちゅうかんず}的な見方とした¹⁵⁾、と記したことに着想を得たとされる。高田は、「虫瞰図」的な見方という表現を援用して、授業一般、子ども一般ではなく、一人一人違う子どもにとっての授業であるという「虫瞰図」的な文脈から実践研究を進めて行ったのである。

第2に、高田の児童中心主義の根底にある弱者の視点は、次の2点に触発されている。まず、東京教育大学附属小学校時代に先輩教師から「指導法の原点は体や心に障害を持つ子供を教え

てみてはじめて解るものだ。お前もその積りで取り組んでみよ」¹⁶⁾と促されたことによる。次に、戦後間もない頃、『大関松三郎詩集 山芋』(1951年)に所収されている「巾とび」¹⁷⁾の詩を読み、「体に障害を持つ作者が、体育授業に対して深い悲しみを持っていること」¹⁸⁾に触れたことである。高田は、この詩を読んで体育の楽しさとは何かということを真剣に考え、授業のたびごとに子どもに感想を書かせては整理し続けていたのである。この考え方は「出来ない子を大切にす」¹⁹⁾弱者のまなざしへと向かったと考えられる。

第3に、高田は、体育における学力のとらえ方を他教科と同様に、健康のための「認識」を育てる教科と考えていることである。高田は体育を、運動技能を身につけるだけでなく、運動に関連した実践的な知識を学ぶ認識教科であると捉えている。つまり、「運動を見抜く力、分析する力、そしてそれを自分の運動に活用する力、その結果自分の体を変容させ、体を器用にしたり、頑健にしたりしていく力、それを教師から教えられたり、自分で見たり考えたり、友人と助け合ったりして、実践を通して理解していく力」²⁰⁾を体育の学力としている。高田の学力論の中核を為す「認識」は、あくまでも子どもの側から見た楽しさに由来する認識であり、「技術認識や文化的認識というよりはもっと素朴な生活認識に近いものであった」²¹⁾。

高田が生活レベルで体育の学力を捉えていた事例として、逆上がりができなかった体の弱い子どもの原因を究明して、成長させた過程をあげることができる。高田は、「おとなしい、無口な子で気立てのやさしい」²²⁾Y君が、いつも逆上がりの練習をしているにもかかわらず、できないことに疑問を抱き体力診断をした。すると、懸垂と腹筋の力がゼロであることが示唆された。さらに、保護者に生育歴まで遡って問い合わせると、Y君は、幼少時から先天的に足首関節が必要以上に曲がり、ふんばりがきかないことがわかった。その対策として、全身の筋力強化以外に方法がないことが示唆された。そこで、高田がY君に願ったことは、「全身的で活発で多彩な運動」²³⁾をすることであった。その後、そうした運動を続けたY君は、縄跳び、手押しぐるま、ボール遊びを次々行って、5年生になる頃には、弱々しさもとれてたくましい子に成長したのである。筋力の弱い子の原因を生育歴まで遡って調査して、心身ともに成長を促したことは、小学校の学級担任であるがゆえにできることであり、子どもの適時性を把握した生活認識に根ざした指導だといえよう。

この事例から、生徒の健康認識を高める学力を習得させるためには、教師は、個々の技術の師範やその要領を説明して鍛え上げるだけの方法ではなく、子どもの立場から「教材としての運動の構造を多面的な角度から捉え、その中の基礎的な動きの内容や意味」²⁴⁾、および一般的な原則を身体活動を通して理解させていく「教材づくり」が求められるといえる。

以上から、高田の「教材づくり」論は、子どもに健康認識を高める学力を習得させるために、子どもの立場から、子ども自身の「内面で文化が正確に受容され、創造的に獲得され、新たな自己実現が用意される」²⁵⁾、実践に基づいた理論だと捉えることができるであろう。

第3節 「高田4原則」とは何か

高田の「教材づくり」論は、「高田4原則」に集約されている。「高田4原則」とは、高田が実践者として「学習者の側から見て体育科のよい授業とはどのようなものか、その実態を明らかにすること」²⁶⁾をめざして、熟達の教師に指導を仰いだり、子どもに授業の感想を求めたりした中から創出した4つの事柄である²⁷⁾。「高田4原則」は、体育授業における楽しさとは何かを根本から問い直したところから始まっている。高田によれば、「小・中・高・大学と共通して学習者が望むよい授業には四つの条件が存在する」²⁸⁾。高田は、「教師の側から見たよい授業の姿と並んで、児童生徒の側から見た授業の姿も知ることで、これがよい授業を実践し、体育嫌いを作らないための授業の基礎知識である」²⁹⁾と論述している。「高田4原則」は、学習者に応じて教師自身が「教材」を工夫し、学習者とともに授業をつくっていくことの重要性を指摘しているといえよう。

次に、小林³⁰⁾、伊藤³¹⁾が、高田の体育授業研究40年の集大成と評している「授業研究シリーズ」全5巻の中から、「高田4原則」が詳述されている『体育授業研究シリーズ2 よい体育授業の構図』(1983年)を取り上げて、「高田4原則」について詳しく述べる。まず、ここでは「高田4原則」に通底する「楽しさ」の理論的根拠を示し、次いで個々の原則について論述する。

高田は、子どもの側から見た「高田4原則」に通底する「楽しさ」の理論的根拠を、カイヨワの『遊びと人間』の「パイディアとルドウス」³²⁾の対概念を援用して説明している。パイディアとは、「子供らしさを表す遊戯というギリシャ語」、遊びの性質の変化による縦の分類を示すことばである。「遊びの本能の自発的な現われを包括することば」³³⁾であり、解放、気晴らし、気まま、自由などを含意している。一方、ルドウスとは、「ラテン語では、競技、試合という意」であり、「パイディアの無秩序で気紛れな性格とは相補関係にある傾向として、対局に考えられる要素を表わす」。「故意に作り出し、勝手に定めた困難を解決して味わう喜びの原動力となる」³⁴⁾要素である。困難、統制、鍛錬、創造などを含意している。高田は子どもの実態や

成長に応じた指導を、カイヨワの「遊び」の視座から捉えて、体育における楽しさを追求していたのである。

学習者が望むよい体育授業には、「楽しさ」が根底に存在しており、それを実践することは「教師の手によって可能であることを、私は授業実践例によって確認することができた」³⁵⁾と、高田は述べている。以下、「高田4原則」のそれぞれについて論述する。

(1) 「動く楽しさ」

高田は、「動く楽しさ」について、「体育科でなければ教えることのできない認識能力の一つに、この『動く楽しさ』があることに着目し」³⁶⁾、この楽しさの認識能力が育てられた時、学習者は健康を目指す授業に真剣に取り組み、やがて生活全般にまでも実践が及んでいくようになる、と述べている。

高田は、授業後の子どもたちの「今日は、苦しかったが、楽しかった」という一見矛盾した発言の中に、精一杯運動した者だけが味わう爽快感の表現を見いだしていた。その事例として、中学3年の女子生徒への走跳教材による体操の授業が示されていた。生徒が好むリズムカルな音楽をふんだんに取り入れ、走ったり跳んだりした運動を行った後、脈拍の測定、歩数計による総距離の測定、疲労度の自覚調査を記録することにより、「一人一人がどれだけの距離をどんなふうに通ったり跳んだりして動き通したかを知ることができるように設計された授業」である³⁷⁾。「この授業によって、『動く』ということがどんなに生き生きした喜びを与えてくれるものであるか、そしてその実態はどんなものであったかについて、生徒はみな鮮明に認識させられている」³⁸⁾と、高田は述べている。この授業では、音楽を用いることにより情動への躍動感が醸し出され、動く楽しさとはどんなものか、健康に生きるとはどんな状態を指すのかを学習者が体験していた。さらに、脈拍や走距離の数値の変化は、自己の健康状態を省察する上で役立つといえる。高田は、このように精一杯動く体験を通して、健康への認識能力は確実に育っていく、と述べている³⁹⁾。

(2) 「伸びる楽しさ」

高田は、「伸びる楽しさ」について、「学習者が教師から上達や進歩を認定してもらうことによって育てられていくように思う。教師は事前に一人一人の状態を可能な限りよく調査しておき、その活動を丹念に観察したり測定したりして、そこから僅かな伸びも察知して、『よくがんばったな』と認め、伸びが明白なときには『上手になったな』と判定してやり、『よし、いいぞ』とか『おっ、いいぞ』とかと言って、共に喜んでやる必要がある」⁴⁰⁾と、教師の肯定的な指導言語の必要性を述べている。また、高田は、「学習者が体育授業にシッ

りした態度を示すようになるには、伸びる楽しさ、変わる楽しさ、この認識能力を育てること無しにはあり得ないことがはっきりしてきた」⁴¹⁾として、学習者の身体認識の変化を体験させる「教材づくり」の必要性を述べている。そのためには、「技能の優劣ではなく、進歩の度合によって学習成果を高め合うようにした」⁴²⁾指導法の改善をあげている。これにより、生徒は「伸びる楽しさ」を実感できるのである。

(3) 「集う楽しさ」

高田は「集う楽しさ」について『『集う』とは、集団活動をする、組織活動をする』⁴³⁾ことであり、体育授業の特徴の一つとしてこの面の認識能力を育てることをあげている。その事例として、教育実習生が指導したバレーボールの授業⁴⁴⁾を取り上げている。それは、教育実習生が中学2年生の女子を受け持ち、生徒は真剣に取り組み、担当教師からも褒められて終わった。ところが、終わった翌日、実習生が、担当した生徒数人が「あなたが下手だから私たちが負けたのだ、あやまれ！」とあって、校舎の裏側で一人の生徒を土下座させて、何やらわめいている光景を目の当たりにして、心が凍る思いがしたというのである。担当した生徒の姿を見て、実習生は担当教師のもとに駆け込んだのである。実習生は、「体育科こそ人間関係を明るくする教科だと思っていたのに、それがこういう結果になるとは思ってもみなかった、体育授業が『集う楽しさ』『仲よくする楽しさ』を認識させる授業だというのは、一般論として解るのだが、ではどうすればよいかということになると、私は自信がなくなったとこの学生はいうのであった。」⁴⁵⁾

この事例が示唆するように、「集う楽しさ」を体験させる授業実践は容易ではない。しかし、「みんなで仲よく運動をし、またそういう学び合いをする、という授業体験を抜きにして健康への確かな認識を持たせることはできないとあってよいであろう」⁴⁶⁾と、高田は述べている。高田は、「生徒一人一人に関する入念な見解の上に立つ教師側の計画立案、生徒を信頼して任せる自由な学習活動の展開、反面間接的な手法（たとえばグループノートや体育ノートに対する教師として熱意ある朱書など）による個別指導など」⁴⁷⁾は、「集う楽しさ」を育てる授業には、容易ならない教師の配慮が必要であると指摘している。

(4) 「解る楽しさ」

高田は、「解る楽しさ」について、『『解る』というのは、何かを発見する』⁴⁸⁾、ことであると述べている。今まで不明なことが鮮やかに解き明かされ、「自明だと思っていた事の中に思いも掛けない真理が発見されるなど、そんなとき人間にとって解るということがどんなに素晴し

い喜びをもたらすものであるか、これも健康の喜びであり、健康になるために欠くことのできない学習である」⁴⁹⁾と述べている。

高田は、「解る楽しさ」の事例として、跳び箱が飛び越せるようになった原因を考えさせた授業を取り上げている。「それまで跳び箱を跳び越せなかった女の子がやっと跳び越すということが起こり、全員を集めてみんなで喜び合っているうちに、私が、『〇〇さんが跳び越すことができたのはなぜだろうか。体のどこが変わったからだろうか。どこかが変わり、どこかが発達したから、跳べるようになったんだよね。どこだろう』と問い掛けたのである。ところが、それまで騒いでいた子供たちが一瞬みな話をびたりと止め、真剣に考え出したのであった。しかしすぐには解らない。それで宿題ということにしたのだが、翌日になってもまだ解らない。そこで、『それは神経だよ、神経がつながったんだ』と説明してやったところ、『なるほど、そうか、練習を重ねるということは、神経がつながり、運動神経が発達するということなんですね。それならよく解る』と喜んでくれたことがあった」⁵⁰⁾と、高田は述べている。この日の子どもの感想には、『運動というものを深く考えてみると、とてもおもしろい。ふしぎにも感じる。努力の勇気もわいてくる』⁵¹⁾と記述されていた。「これは、解る楽しさが認識されたときの、あの何ともいい様のない健康な喜びを表現しているといってもよいのではなかろうか。そしてその後はこんなわけで、体育でも解る楽しさを与えることが大事であり、そのための教材づくりや指導技術（とくに健康を高めるために運動や生活をどう認識するか、その認識能力を育てるのに必要な発問や解説や評価の技術）の開発に力を注いできた」⁵²⁾と、高田は自身の授業を省察している。つまり、「解る楽しさ」を育むためには、知識学習と運動学習とを密接に関連させる授業を展開する必要がある、と考えたのである。

以上のことから、「高田4原則」は、体育授業における「楽しさ」とは何かを根本から問い直して、「楽しさ」の具体を授業実践の中から捉えようとしたものである。「高田4原則」を満たすような授業を展開することが、「健康のための認識を育てる」子どもの学びを保障することに繋がっていくといえよう。よって、「高田4原則」は、子どもの側からみると、学びが生起しているかどうかという授業の指標でもあり、教師の側からみると「教材づくり」を行う上での視座となり得るといえよう。

第4節 「高田4原則」を導き出した研究方法

高田は、体育授業において子どもの喜ぶ楽しい授業を展開するために、3つのことを実践した。第1は、「運動と子供の関係に関する基礎文献を読み直すこと」⁵³⁾であった。それらの文献は、児童心理学や青年心理学、小児医学、生物学、動物学、教育学、文学書など多岐に渡るものだった。

第2は、作文教育で著名な田中豊太郎の指導を受け、「受け持ちの子供達に体育授業の度毎にわら半紙の小片を渡しては、感想文を書いてもらうことを続ける」⁵⁴⁾ことであった。高田は子どもに「訊く」という方法が、近代医学の臨床研究と同様であったことから、「体育学の研究にこの方法を採用入れることは正しかったと考えている」⁵⁵⁾と指摘している。高田の方法は、予め注意してみようとする子（抽出児）を決め、指導案に子どもの実名を書き込む方法であった。子どもの「実名まで入れる指導案を書こうとすると、子供一人一人をよく見なければならぬ、子供の見方が変わってきた、教材研究にも身が入る、人の授業もよく見るようになった」⁵⁶⁾と述懐している。これが高田の省察方法だったのである。

第3は、高田が、東京高等師範学校附属小学校において自身の授業の腕を上げるために、先輩教師の授業の参観や実践記録を交流することによって、研究仲間を増やしたことであった。このように高田は、実践研究は実践者その人の指導力を高めるに必要不可欠であり、「教師その人の指導力を増し、仲間を作り、教師としてのかけ替えの無い楽しさを与えるもの」⁵⁷⁾、として教師自身の学びを高めるものだと捉えていた。

以上のことから、「高田4原則」から理論化を行う過程で、「教材づくり」の視点として次の3点を導出した。第1に、個を大切にすること、第2に、子どもにとってよい授業を行うために省察を行うこと、第3に、同僚の学び合いを行うことの3点である。第3章、第4章では、これらの3つの視点を含んだ「教材づくり」による教材を用いた実践研究を、高等学校保健体育科の授業において行うことにした。

注

- 1) 出原泰明「高田典衛の授業論」中村敏雄編『戦後体育実践論第2巻 独自性の追求』創文企画、1997年、237頁。
- 2) 高田典衛『体育授業研究シリーズ2 よい体育授業の構図』大修館書店、1983年、25頁。

- 3) 小林篤「高田典衛の体育授業研究を見直す」日本体育学会 『体育学研究』第 44 巻第 5 号, 1999 年, 411-420 頁。
- 4) 下田次雄「正課体育実技におけるグループ体操の実際と効果」『中部工業大学紀要 B』13 巻, 1977 年, 65-69 頁。内海和雄「体育科の学力研究」『一橋論叢』090 巻 4 号, 日本評論社, 1983 年, 529-549 頁。菅野俊郎「体育科の運動強度 (VO₂max-HR-PPPE) からみた教材分析」岩手大学教育学部附属教育工学センター『教育工学研究』第 8 号, 1986 年, 67-85 頁。岡沢祥訓・高橋健夫他「体育授業における生徒行動や生徒の授業評価に及ぼす要因の検討—中学校の体育授業の ALT-PE 分析を通して—」『奈良教育大学紀要人文・社会科学』第 37 巻第 1 号, 1988 年, 49-59 頁。北真佐美・岡沢祥訓他「体育授業における生徒の身体的有能感と授業評価との関係」『奈良教育大学教育研究所紀要』1995 年, 第 31 巻, 15-23 頁。松岡重信他「現代体育教授学の構想と展望(Ⅲ)—体育業研究の趨勢と問題点と展望—」『広島大学教育学部紀要 第二部』第 42 号, 1993 年, 121-130 頁。伊藤宏他「女子大学生の短距離疾走能力の特性を生かした短距離走の授業研究」日本スプリント学会 『スプリント研究』8 巻, 1998 年, 1-8 頁。小林篤「高田典衛の体育授業研究を見直す」日本体育学会『体育学研究』第 44 巻第 5 号, 1999 年, 411-420 頁。松岡重信他「体育科教育学と社会システム論—体育授業の記述問題に焦点をあてて—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』第 54 号, 2005 年, 275-283 頁。松岡重信他「皮肉を込めて『研究』を語れば.....—体育科の授業評価研究の動向と展望—」『日本教科教育学会誌』第 28 巻第 4 号, 2006 年, 71-79 頁。厚東芳樹「教職経験年数という物理的条件が教師の反省的思考に及ぼす影響：小学校低学年の男性教師について」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第 112 号, 2011 年, 59-71 頁。浜上洋平「体育教師志望学生の教材内容についての知識が相互作用行動に及ぼす影響—3名の教育実習生を対象とした事例的検討—」『東亜大学紀要』第 16 号, 2012 年, 13-26 頁。
- 5) 岩田靖「高田典衛の教材づくり論」竹田清彦・高橋健夫・岡出美則編著『体育科教育学の探究—体育授業づくりの基礎理論』大修館書店, 1997 年, 236 頁。
- 6) 小林篤, 前掲論文, 412 頁, 伊藤博子『体育教員をめざす学生のために 高田典衛先生から学んで』北斗書房, 2010 年, 4 頁, 高田の著作等も参照して論者がまとめた。
- 7) 伊藤博子, 同上書, 4 頁。

- 8) 小林篤，前掲論文，414 頁。
- 9) 同上。
- 10) 伊藤博子，前掲書，4 頁。
- 11) 高田典衛『体育授業研究シリーズ2 よい体育授業の構図』，151 頁。
- 12) 大関松三郎「巾とび」『大関松三郎詩集 山芋』百合出版，1951 年，16-18 頁
- 13) 高田の学力論の中核を為す「認識」は，あくまでも子どもの側から見た楽しさに由来する認識であり，この点について，出原は，「技術認識や文化的認識というよりはもっと素朴な生活認識に近いものであった。そしてまた，四つの楽しさに対応する『認識能力』の結び目と説明された『健康に生きること』も日常生活的，常識的レベルに留まっていた」（出原泰明，前掲書，235 頁）と指摘している。
- 14) 高田典衛『体育授業研究シリーズ2 よい体育授業の構図』，45 頁。
- 15) 高田典衛『体育授業研究シリーズ1 よい体育授業の探求』大修館書店，1982 年，16 頁。
- 16) 高田典衛『体育授業研究シリーズ2 よい体育授業の構図』，151 頁。
- 17) 大関松三郎，前掲書，参照。
- 18) 高田典衛『体育授業研究シリーズ1 よい体育授業の探求』，18 頁。
- 19) 高田は，弱者へのまなざしを大切にしたい理由について自著の中で次のように述べている。

「田舎で勝ち続けた私は，東京でもぜひ勝ちたかった。しかし世間は広い。私がどんなに練習しても，勝つことはできなかった。・・・(中略・論者)・・・昭和 13～14 年ごろのわが国陸上陣のレベルは高く，層は厚かった。私は『出ると負け』という生活を，4 年間性懲りもなく続けた。はじめ考えていた勉強などもそっちのけで，『夢よう一度！』と打ち込んだ。しかし所詮，^{とほ}驚馬は驚馬，どうにもならなかった。私はこの間，世の中には強い人がいくらでもいるものだということを，骨身にしみて知らされた。スポーツの教えの一つに，『負けたことを認める』という事項があるが，私ほどこのことを実感をもって知らされた者は少ないのではないかと思う。後年私が教員になり，弱い者，へたな者の指導技術が比較的うまいといわれたが，それは，私自身，弱い者や劣る者の気持がよくわかっていだからであろうと思う。」（高田典衛『体育授業研究シリーズ5 よい体育授業と教師』大修館書店，1985 年，279-280 頁。）
- 20) 高田典衛『体育授業研究シリーズ1 よい体育授業の探求』，12 頁。

- 21) 「四つの楽しさに対応する『認識能力』の結び目と説明された『健康に生きること』も日常生活的、常識的レベルに留まっていた」という指摘があげられている。(出原泰明, 前掲書, 235 頁)。
- 22) 高田典衛『子どものための体育科教育法—体育科の授業と教材—』大修館書店, 1967 年, 145-147 頁。
- 23) 高田典衛, 同上書, 148 頁。
- 24) 高田典衛『体育授業研究シリーズ 1 よい体育授業の探求』, 13 頁。
- 25) 高田典衛『体育授業研究シリーズ 2 よい体育授業の構図』, 103 頁。
- 26) 同上書, 45 頁。
- 27) 高田自身は, 「高田 4 原則」のことを「(1) 動く楽しさ(2) 伸びる楽しさ (3) 集う楽しさ (4) 解る楽しさ」とも述べている。「高田 4 原則」のうち個々の事柄の軽重や順序性については触れられていない。(高田典衛『体育授業入門』大修館書店, 1976 年, 高田典衛『体育授業研究シリーズ 2 よい体育授業の構図』1983 年)。
- 28) 高田典衛『体育授業研究シリーズ 2 よい体育授業の構図』, 45 頁。
- 29) 高田典衛『体育授業入門』, 28 頁。
- 30) 小林篤, 前掲論文, 418 頁。
- 31) 伊藤博子, 前掲書, 78 頁。
- 32) 高田典衛『体育授業研究シリーズ 1 よい体育授業の探求』, 22 頁。
- 33) 今村嘉雄・宮畑虎彦編集代表『新修体育大辞典』, 1182 頁。
- 34) 同上書, 1572-1573 頁。
- 35) 高田典衛『体育授業研究シリーズ 2 よい体育授業の構図』, 45 頁。
- 36) 同上書, 46 頁。
- 37) 同上書, 47 頁参照。
- 38) 同上。
- 39) 同上書, 48 頁。
- 40) 同上書, 49-50 頁。
- 41) 同上書, 50 頁。
- 42) 同上。
- 43) 同上書, 51 頁。

- 44) 同上書，51-53 頁参照。
- 45) 以上，同上書，52 頁。
- 46) 同上書，51 頁。
- 47) 同上書，52 頁。
- 48) 同上書，53 頁。
- 49) 同上。
- 50) 同上書，53-54 頁。
- 51) 同上書，54 頁。
- 52) 同上書，54-55 頁。
- 53) 高田典衛『体育授業研究シリーズ5 よい体育授業と教師』大修館書店，1985 年，6 頁。
- 54) 同上。
- 55) 同上。
- 56) 高田典衛『体育授業研究シリーズ1 よい体育授業の探求』，97 頁。
- 57) 同上書，61-62 頁。

第Ⅱ部 高等学校保健体育科における「教材づくり」と実践研究

第3章 3つの視点を含んだ「教材づくり」による実践研究

—エイズの授業実践に焦点づけて—

第1節 保健分野におけるエイズ教材を取り上げる背景

第1項 エイズ教材を取り上げる理由

エイズは、『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』の保健において、「(1) 現代社会と健康」のうちの「イ 健康の保持増進と疾病の予防」の中の「(エ) 感染症とその予防」に含まれている¹⁾。

本実践研究でエイズ教材を取り上げる理由は次の3点である。第1に、社会的背景としてわが国のエイズ感染者・患者の増加率は、先進諸国のうちでも高い国に属しているからである。厚生労働省科学研究エイズ対策事業研究班「正しいことを知ることから始めましょう エイズの今を知っていますか？」²⁾によれば、東欧を除く多くの先進国では、感染者数が一般的に横ばいか微増状態であるのに対し、わが国では増加率が高いことが報告されている。第2に、研究対象者である高校生にとって、エイズ教材は、学ぶべき価値を有している³⁾といえるからである。社会疫学の立場から木原は、予防教育の必要性に言及している⁴⁾。高校生にとって、感染症としてのエイズを授業の中で学習する機会は、高等学校の保健が生涯最後ともいえる。第3に、エイズ教材は高田が述べたように、「健康のための認識を育てる」という考え方に適する「教材」だからである。エイズという病気は、誰もが罹患する可能性を持ち合わせており、ひとたび感染すれば、医療及び公的支援を受けて生涯にわたり、自己の健康管理に努めなければならない慢性疾患であるからである。

以上のことから、エイズという病気を人生において授業の中で学ぶ最後の機会が、高等学校における保健であり、エイズを他人事ではなく自己の問題として、学習させる意義が存在するといえる。

第2項 高等学校におけるエイズの先行研究

高等学校の保健でエイズ教材の先行研究を探るために、1987年から2008年までの22年間に、CiNiiへ掲載されている論文と保健体育の書誌を「AIDS/HIV教育」、「エイズ教育」というキーワードで検索をすると、274件の文献がヒットした(2010年1月現在)。これらの文献をエイズの研究動向と関連させて考察した。次に、高等学校のエイズの実践研究と高等学校学

習指導要領におけるエイズの指導内容の記述を検討して、3つの視点を含んだ「教材づくり」を行うこととした。

(1) エイズの研究動向

武田・松岡⁵⁾は、文献学的に1980年代から1990年代におけるエイズ教育10年を、第1期：正しい知識の普及に重点がおかれた時期、第2期：予防教育が強調された時期、第3期：共生教育が強調された時期の3つに区分した。第1期の1980年代は、エイズという病気を理解する黎明期として、正しい知識の普及に努めた実践の時期であった。第2期の1992年から94年は、患者・感染者がカミングアウトを行い、感染予防キャンペーンや人権尊重が謳われた実践の時期であった。第3期の1995年から99年は、1996年以降、若者の性感染症の増加とエイズ感染者の増加から、他人事ではなく自分のこととしてエイズを捉えさせ、エイズ予防と共生に関して、予防活動に参加する中で学ばせようとする実践の時期であった。これに加え、和唐(2005)⁶⁾のように2000年以降を第4期として、新しい「ヘルスプロモーション」⁷⁾の考え方にに基づき、エイズ教育を指導するために視聴覚機器を活用した実践の時期とする考えもある。

以上の「AIDS/HIV教育」「エイズ教育」の文献研究から、次のことが示唆された。エイズという病気が発見された1981年当初は研究途上であったために、「エイズ=死の病」という誤解や偏見から、エイズという病気は、死の病というスティグマ(stigma)⁸⁾が徴された。その後は、患者・感染者のカミングアウトを機に共生の視点が加わった。次いで、性感染者の増加から、自己の問題として捉えざるを得なくなり、エイズは誰でもかかりうる病気、予防できる病気へと移行して検査の呼びかけがなされていった。その後、ヘルスプロモーションの考え方をを用いて、エイズ感染者・患者の健康を支援する有機的な環境づくりへと変化していったのであった。

(2) 高等学校におけるエイズの先行研究

高等学校における保健で、エイズの実践研究をCiNiiと保健体育の書誌とを合わせて検索し、ヒットした16件を検討対象⁹⁾とした。16件を先に述べたエイズの研究動向と関連させると、2つに分類できた。第1は、エイズという病気への科学的認識の育成と行動変容をめざした実践研究であった。それらは、和唐(1988a)、和唐(1988b)、綿引(1992)、櫛引(1993)、鈴木(1993)、加藤(1993)、貴志(1993)、水間(1993)、小田切(1993)、佐々木(1997)、前川(1997)、遠藤(1997)、宮里(1997)、坂本(1999)、五十嵐(2002)であった。第2は、国民の共通教養としての「健康リテラシー」の育成をめざす実践であった。それには、和唐(2005)があった。

これらのうち、本実践研究ではエイズという感染症そのものばかりでなく、病気を抱えてもよりよく生きていくという、「生活の質 (Quality of Life)」に注目した、和唐(2005)の健康観への考え方を根底に置く立場に依拠する。その理由は、和唐は、「教科保健の内容として生徒が『当面する健康課題』への対応を学ぶ目的は、たんにそれを解決するための方策やスキルを学ぶというだけではない。その学びを通して、健康文化の担い手・作り手として学習者が自立し、公共的な健康文化づくりの実践に参加し、健康の主権者として公共的責任を果たしていく能力を育てる」¹⁰⁾、ことだと捉えているからである。

(3) 『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』における記述

『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』(平成21年3月告示)によれば、「感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いが見られること。その予防には、個人的及び社会的な対策を行う必要があること」¹¹⁾と記述してある。「感染症としてのエイズ」を取り扱う場合、病気の側から感染経路を知り自分が病気に罹らないための予防対策に終始すれば、学習者はエイズが自分には関係ない病気、と認識してしまう。感染者が増加の一途を辿っている現在、エイズは、他人事ではなく自分のこととして、エイズに向き合わせる必要があるであろう。そのための3つの視点を含んだ「教材づくり」としては、感染のメカニズムやエイズウイルスを媒介とする人間関係を含めた感染者の心情や、病を抱えて生きていく「患者・感染者」の気持ちなども含めた展開が必要だと考える。本実践研究では、「患者・感染者」という呼び名を、日常生活の場面においては「病者」とする友定の定義に従って、「病者」と記すことにする¹²⁾。

第3項 エイズの「教材づくり」の視点

エイズという感染症は、病気究明までの不安が偏見や差別を生み、「病者」の生活が脅かされるという事実があった。これらを踏まえ、本実践研究では、学習者のエイズという病気への知的好奇心を織り込んでエイズという病気への正しい理解と、たとえ「病者」となっても、医療や福祉の支援を受けて社会の中で生きていけるという、社会との関わりの中で教材をつくりたいと考えた。友定も「病者」の知識は、「病気や障害を持って生きる〈生の一形態〉としてポジティブに考えるならば、『病気の知識』を互いの立場に立って学んでおく必要がある。さらに『病者の知識』は患者・感染者の生活の質(QOL)と密接に関係している」¹³⁾と、述べている。以上から、『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』に示されている病気の側からエ

イズを捉える視点として、「病者」の視点を加えて社会との関わりで、教材を構成することにした。特に、エイズの教材選択に当たり配慮したことは、学習者と年齢の近い事例を探すことであった。近藤¹⁴⁾や加藤¹⁵⁾が作成したエイズ教材に見られるように学習者の年齢に近いことが、教材に「共感」を持たせて当事者意識として考えさせるのに有効だと考えたからである。

以上の内容を含めたエイズ教材として、エイズという病気への正しい理解をさせる、「病者」の視点を持たせる、社会との関わりで考えさせる、を「教材づくり」の内容とした。そのための具体的な教材として、当事者意識を持たせる教材を作成することにした。

第2節 本実践研究の目的と方法

第1項 本実践研究の目的

本実践研究の目的は、第2章で示した「教材づくり」の3つの視点、①個を大切にする、②省察をする、③同僚による学び合いをする、を含んで開発したエイズ教材を用いて、高校生の健康認識を高めることである。それを通して、「教材づくり」を成立させるために必要なことについて検討する。

第2項 本実践研究の方法

研究期間：2011年1月11日（火）予備調査

2011年2月8日（火）事前調査、エイズという病気の特徴について

2011年2月15日（火）病者との共生について

2011年2月22日（火）病気の予防について

2011年2月23日（水）病者への告知を通して社会的支援を理解する、事後調査
(エイズの実践授業は2月8日から23日までの保健の授業時間、計4時間)。

研究対象：授業者=研究者と授業者=研究者が担当するA高校1年生女子28名。

単元名：感染症としてのエイズ

収集した資料：

- a. 予備調査として、学習者にエイズに関して小・中学校の既習内容と高校で学習したいことを記述させた。
- b. エイズ単元の事前・事後に同一の設問項目で、学習者に学習内容の知識理解の変容を記述さ

せた。

c. 各保健授業の最後に感想文を書かせた（4時間分）。

研究手続き：

a. エイズ単元を開始する約1か月前の2011年1月11日（火）の保健の授業中に、エイズに関する予備調査を実施した。設問項目は、小・中学校の既習内容とその時期、及び高校で学習したいことであった。学習者は、各自のペースで回答を行った。調査の所要時間は5分程度であった。このうち、高校で学習したいことに関する記述を参考にして教材を作成することにした。

学習者の予備調査の記述内容を分類する手順は以下の通りであった。まず次の3点を基準として個々に分けた。第1に、一文で切った。第2に、1つの単語で回答しているものについても一文として捉えた。第3に、指示語を含む単語については、授業者=研究者が文脈から判断をした。そのため人数と合計は一致しない。

分類の手順は以下のとおりである。第1に、分類した記述内容に通し番号をつけた。第2に、表3-1のように記述内容を番号順に並べた。第3に、これらをカードにし、2名の大学院生が独立してKJ法で分類した。第4に、2名の大学院生は、分類したカテゴリーをもとに相談して、一致したもののみを新たなカテゴリーとして採用した。

b. エイズ単元の事前調査として2011年2月8日（火）に、事後調査として2011年2月23日（水）に同一の設問項目で、エイズに関する知識理解の調査を実施した。両日とも保健の授業中に行った。学習者は各自のペースで回答する形式で行った。調査時間は5分程度であった。調査項目は、和唐(2005)を参考にして作成した。

【調査項目】

調査項目は、以下の10項目である。

1. 自分は性感染症には感染しないと思う、という設問項目に対して4件で、① 強く思う、② 少し思う、③ あまり思わない、④ 思わない、で行った。
2. 自分はエイズには感染しないと思う、という設問項目に対して4件で、① 強く思う、② 少し思う、③ あまり思わない、④ 思わない、で行った。
3. エイズに感染している人と手を握っても大丈夫、という設問項目に対して3件で、① 大丈夫、② どちらともいえない、③ 大丈夫ではない、で行った。
4. エイズに感染しても完全に治すことができる、という設問項目に対して3件で、① できる、② どちらともいえない、③ できない、で行った。

5. 現在、エイズの感染原因の多くは性行為によるものである、という設問項目に対して3件で、① はい、② どちらともいえない、③ いいえ、で行った。

6. エイズに感染しないための予防法を知っている、という設問項目に対して2件で、① 知っている、② 知らない、で行った。

7. エイズの感染を防ぐのに、コンドームは効果がある、という設問項目に対して4件で、① 強く思う、② 少し思う、③ あまり思わない、④ 思わない、で行った。

8. 一人の人と性交渉を持つことは、その性交渉を通じて間接的に他の多くの人と性的な関係を持つことになる可能性がある、という設問項目に対して4件で、① 強く思う、② 少し思う、③ あまり思わない、④ 思わない、で行った。

9. エイズ感染者は、年々増加している、という設問項目に対して3件で、① はい、② どちらともいえない、③ いいえ、で行った。

10. エイズは怖い病気だと思いますか、という設問項目に対して4件で、① とても怖い、② 少し怖い、③ あまり怖くない、④ 怖くない、で行った。

c. 2011年2月8日から2011年2月23日までの保健授業において、高田典衛¹⁶⁾による授業研究方法を参考にして、本時の振り返りとして、学習者に振り返り用紙へ自由記述で記入させた。所要時間は5分程度であった。

学習内容に関する予備調査の結果：

表3-1は、分類した記述内容に通し番号をつけ、番号順に並べたものである。

表3-1 記述内容の分類

1. HIVの危険性
2. どうやったら、感染しているかどうか分かるか
3. 近年の感染傾向について
4. 予防
5. 抗生物質
6. 性感染症, エイズとはなにか
7. その防ぎ方
8. HIVに関しての正しい知識
9. HIVとかに罹らないためには, 何をしたら良いのか
10. HIVに罹るとどんな症状が起こるか
11. 感染しないためには, どうすればよいか
12. もしなったらどうするのか
13. HIVの症状
14. 治療方法
15. 感染したときの症状
16. 詳しい症状や問題点
17. 感染経路
18. 色々な病気の症状などを詳しく学びたい
19. どうしたらならないかも学びたい
20. エイズを予防するのに, どのような社会対策がとられているか
21. 中学校で習ったけれど忘れてしまっていること
22. エイズに感染するとどんな症状があるのか
23. どうしたら予防できるか
24. もし罹ってしまったらどうなるか
25. どう治療するのか
26. HIVの防ぎ方
27. 性感染症の症状と治療
28. 性感染症やエイズの予防について
29. 社会が行っている対策
30. すっかり忘れていたので, また, しっかり勉強したい。
31. HIVとは何か
32. 予防出来ることはあるのか
33. 学んで今後に生かしたい
34. 感染症に罹らないための予防について
35. 潜伏期間でもエイズ患者なのか
36. どんな危険なことがあるのか
37. その病気について分からないことを学びたい
38. 中学校で習ったけれど, 忘れてしまっていること
39. HIVの症状
40. 発症して, 普通の生活を送られるか
41. どの程度悪化すると入院か
42. 入院後はどの程度働けるか
43. HIVになったらどのような症状になるのか
44. 具体的にどのようなものか
45. その時の症状がどんなものか。
46. 防ぎ方や治療法があるのかどうか
47. エイズの予防など

表3-1の47の記述内容をカードにして、エイズについて学びたいことをKJ法で分類すると、次の7つのカテゴリーに分けられた。① 症状 16(34.0%)、② 予防 11(23.4%)、③ これからの学習に対する意欲 7(14.9%)、④ 知識 4(8.5%)、⑤ 治療法 4(8.5%)、⑥ 感染 3(6.4%)、⑦ 社会的対策 2(4.3%)であった。これらを教材に織り込んで授業を展開した。

研究計画：

研究計画は、以下の表3-2に示した。本単元のエイズの指導目標を先行研究や予備調査の結果を参考にして、次の3つの内容を含めた。第1に、エイズという病気への正しい理解をさせることである。第2に、エイズという病気を他人事ではなく当事者として考えさせることである。第3に、社会との関わりを理解させることである。

1時間目と2時間目は、エイズという病気への正しい理解と共生を学ばせるために、他者を媒介にして自己理解に至る教材として、近藤(1999)が作成した「ライアン・ホワイト君」のシナリオ型教材¹⁷⁾を用いた。教材選択の視点として、学習者と年齢が近いことと朗読による「共感」感情の共有がなされることにより、エイズを他人事ではなく当事者意識を持って理解させる為に効果的だと考えたからである。

3時間目は、エイズは他人事ではなく自分の問題として考えさせる契機にするため、朗読「私の一歩」¹⁸⁾を聴かせた。その後、エイズウイルスは皮膚から感染しないことを粘膜の仕組み¹⁹⁾を「簡易実験」²⁰⁾で示した。授業の後半では、エイズ予防=コンドームといわれているが、その前に、対等な人間関係や性的自己決定権が大切だということについて指導した。その後、感染予防の定着化を図るためにDVD²¹⁾を視聴させた。

4時間目は、3時間目の復習を兼ねて、コンドームの減産と性感染症の増加という相反する関係を示しているグラフ²²⁾の提示や、エイズ予防のポスター²³⁾を紹介した。さらに、感染者への告知と支援に関する朗読²⁴⁾を聴かせて、病気を抱えても生きていける健康観(QOL: Quality of Life)を理解させた。最後に、読み物教材として、立川昭二『病いと健康のあいだ』(新潮社、1991年)²⁵⁾の一部を読ませて、QOLへの認識を深めさせた。

表3-2 研究計画表

時間	学習内容	学習活動	評価規準(評価の観点)
1	「ライアン・ホワイトからエイズを考える」No1	<ul style="list-style-type: none"> 事前調査をする ライアン・ホワイト君の写真を見る。 台本を用いて、ライアン君と母親の配役を決めて朗読をする。 感染経路とエイズウイルスの弱点のキーワードを、フラッシュカードで理解する。 CD4の模型^{*1}見て、免疫機能が壊されているライアン君の体調を理解し、免疫機 	<ul style="list-style-type: none"> 意欲的に学習に取り組んでいる(関心・意欲・態度) 感染経路について理解している(知識・理解) 免疫機能が、HIVに壊されない方法を考えて発表しようとしている(関

		能を高める方法を考える。	心・意欲・態度)
2	「ライアン・ホワイトからエイズを考える」№2	<ul style="list-style-type: none"> ・ライアン・ホワイト君の写真を見る。 ・台本を用いて、配役を決めて朗読をする。 ・ライアン君を迎える言葉を「英語」で考える。 ・フラッシュカード（「Get Away」「Welcome」）で、共生の現実を知る。 ・授業者＝研究者が患者に会いに行った話を聴いて、共生について理解をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●患者との共生について考えている（思考・判断）
3	エイズは誰でも罹る病気 エイズ予防	<ul style="list-style-type: none"> ・感染の仕組みについて、粘膜と免疫機能との関連を説明した後、皮膚からは感染しないことを簡易実験で示す。 ・予防をおざなりにしていた人の手記の朗読を、他人事ではなく自分のこととして聴く。 ・「エイズ予防」のDVDを授業記録する。 ・コンドームの減産とSTD（Sexually Transmitted Diseaseの略で、性行為感染症のこと）増加の関連を理解する。 ・「対等な人間関係」「性的自己決定権」について、朗読とDVDの内容と関連して理解する。 ・予防策以前に、避妊やSTDの話し合いができる対等な人間関係の方が大切であることを、自分の生き方と関連して理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●感染経路について理解している（知識・理解） ●エイズの予防方法について理解している（知識・理解） ●「対等な人間関係」「性的自己決定権」について理解している（知識・理解）
4	「病者」の現状を理解して、社会の支援体制を知る	<ul style="list-style-type: none"> ・復習として、エイズ予防啓発ポスター「持っている人はエコーらい人」（JEX Condom）を見て、コンドームの減産とSTD増加のマイナスの相関を理解する。 ・感染者への告知場面の朗読を聴く。 ・社会的支援として、県内の検査機関（保健所の無料、匿名に加えて土日、夜間検査）や相談機関を知る。 ・患者救済制度活用の課題について知る。 ・「『間』を生きる」の読み物教材を読んで人と人とのつながり、病と人とのつながりについて理解する。 ・病気を抱えても生きていける健康観について理解する。 ・QOL（Quality of Life）を高めるために公的・民間の支援団体を知り、人と人とのつながりの大切さを理解する。 ・事後調査をする 	<ul style="list-style-type: none"> ●社会の支援体制について理解している（知識・理解） ●QOL との関わりについて理解している（知識・理解）

*1：CD4とは、「いわゆるヘルパーT細胞、単球、マクロファージ、樹状細胞などの免疫系細胞が細胞表面に発現している糖タンパクで細胞表面抗原の1つである。」
（<http://ja.wikipedia.org/wiki/2013年12月29日取得>）。CD4の模型とは、CD4に見立てた蓋付き容器の中へ、ウイルスに見立てた白と黒の基石を入れる。ウイルスが細胞内に入って暴れ出すと免疫力が低下して、蓋に見立てた免疫力を壊して体内に広がることにより体調が悪くなることを説明するために作成した模型である。（近藤真庸「エイズと共に生きる」保健教材研究会編『新版「授業書」方式による保健の授業』大修館書店、1999年、154頁、を参照。）

4時間の学習指導案と授業の中で使用した調査用紙と振り返り用紙は、巻末の資料に示した。

第3節 結果と考察

第1項 事前・事後の知識理解からみた変容

(1) 事前・事後の知識理解に関する調査結果

事前・事後のアンケートには32名が回答した。そのうち、4名は1項目でも無回答であったり欠席者であったりした。よって、28名を調査対象とした。アンケートの項目ごとの事前・事後の結果を、表3-3-1から表3-3-10に示した。

表3-3-1 「自分は、性感染症には感染しないと思う」の結果

(N=28)

選択肢	事前	事後			
		1	2	3	4
1 強く思う	4	1	2	1	0
2 少し思う	12	3	5	3	1
3 あまり思わない	11	1	5	4	1
4 思わない	1	0	0	0	1

「1. 自分は、性感染症には感染しないと思う」という項目において、事前調査では「1 強く思う」が4人、「2 少し思う」が12人、「3 あまり思わない」が11人、「4 思わない」が1人であった。

「1 強く思う」と回答した4人の事後調査では、「1 強く思う」が1人、「2 少し思う」が2人、「3 あまり思わない」が1人、「4 思わない」が0人であった。「2 少し思う」と回答した12人の事後調査では、「1 強く思う」が3人、「2 少し思う」が5人、「3 あまり思わない」が3人、「4 思わない」が1人であった。「3 あまり思わない」と回答した11人の事後調査では、「1 強く思う」が1人、「2 少し思う」が5人、「3 あまり思わない」が4人、「4 思わない」が1人であった。「4 思わない」と回答した1人の事後調査では、「1 強く思う」が0人、「2 少し思う」が0人、「3 あまり思わない」が0人、「4 思わない」が1人であった。

表3-3-2 「自分は、エイズには感染しないと思う」の結果

(N=28)

選択肢	事前	事後			
		1	2	3	4
1 強く思う	3	0	2	1	0
2 少し思う	14	4	4	5	1
3 あまり思わない	10	1	4	4	1
4 思わない	1	0	0	0	1

「2. 自分はエイズには感染しないと思う」という項目において、事前調査では「1 強く思う」が3人、「2 少し思う」が14人、「3 あまり思わない」が10人、「4 思わない」が1人であった。

「1 強く思う」と回答した3人の事後調査では、「1 強く思う」が0人、「2 少し思う」が2人、「3 あまり思わない」が1人、「4 思わない」が0人であった。「2 少し思う」と回答した14人の事後調査では、「1 強く思う」が4人、「2 少し思う」が4人、「3 あまり思わない」が5人、「4 思わない」が1人であった。「3 あまり思わない」と回答した10人の事後調査では、「1 強く思う」が1人、「2 少し思う」が4人、「3 あまり思わない」が4人、「4 思わない」が1人であった。「4 思わない」と回答した1人の事後調査では、「1 強く思う」が0人、「2 少し思う」が0人、「3 あまり思わない」が0人、「4 思わない」が1人であった。

表3-3-3 「エイズに感染している人と手を握っても大丈夫」の結果

(N=28)

選択肢	事前	事後		
		1	2	3
1 大丈夫	21	21	0	0
2 どちらともいえない	5	5	0	0
3 大丈夫でない	2	1	1	0

「3. エイズに感染している人と手を握っても大丈夫」という項目において、事前調査では「1 大丈夫」が21人、「2 どちらともいえない」が5人、「3 大丈夫でない」が2人であった。

「1 大丈夫」と回答した21人の事後調査では、「1 大丈夫」が21人、「2 どちらともいえない」が0人、「3 大丈夫でない」が0人であった。「2 どちらともいえない」と回答した5人の事後調査では、「1 大丈夫」が5人、「2 どちらともいえない」が0人、「3 大丈夫でない」が0人であった。「3 大丈夫でない」と回答した2人の事後調査では、「1

大丈夫」が1人、「2 どちらともいえない」が1人であった。

表3-3-4 「エイズに感染しても、完全に治すことができる」の結果
(N=28)

選択肢	事前	事後		
		1	2	3
1 できる	4	0	3	1
2 どちらともいえない	13	0	3	10
3 できない	11	1	1	9

「4 エイズに感染しても、完全に治すことができる」という項目において、事前調査では「1 できる」が4人、「2 どちらともいえない」が13人、「3 できない」が11人であった。

「1 できる」と回答した4人の事後調査では、「1 できる」が0人、「2 どちらともいえない」が3人、「3 できない」が1人であった。「2 どちらともいえない」と回答した13人の事後調査では、「1 できる」が0人、「2 どちらともいえない」が3人、「3 できない」が10人であった。「3 できない」と回答した11人の事後調査では、「1 できる」が1人、「2 どちらともいえない」が1人、「3 できない」が9人であった。

表3-3-5 「現在、エイズの感染原因の多くは性行為によるものである」の結果
(N=28)

選択肢	事前	事後		
		1	2	3
1 はい	14	11	3	0
2 どちらともいえない	12	9	3	0
3 いいえ	2	1	1	0

「5. 現在、エイズの感染原因の多くは性行為によるものである」という項目において、事前調査では「1 はい」が14人、「2 どちらともいえない」が12人、「3 いいえ」が2人であった。

「1 はい」と回答した14人の事後調査では、「1 はい」が11人、「2 どちらともいえない」が3人、「3 いいえ」が0人であった。「2 どちらともいえない」と回答した12人の事後調査では、「1 はい」が9人、「2 どちらともいえない」が3人、「3 いいえ」が0人であった。「3 いいえ」と回答した2人の事後調査では、「1 はい」が1人、「2 どちらともいえない」が1人、「3 いいえ」が0人であった。

表3-3-6 「エイズに感染しないための予防法を知っている」の結果

(N=28)

選択肢	事前	事後	
		1	2
1 知っている	5	5	0
2 知らない	23	23	0

「6. エイズに感染しないための予防法を知っている」という項目において、事前調査では「1 知っている」が5人、「2 知らない」が23人であった。

「1 知っている」と回答した5人の事後調査では、「1 知っている」が5人、「2 知らない」が0人であった。「2 知らない」と回答した23人の事後調査では、「1 知っている」が23人、「2 知らない」が0人であった。

表3-3-7 「エイズの感染を防ぐのに、コンドームは効果がある」の結果

(N=28)

選択肢	事前	事後			
		1	2	3	4
1 強く思う	10	7	3	0	0
2 少し思う	16	9	7	0	0
3 あまり思わない	2	0	0	1	1
4 思わない	0	0	0	0	0

「7. エイズの感染を防ぐのに、コンドームは効果がある」という項目において、事前調査では「1 強く思う」が10人、「2 少し思う」が16人、「3 あまり思わない」が2人、「4 思わない」が0人であった。

「1 強く思う」と回答した10人の事後調査では、「1 強く思う」が7人、「2 少し思う」が3人、「3 あまり思わない」が0人、「4 思わない」が0人であった。「2 少し思う」と回答した16人の事後調査では、「1 強く思う」が9人、「2 少し思う」が7人、「3 あまり思わない」が0人、「4 思わない」が0人であった。「3 あまり思わない」と回答した2人の事後調査では、「1 強く思う」が0人、「2 少し思う」が0人、「3 あまり思わない」が1人、「4 思わない」が1人であった。「4 思わない」と回答した0人は事後調査では、「1 強く思う」が0人、「2 少し思う」が0人、「3 あまり思わない」が0人、「4 思わない」が0人であった。

表3-3-8 「一人の人と性交渉を持つことは、その性交渉を通じて間接的に他の多くの人と性的な関係を持つことになる可能性がある」の結果

(N=28)

選択肢	事前	事後			
		1	2	3	4
1 強く思う	9	7	2	0	0
2 少し思う	14	9	5	0	0
3 あまり思わない	5	4	1	0	0
4 思わない	0	0	0	0	0

「8. 一人の人と性交渉を持つことは、その性交渉を通じて間接的に他の多くの人と性的な関係を持つことになる可能性がある」という項目において、事前調査では「1 強く思う」が9人、「2 少し思う」が14人、「3 あまり思わない」が5人、「4 思わない」が0人であった。

「1 強く思う」と回答した9人の事後調査では、「1 強く思う」が7人、「2 少し思う」が2人、「3 あまり思わない」が0人、「4 思わない」が0人であった。「2 少し思う」と回答した14人の事後調査では、「1 強く思う」が9人、「2 少し思う」が5人、「3 あまり思わない」が0人、「4 思わない」が0人であった。「3 あまり思わない」と回答した5人の事後調査では、「1 強く思う」が4人、「2 少し思う」が1人、「3 あまり思わない」が0人、「4 思わない」が0人であった。「4 思わない」と回答した0人の事後調査では、「1 強く思う」が0人、「2 少し思う」が0人、「3 あまり思わない」が0人、「4 思わない」が0人であった。

表3-3-9 「エイズ感染者は、年々増加している」の結果

(N=28)

選択肢	事前	事後		
		1	2	3
1 はい	20	17	2	1
2 どちらともいえない	8	5	3	0
3 いいえ	0	0	0	0

「9. エイズ感染者は、年々増加している」という項目において、事前調査では「1 はい」が20人、「2 どちらともいえない」が8人、「3 いいえ」が0人であった。

「1 はい」と回答した20人の事後調査では、「1 はい」が17人、「2 どちらともいえない」が2人、「3 いいえ」が1人であった。「2 どちらともいえない」と回答した8人の事後調査では、「1 はい」が5人、「2 どちらともいえない」が3人、「3 いいえ」が0人であった。「3 いいえ」と回答した0人の事後調査では、「1 はい」が0人、「2

どちらともいえない」が0人、「3 いいえ」が0人であった。

表3-3-10 「エイズは、怖い病気だと思いますか」の結果

(N=28)

選択肢	事前	事後			
		1	2	3	4
1 とても怖い	24	20	4	0	0
2 少し怖い	4	2	2	0	0
3 あまり怖くない	0	0	0	0	0
4 怖くない	0	0	0	0	0

「10. エイズは、怖い病気だと思いますか」という項目において、事前調査では「1 とても怖い」が24人、「2 少し怖い」が4人、「3 あまり怖くない」が0人、「4 怖くない」が0人であった。

「1 とても怖い」と回答した24人の事後調査では、「1 とても怖い」が20人、「2 少し怖い」が4人、「3 あまり怖くない」が0人、「4 怖くない」が0人であった。「2 少し怖い」と回答した4人の事後調査では、「1 とても怖い」が2人、「2 少し怖い」が2人、「3 あまり怖くない」が0人、「4 怖くない」が0人であった。「3 あまり怖くない」と回答した0人の事後調査は、事前調査と同様に0人であった。「4 怖くない」と回答した0人の事後調査は、事前調査と同様に0人であった。

(2) 事前・事後の知識理解に関する調査結果の考察

「1. 自分は、性感染症には感染しないと思う」という項目において、事前と事後の人数の比較をすると、事前では、「3 あまり思わない」に回答した11人は、事後では回答が4つに分かれた。事後の内訳をみると、「1 強く思う」に1人、「2 少し思う」に5人が回答したことにより、事前に「3 あまり思わない」と回答した11人は4人に減少した。一方で、「2 少し思う」に回答した12人のうち、4人が「3 あまり思わない」「4 思わない」に回答しており、全体としてほとんど変化がなかった。

「2. 自分は、エイズには感染しないと思う」という項目において、事前と事後の人数を比較すると、事前では、「3 あまり思わない」に回答した10人のうち5人が、事後では「1 強く思う」「2 少し思う」に回答した。一方で、「2 少し思う」に回答した14人は、事後では、「3 あまり思わない」「4 思わない」に回答しており、全体としてほとんど変化がなかった。

「3. エイズに感染している人と手を握っても大丈夫」という項目において、事前と事後

の人数を比較すると、事前では「2 どちらともいえない」に回答した5人は、事後では、全員が「1 大丈夫」に回答した。28人中27人の学習者が事後において、エイズウイルスの特徴を理解したといえる。これまでの日常生活の個々の事情に即した「お風呂やプールではうつりません」、「一緒に働いたり、食事をしたりしてもうつりません」のような指導²⁶⁾ではなく、近藤(2005)の実践に見る「ウイルスの弱点を捉えた指導」²⁷⁾を行った成果といえよう。

「4. エイズに感染しても、完全に治すことが出来る」という項目において、事前と事後の人数を比較すると、事前では「2 どちらともいえない」に回答した13人は、事後では「3 できない」に10人が回答した。授業によって、エイズという病気が、現在の医学では完治が難しい慢性疾患となっていることを認識したことを示しているといえよう。

「5. 現在、エイズの感染原因の多くは性行為によるものである」という項目において、事前と事後の人数を比較すると、事前では、「1 はい」に14人、「2 どちらともいえない」に12人が回答したが、事後では「1 はい」に21人、「2 どちらともいえない」に7人が回答した。正しい感染経路を学習した結果であるといえよう。

「6. エイズに感染しないための予防法を知っている」という項目において、事前と事後の人数を比較すると、事前では、「2 知らない」に23人が回答したが、事後では、28人全員が「1 知っている」に回答した。また、「1 知っている」という項目の予防法を自由に記述する欄には、予防法として、「コンドームを使う」、「性行為をしない」、「正しい教育を受ける」などの記述があった。予備調査として「高等学校で学びたいこと」の中に「予防について」を11人の学習者があげており、実際に、学習者の疑問に答える授業が展開できていたといえよう。

「7. エイズの感染を防ぐのに、コンドームは効果がある」という項目において、事前と事後の人数を比較すると、事前では、「1 強く思う」に10人、「2 少し思う」に16人が回答し、事後では「1 強く思う」が16人、「2 少し思う」が10人回答した。事前事後共に、26人が肯定的な回答をしており、全体としてほとんど変化がなかった。

「8. 一人の人と性交渉を持つことは、その性交渉を通じて間接的に他の多くの人と性的な関係を持つことになる可能性がある」という項目において、事前と事後の人数の比較をすると、事前では、「1 強く思う」と「2 少し思う」に23人回答したが、事後では、「1 強く思う」と「2 少し思う」に28人全員が回答した。性交渉での感染について、間接的なリスクについての理解ができたといえよう。

「9. エイズ感染者は年々増加している」という項目において、事前と事後の人数の比較をすると、事前では、「1 はい」に20人、「2 どちらともいえない」に8人回答したが、事後では、「1 はい」が22人、「2 どちらともいえない」に5人回答したことにより、3人減少した。感染者が増加しているという認識については、あまり変化が見られなかった。

「10. エイズは怖い病気だと思いますか」という項目において、事前と事後の人数の比較をすると、事前も事後も、「1 とても怖い」、「2 少し怖い」に全員が回答をしていた。設問1から設問9においては、学習者に変化が見られたが、設問10においては、数値の変化が全く見られなかった。

本実践研究で得られた事後の感想では、「完治しない病気なので恐ろしい病だと思った」、「一生つきあわなければいけない病というのは、精神的にも辛いということがよく分かった」、「エイズ感染者は、エイズと一生つきあっていかなければならないということが分かりました」との記述が見られた。これらからも、完治が難しい慢性疾患を患うことにより、一生医療の管理下に置かれ、選択肢が制限される生活に不安や恐怖感情を抱いていることが示唆された。このことから、エイズの「教材づくり」において、学習者が「怖い」と回答した内容を検討する必要性が示唆された。

学習者がエイズに抱いている不安や恐怖感情には、2種類あると和唐(1991)は述べている。和唐によれば、「(1) 病気そのものに対する恐怖—病気の持つ不確実性からひょっとしたらという不安、やっぱり怖いという意識。(2) 病気そのものの恐怖よりも、病気とわかったら社会そのものから追い出される恐怖—特殊な人とみられ、職場や学校で偏見や差別を受ける恐怖。これらエイズに対する不安や恐怖心は、かつてペストやコレラあるいは結核などの『死にいたる伝染病』に直面した人々の持った不安や恐怖心と同じものである」²⁸⁾。この点に関し五島(2010)は、感染に加えて病を患うことにより、「疾病に対する恐怖は、もともと人々の心の中にある不安、コンプレックスとあいまって、このような疾病に対して、『かかわりたくない』『自分とは違う』という特別視、排除したいという気持ちを生む。それが、社会にある既存の差別意識と結びつけば、容易に患者を『排除する』行動へとつながる等、疾病をとおして人が人を排除するという差別、偏見となりやすい」²⁹⁾と、述べている。

感情における恐怖の位置づけについて、福田(2008)は、「喜び、恐怖、嫌悪は全ての生物に共通に存在し個体の生存に必須である。快から喜びが、不快から恐怖と嫌悪が進化・分化しており、恐怖は身体の防御に関係した情動である」³⁰⁾と、述べている。つまり、恐怖感情は否定的な面ばかりでなく、身体の防御に関連した肯定的な面を兼ね備えているといえる。

病に対する恐怖感情は、もともと人間の心にある不安やコンプレックスとあいまって、特別視や社会参加への排除の気持ちを生む傾向がある。それが、社会に存在する既存の差別意識と結びつけば、容易に患者をスティグマ化し排除する行動へ繋がるといえる。授業を通じて学習者は、自分が被害者にも加害者にもなりうることに気づき、このような二面性のある病に対する恐怖感情が生じたと考えられる。

第2項 感想文の分類からみた変容

(1) 感想文の分類による調査結果

前項までは、授業全体の調査結果と考察を行った。本項では、各授業の終わりに書いた感想文の分類の結果を述べる。学習者の感想文の分類は以下の3点を基準として個々に分けた。第1に、一文で切ることである。第2に、1つの単語で回答しているものについては、一文として捉えた。第3に、指示語を含む単語については、授業者＝研究者が文脈から判断をした。分けられた記述内容を以下の手順で分類した。第1に、分類項目は、高校生になって学びたい7項目とした。それに分類されないものは、「その他」とした。第2に、感想文を個々にカードにした。第3に、2名の大学院生が独立してKJ法で分類した。その後、相談して一致したもののみをカテゴリーとして採用した。以下に、全4時間分の感想文の分類の結果を示す。

1時間目の感想文の分類の結果

表3-4-1 1時間目の感想文の分類の結果

(N=28)

分類の観点	症状	予防	学習意欲	知識	治療法	感染	社会的対策	その他	合計
合計	2	2	0	17	1	19	0	4	45
%	4.4	4.4	0.0	37.8	2.2	42.2	0.0	8.9	100.0

1時間目の学習目標は、① エイズという病気について理解する。② エイズという「病者」について理解する、であった。1時間目の感想文の分類の結果から授業をみると、症状が2個(4.4%)、予防が2個(4.4%)、学習意欲が0個(0.0%)、知識が17個(37.8%)、治療法が1個(2.2%)、感染が19個(42.2%)、社会的対策が0個(0.0%)、その他が4個(8.9%)という結果となった。感想文をみると、「エイズについて今までよく分からなかったけど、だいぶ分かった」、「エイズウイルスには、弱点がたくさんあって普通の生活では感染しにくいと言うこと」などがあげられていた。これらの感想から、エイズという病気についての理解がなされ

たといえよう。また、「その他」の項目の感想をさらに分類すると、「HIV（患者）を支える友人」，「HIV 患者への偏見」が出てきており、「病者」への理解が見られた。

2 時間目の感想文の分類の結果

表3-4-2 2時間目の感想文の分類の結果 (N=28)

分類の観点	症状	予防	学習意欲	知識	治療法	感染	社会的対策	その他	合計
合計	1	0	15	18	1	7	2	5	49
%	2.0	0.0	30.6	36.7	2.0	14.3	4.1	10.2	100.0

2 時間目の学習目標は、「病者」との共生について考えることが出来る，であった。2 時間目の感想文の分類の結果から授業をみると，症状が 1 個 (2.0%)，予防が 0 個 (0.0%)，学習意欲が 15 個 (30.6%)，知識が 18 個 (36.7%)，治療法が 1 個 (2.0%)，感染が 7 個 (14.3%)，社会的対策が 2 個 (4.1%)，その他が 5 個 (10.2%) という結果となった。感想文をみると，「病気 (HIV) についてよく知って，普通に接することが大切だと分かった」，「友達は大きな支えになるということ」，「わたしにもできることがあるって，ことがわかった」などがあげられていた。「病者」との共生に関しては，シナリオ型教材と授業者＝研究者がエイズ患者に 4 回会いに行った体験談を学習したことにより，新たな知識を得て学習意欲が生まれたと考えられる。また，「その他」の項目の感想を分類すると，1 時間目の課題であった「病者」への理解を促す「感染者への差別」や，「感染者の生き方」に関する感想が見られた。

3 時間目の感想文の分類の結果

表3-4-3 3時間目の感想文の分類の結果 (N=28)

分類の観点	症状	予防	学習意欲	知識	治療法	感染	社会的対策	その他	合計
合計	0	22	4	18	0	6	2	8	60
%	0.0	36.7	6.7	30.0	0.0	10.0	3.3	13.3	100.0

3 時間目の学習目標は，エイズウイルスの感染の仕組みと予防について理解することができる，であった。3 時間目の感想文の分類の結果から授業をみると，症状が 0 個 (0.0%)，予防が 22 個 (36.7%)，学習意欲が 4 個 (6.7%)，知識が 18 個 (30.0%)，治療法が 0 個 (0.0%)，感染が 6 個 (10.0%)，社会的対策が 2 個 (3.3%)，その他が 8 個 (13.3%) という結果となった。感想文を見ると，「感染ルートがこんなにたくさんあるんだ，ということを理解した」，と

いう感染の仕組みに関する感想をあげていた。感染予防に関する感想には、「感染予防には、コンドームを使用するが、100%安全ではないということが分かった」、「自分はエイズに罹らない、と思うことは止めようと思いました」、などとあげていた。これらの感想から、エイズという病気を他人事としてではなく、自分のこととして受け止めていることが示唆された。また、「その他」の項目の感想を分類すると、本時の「授業の感想」と「使用した教材」に関する記述があり、「初めて分かったことがたくさんあった」、「私や周りの人は絶対大丈夫！かからないって思っていたけど、今日授業で習って絶対ということはない、と思った」、「教授の語りかける表情があまりにキリッとしていて、まじめに聞けた」という感想を記述していた。

4 時間目の感想文の分類の結果

表3-4-4 4時間目の感想文の分類の結果

(N=28)

分類の観点	症状	予防	学習意欲	知識	治療法	感染	社会的対策	その他	合計
合計	0	6	2	10	2	0	10	19	49
%	0.0	12.2	4.1	20.4	4.1	0.0	20.4	38.8	100.0

4 時間目の学習目標は、① エイズ検査の必要性について理解する。② 自分がエイズ感染者の立場に立った場合を考えて「病者」への社会的支援について理解するであった。4 時間目の感想文の分類の結果から授業をみると、症状が0個（0.0%），予防が6個（12.2%），学習意欲が2個（4.1%），知識が10個（20.4%），治療法が2個（4.1%），感染が0個（0.0%），社会的対策が10個（20.4%），その他が19個（38.8%）という結果となった。感想文を見ると、「エイズ検査というものがあるというのを知った」、「自分は大丈夫と思わずに、おかしいと思ったらすぐに検査をうけるべきだと思った」などから、エイズ検査の必要性について理解したといえる。「支援があることは、大切なのだということに改めて感じた」、「もし、自分が感染してしまっても支援があるので安心した」などという、「病者」への社会的支援について理解していることが示唆された。また、「その他」の項目の感想を分類すると、「感染者の思い」、「体験談のわかりやすさ」、「人との関わり」、「人に伝えること」、「病気と健康との間を生きることの大切さ」、「病気治療への願望」が記述されていた。これらの感想には、「感染者の彼は、ものすごくショックをうけているのがよく分かった」、「自分の病気をそばにいる人に伝えたいという考え方が、とてもまねのできないすごいことだと思いました」、「人間は、小さな病気を持つことも健康のうちだということがよく分かりました」、「完全に

治せる病気になって欲しいです」などと記述されていた。

(2) 感想文の分類による調査結果の考察

エイズの教材づくりを行うにあたり、友定（1996）の「病者」の考え方に依拠して、近藤（1999）のシナリオ型教材を取り入れて授業を展開した。さらに、学習者に「病者」の視点から自己の健康問題を考えさせるために、授業者＝研究者が患者に面会に行った体験談を語ったり、感染者の手記を聴かせたり、エイズ予防のDVDを視聴させた。感想文の分類から見ると、エイズという病気への正しい理解をさせる、「病者」の視点を持たせる、社会との関わりで考えさせる、という指導内容は理解されたといえる。

さらに、実践研究によって得られた感想文の「その他」の項目に注目すると、「人との関わり」、「病気を他人に伝えることの大切さ」、「自分にできること」、「学習前に感じていたこと」という4項目に分類された。

「人との関わり」に関する感想では、「その友だちのおかげで、心の方が救われたのかなと思った」、「自分を理解してくれる人がいて、すごくありがたいことだと思った」などと、理解者との関係性に関する記述が見られた。「病気を他人に伝えることの大切さ」に関する感想では、「病気に罹ったところで、周りに伝えていたのはすごく勇気のいることだろうと思ったし、病気の人を増やさないことだと思った」、「自分の病気をそばにいる人に伝えたいという考え方が、とてもまねできないすごいことだと思った」などと、自分の病気をカミングアウトすることが感染予防へ繋がるという記述が見られた。「自分にできること」に関する感想では、「エイズとちゃんと向き合っていこうと思った」、「学習した後わかったことは、病気の人たちを私たちがサポートしていかないといけないことです」などと、エイズという病気を自分のこととして受け止める記述が見られた。

「学習前に感じていたこと」に関する感想では、「この学習をする前は、エイズは聞いたことがあるだけで、怖い病気で自分には関係ないと思っていました」、「エイズに関して学ぶ前は、ただ怖いと思っていただけでよく知らなかった」などと、今回のエイズの学習を省察する記述が見られた。また、「この学習をする前には、エイズは聞いたことがあるだけで、怖い病気で、自分には関係ないと思っていました。でも、学習後には、自分も回りの人にも誰でも関わる病気でもっと怖い病気ということが分かりました。注意していきたいです」、「学習する前は、何も知らないくらいわかってなくて、自分は感染しないし、そういう人を避けていたと思う。でも、今は自分も感染する可能性はあるし、予防の方法も知っているし、前より良くわかった」などという感想から、授業前には、エイズは他人事であった

が、授業後には、エイズを自己の問題として引き取っていたといえよう。

学習者はこの実践研究の事前には、エイズを単に病気のひとつとして捉えていた。この実践研究の事後には、病気を抱えて生活をしている「病者」へと視点を変えた学習者の姿があった。3つの視点を含んだ「教材づくり」により、エイズという病気への認識の変容がもたらされ、自己の健康観の変容へとつながったのではないかと考えられる。つまり、生涯、病気を抱えても生きていける、という社会体制を含めた考え方にまで健康観が変容したといえるのではなかろうか。

第4節 成果と今後の課題

第1項 「教材づくり」を成立させるために必要とされること

ーエイズ教材からの示唆ー

本実践研究の結果から、「教材づくり」を成立させるために必要とされることとして、授業者＝研究者、学習者、授業参観者(授業者＝研究者の同僚)の3つの立場から示唆された内容を論述する。

(1) 授業者＝研究者に必要とされること

① 健康リテラシー(健康についての識字能力)の形成を保障すること

1981年アメリカでエイズという新しい病気が発見されて以来、医療や行政機関、教育機関、マスコミ関係がこの問題と関わってきた。そして、エイズ教育の方向も正しい知識の普及から共生、予防へと変遷してきた。その潮流のなかで、病気予防のための原因、対策も必要であろう。さらに、社会の動きとどのように関連して、自分の健康問題と繋がり合うのかという健康観の広がりや踏まえた上で、階層的にエイズの「教材づくり」を行う必要がある。

たとえ病を抱えていても周りの支えによって生きていけるといふ、社会との繋がりを意識させる「教材」は、エイズの医療体制が社会福祉との関係で構築してきた経緯³¹⁾もある。よって、エイズ教材の学習を通して、「病者」を受け入れるように社会が変わっていったことを知ることにより、自己の健康観を変容させることが可能である。つまり、エイズ教材を通して、健康リテラシーの形成を保障することが必要だといえよう。

② 「教材」を通して、他者と自己との視点の往還を行なわせること

本実践研究で対象とした学習者が授業前に抱いていた恐怖感情は、学習前の経験知によるイメージからくる恐怖感情であったが、学習後は新たな知見を得て自己防衛の認識へと変容をし

た。このことから、感情から認識へと導く「教材づくり」には、「病者」という他者の視点を持たせることにより、自己を客体視させる視点の往還が重要であることが示唆された。

③ 継続的な「教材づくり」へのフィールドワークを行うこと

森(1991)は、「料理の世界に『材料七分に腕三分』という言葉があります。これは、教育(授業や指導)の世界でもいえることです。材料、つまり、教材の良し悪しが指導の良否に大きく影響するのです。子どもの実態にマッチしたおもしろい教材を発掘できたとき、指導は成功したも同然です。逆に、教材が悪ければ、指導にならないものです」³²⁾と、「教材づくり」の大切さを提言している。学習者に授業をする前に、その「教材」に関する最新の情報を収集するために、文献による先行研究はもちろんのこと、講演会へ参加する、現地に赴く、研究者や患者に会いに行くなど情報を収集して、「教材づくり」を行うことの重要性が示唆された。以上から、学習者の知的好奇心を伸ばす「教材づくり」は、授業者＝研究者の知的好奇心や探究心にかかっているといえよう。

(2) 学習者に必要とされること

学習内容に関して、疑問に思っていることや分からないこと、新たな発見を授業者＝研究者に伝えて、双方向から学びの主体者となることである。また、授業中の他者の疑問や意見を傾聴して、異なる考えを知ることにより認識を深めることである。さらに、「教材」として登場した他者の生き方を知ることが必要であると示唆された。

(3) 授業参観者(授業者＝研究者の同僚)に必要とされること

① 学習者を理解するための多様な視点の提供を行うこと

「教材づくり」のために、取り上げる「教材」の選択を巡って、授業参観者から本実践研究の学習者の特性として、5点の示唆を得た。第1に、素直な反面疑うことがなく情報を鵜呑みにしてしまう傾向があるので、様々な見方や考え方を指導する必要がある。第2に、新しい知識を得ると情報の上書きが行われ、過去の知識を忘れてしまう面があるので、何度も繰り返し指導する必要がある。第3に、物事を関連づけて理解するのが不得手なため、1時間に1つのことを繰り返して指導する必要がある。第4に、「なぜ」という思考パターンを省略して、すぐに結果を求めたがる傾向がある。第5に、難しい言葉は、平易な言葉や学習者の生活実態に近い言葉に置き換えて、説明をする必要がある。以上のような示唆は、第三者的な視点を持つ授業参観者の存在によって得られたものであり、「教材づくり」に活かされた。

② 新たな教材選択の視点の提供を行うこと

エイズに罹った「ライアン・ホワイト君」を取り扱った「教材」には、母親が登場している。

授業参観者が、その点を効果的だと指摘した。授業＝研究者は、それまで母親を扱った「教材」の存在を意識していなかった。授業参観者から、母親が存在する「教材」を選択することは、女子高校生が将来の自分を考える契機になる、という指摘を受けた。その指摘により、新たな教材選択の視点が獲得された。

③授業者が開発した教材・教具への評価を行うこと

2時間目に、「病者」との共生を考えさせる場面で、授業者＝研究者が患者に会いに行った体験談を行った。この時、学習者は全員顔を上げて熱心に聞いていた。この授業を参観していた教師から、授業者＝研究者が気づかない点を的確に指摘し評価する授業参観者の存在の意味が示された。また、体験談を教材化することの有効性を示唆された。

第2項 成果と今後の課題

本実践研究で得られた成果は、次の通りである。第3節第1項では、事前・事後において同一内容の調査を行い、次の3点が明らかになった。第1に、学習者のエイズという病気への正しい知識理解が進んだことである。第2に、持続的なエイズ教材の効果として、予防を行えば感染の可能性が減少するという考え方が生じたことである。第3に、学習者が抱いた授業前後のエイズという病気への恐怖感情は、身体の防御反応と関連した肯定的な情動へと変容したことである。

第3節第2項では、4時間分の授業の感想文による調査を行い、次の2点が明らかになった。第1に、授業前は、学習者にとってエイズは他人事であったが、授業後は、自己の問題として考えるようになり、主体化が進んだことである。第2に、生涯、病気を抱えても社会との関わりのなかで生きていける、というように健康観が個人から社会へと広がったことである。

以上のことから、高等学校の保健分野におけるエイズの教材づくりにおいては、次の3点の示唆を得た。第1に、「病者」という他者を自己の立場に置き換えて考えることにより、社会という横軸の広がりの中から健康観を考える「教材づくり」の視点が明らかになった。第2に、「病者」という視点から健康問題を考えることにより、今まで気づかなかった社会との関わりにおいて、自己の健康が支えられているという認識の広がりを促進するという示唆を得た。第3に、エイズを自己の問題として引き取った場合、自己の命は過去から未来へと繋がり合ってきたという縦の時間軸で考える「教材づくり」の必要性が示唆された。以上から、自己の視点を「病者」という他者や、繋がり合う生命として、過去から未来へと視点を変えさせること、さらに、社会という横軸の広がりや時間という縦軸との繋がりを意識させることにより、「自

己の問題」へと引き取らせる「教材づくり」の必要性が示唆された。

第4節では、「教材づくり」を成立させるために必要とされることとして、授業者＝研究者、学習者、授業参観者(授業者＝研究者の同僚)の3つの立場から論述した。授業者＝研究者に必要とされることは、次の3点である。第1に、健康リテラシー(健康についての識字能力)の形成を保障することである。第2に、「教材」を通して他者と自己との視点の往還を行わせることである。第3に、継続的な「教材づくり」へのフィールドワークを行うことである。学習者に必要とされることは、次の2点である。第1に、授業者＝研究者と学習者との双方向からの学びの主体者となることである。第2に、他者との関わりにより、異なる意見を通して自己の認識の拡大をすること、である。授業参観者(授業者＝研究者の同僚)に必要とされることは、次の3点である。第1に、学習者を理解するための多様な視点の提供をすることである。第2に、新たな教材選択の視点への提供を行うことである。第3に、授業者が開発した教材・教具への評価を行うことである。

今後の課題として、次の3点が考えられる。第1に、今回の研究対象者は通常の保健授業で実践を行ったため、女子のクラスに限定した。したがって、今回の女子のクラスの実践では、実践者＝研究者の同僚から母親の視点の大切さが指摘された。男子クラス、または、男女クラスで実践研究を行うと結果が異なる可能性が考えられる。その際、「病者」を抱える母親の視点のみならず父親や家族の視点などを考慮する必要がある。授業対象の拡大が今後の課題である。第2に、今回の実践研究は、高等学校に限定したものであった。今後は、小・中学校との系統的なエイズの「教材づくり」を検討する必要がある。第3に、保健教材はエイズばかりではない。他の教材も取り上げて「教材づくり」を行い、同様の実践研究を検討することである。

注

- 1) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』東山書房 2009年、112-116頁。
- 2) 厚生労働省科学研究エイズ対策事業研究班「正しいことを知ることから始めましょう エイズの今を知っていますか？」 http://www.aidssti.com/m_007.html (2014年10月3日取得)。
- 3) 藤田和也「アメリカ合衆国保健教育事情1 エイズ教育は保健教育の最重要課題」『体育

科教育』第40巻第6号，大修館書店，1992年，77-79頁。和唐正勝「エイズのリスク認識の形成をめざす教材の開発」（平成15-16年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）課題番号15500471 研究成果報告書『エイズのリスク認識の形成をめざす教材の開発』研究代表者：和唐正勝）2005年，15頁。木原雅子『10代の性行動と日本社会—そしてWYSH教育の視点—』ミネルヴァ書房，2008年，21-25頁。藤岡彰「HIV感染，AIDSの危機的状況とそれに対する教育格差と性教育の問題」昭和女子大学『学苑・総合教育センター特集』811号，2008年，64頁。

- 4) 木原雅子，前掲書，69頁。
- 5) 武田裕行・松岡弘「エイズ教育の変遷に関する研究」『大阪教育大学紀要 第V部門』第46巻第1号，1997年，121頁。
- 6) 和唐正勝，前掲報告書，5-9頁。
- 7) ヘルスプロモーションについて：日本ヘルスプロモーション学会ホームページ www.jshp.net/gaiyou/gaiyou-top.html（2014年10月2日取得）。
- 8) アーサー・クライマン/江口重幸他訳『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房，1998年，207頁。
- 9) 和唐正勝「エイズⅠ」『体育科教育』第36巻第11号，大修館書店，1988年a，19-21頁。和唐正勝「エイズⅡ」『体育科教育』第36巻第12号，大修館書店，1988年b，21-24頁。綿引芳夫「高校におけるAIDS教育の試案」日本学校保健学会『学校保健研究』第34巻第6号，1992年，254-259頁。櫛引宣子「患者・感染者への偏見・差別の実態から考える」『体育科教育別冊⑩』第41巻第3号，大修館書店，1993年，123-130頁。鈴木正弘「『政治経済』における売買春の授業」『体育科教育 別冊⑩』第41巻第3号，大修館書店，1993年，131-134頁。加藤潤子「エイズと対話する—エイズ時代を生きるふたりのすてきなコミュニケーションのために—」『体育科教育 別冊⑩』第41巻第3号，大修館書店，1993年，135-139頁。貴志泉「エイズ患者・感染者のサポート」『体育科教育 別冊⑩』第41巻第3号，大修館書店，1993年，140-143頁。水間正雄「薬害としてのエイズ」『体育科教育 別冊⑩』第41巻第3号，大修館書店，1993年，144-147頁。小田切孝子「課題学習としてのエイズへの取り組み」『体育科教育 別冊⑩』第41巻第3号，大修館書店，1993年，148-150頁。佐々木啓子「保健の授業からエイズを学ぶ」『体育科教育 別冊⑮』第45巻第8号，大修館書店，1997年，108-111頁。前川ちよの「性感染

症の授業」『体育科教育 別冊⑮』第 45 巻第 8 号，大修館書店，1997 年，113-116 頁。遠藤保子「エイズを身近に感じて学ぶために（1 年保健）」『体育科教育 別冊⑮』第 45 巻第 8 号，大修館書店，1997 年，117-120 頁。宮里和宏「『エイズ』教育と自主的・実践的態度の育成」『学校体育』第 50 巻第 7 号，日本体育社，1997 年，70-74 頁。坂本勲「HIV 感染者に対する偏見・差別の払拭をめざしたエイズ教育—ケース・スタディを用いて—」『学校体育』第 52 巻第 2 号，日本体育社，1999 年，65-67 頁。五十嵐哲也「高校生及び大学生の HIV 感染予防行動を規定する要因」日本学校保健学会『学校保健研究』第 44 巻第 3 号，2002 年，207-214 頁。和唐正勝，前掲報告書。

- 10) 和唐正勝，前掲報告書，7 頁。
- 11) 文部科学省，前掲書，112 頁。
- 12) 友定保博「保健教育における〈エイズ〉の教育内容」（平成 6・7 年度科学研究費補助金総合研究（A）課題番号 06301084 研究成果報告書『保健教育におけるエイズ予防教材の開発に関する研究』研究代表者：和唐正勝）1996 年，9-12 頁。
- 13) 友定保博，前掲報告書，12 頁。
- 14) 近藤真庸「エイズと共に生きる」保健教材研究会編『新版「授業書」方式による保健の授業』大修館書店，1999 年，153-159 頁。
- 15) 加藤潤子，前掲論文，135-139 頁。
- 16) 高田典衛『体育授業の改造』杏林書院，1979 年，111-114 頁。高田典衛『体育授業研究シリーズ 5 よい体育授業と教師』大修館書店，1985 年，233 頁。
- 17) 近藤真庸「エイズと共に生きる」，153-159 頁。
- 18) Around You ～VOICES～ 今，ここに生きている私たちのメッセージ，3 私の一步（著：本庄真美子，朗読：林唯衣）。著作：札幌市，企画：世界エイズデー札幌実行委員会，制作 AIR-G'FM 北海道，2010 年。www.wad-sapporo.org/podcast.html（2011 年 2 月 8 日取得）。
- 19) 数見隆生『教育保健学への構図—教育としての学校保健の進展のために—』大修館書店，1994 年，208 頁。
- 20) 「皮膚からはエイズウイルスは感染しない」という簡易実験とは，近藤真庸の実践にヒントを得て，割り箸に濾紙を巻き，その上に油紙をしっかりと巻く。ビーカーに赤い絵の具を溶かし血液に見立てる。このビーカーの中に油紙を巻いた棒を浸ける。皮膚に見立

てた油紙が防御して、粘膜には血液が染みしていないことを可視的に理解させるものである（近藤真庸『体験的「エイズ教育」実践論』あさひ工芸，1995年，52-56頁）。

- 21) 日本医師会感染症危機管理対策室：『日本医師会市民公開講座 知って防ごう性感染症現状と対策』（DVD），NHK エデュケーショナル，2007年。
- 22) 厚生労働省科学研究エイズ対策事業研究班「正しいことを知ることから始めましょう エイズの今を知っていますか？」http://www.aidssti.com/m_006_002.htm（2011年2月4日取得）。
- 23) JEX CONDOMS のポスター（製作元 JEX 株式会社 2009年）。
- 24) Around You ～VOICES～ 今，ここに生きている私たちのメッセージ，11 HIV ポジティブ1年生（著：リュウタ，朗読：油谷昭雄）。著作：札幌市，企画：世界エイズデー札幌実行委員会，制作 AIR-G'FM 北海道，2010年。www.wad-sapporo.org/podcast.html（2011年2月8日取得）。
- 25) 立川昭二『病いと健康のあいだ』新潮社，1991年，29-30頁。
- 26) 日本学校保健会『AIDS 正しい理解のために』第一法規出版，1992年，6頁。
- 27) 近藤真庸「エイズと共に生きる」，156頁。
- 28) 和唐正勝「8 エイズ」保健教材研究会編『続「授業書」方式による保健の授業』大修館書店，1991年，140頁。
- 29) 五島真理為「エイズは我々に何をもちたか」『エイズ対策入門』独立行政法人 国際協力機構青年海外協力隊事務局，2010年，13頁。
<http://s3-ap-northeast-1.amazonaws.com/lindoc-s3/documents/659/files/0903fe227fcfccafba51c87351ac2ff10aa440cb.PDF?1324030824>（2014年9月12日取得）。
- 30) 福田正治「感情の階層性と脳の進化—社会的感情の進化的位置づけ—」日本感情心理学会『感情心理学研究』第16巻第1号，2008年，28頁。
- 31) 若林チヒロ・生島嗣「HIV 感染症をめぐる社会福祉分野の課題—就労を中心に」日本エイズ学会『日本エイズ学会誌』7巻3号，2005年，189-192頁，小西加保留・石川雅子他「HIV 感染症による長期療養者とその受け入れ体制に関する研究」日本エイズ学会『日本エイズ学会誌』9巻2号，2007年，167-172頁。
- 32) 森昭三『これからの養護教諭—教育的視座からの提言—』大修館書店，1991年，206頁。

第4章 3つの視点を含んだ「教材づくり」による実践研究

—創作ダンスの授業実践に焦点づけて—

第1節 体育分野における創作ダンスを取り上げる背景

第1項 創作ダンスを取り上げる理由

体育という科目において、創作ダンスを本実践研究の対象とした理由は4点ある。第1に、グローバル化が進む生涯学習の観点から、身体活動を通じた豊かなコミュニケーションツールとして異文化理解¹⁾にも役立つ運動文化といえるからである。第2に、島内(2011)によれば、「戦後、学校教育の中で体育の一領域として位置づけられ、スポーツの『競技性』、体操の『補強矯正と体力づくり』と並んでその『表現性』をもって質的に比肩しうる運動文化として認められてきた」²⁾からである。第3に、『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』においてダンスは、「『創作ダンス』、『フォークダンス』、『現代的なリズムのダンス』で構成され」³⁾ており、高等学校のダンスの学習内容は、中学校との接続をふまえて、「感じを込めて踊ったり、仲間と自由に踊ったりする楽しさや喜びを味わい、それぞれ特有の表現や踊りを高めて交流や発表ができるようにする」⁴⁾ことが求められている。つまり、ダンスは自己の活動自体に満足するばかりでなく、仲間や鑑賞者という他者の存在によって、運動文化が成立するという特性を持っているからである。第4に、表現性や他者の存在という特性に加えて、村田(2012)は、ダンスは「他の運動領域のように技術の構造・形ありきではなく、活動そのもののプロセスを大切にす。心と体を揺さぶり、踊る楽しさや動きの面白さに触れ、いつの間にか楽しく『なっていく』、言い換えれば、いつの間にか『その気になり、本気になっていく』プロセスである。『みんなが違うこと』を認め、多様だから面白いのである」⁵⁾と指摘している。つまり、「『心身の解放』『身体による豊かなコミュニケーション』『いま・ここから創り出す問題解決学習(ゴールフリー学習)』」⁶⁾を、創作ダンスの特性として挙げているからである。以上のことから、創作ダンスは、高等学校における体育の中で、仲間や鑑賞者といった他者性を含みながら創造性を追求する点に学習させる意義が存在するといえる。

第2項 高等学校における創作ダンスの先行研究

高等学校における創作ダンスの先行研究を探るために、CiNiiで「高等学校」*「創作ダンス」, 「高等学校」*「創作舞踊」と検索をかけると、22件がヒットした。それらは2つ

に大別できた。

第1に、ダンスに関する理論研究であった。芳野らは、学校体育におけるダンスを、体育運動のひとつとして位置づけ「体育的ダンス」⁷⁾と規定していた。斉藤⁸⁾は、「創作ダンスにおける楽しさ」を高校生を対象に因子分析を用いて明らかにしていた。朴ら⁹⁾は、日本と韓国のダンス学習の変遷について言及しており、今日の創作ダンス必修化の経過を明らかにしていた。

第2に、創作ダンスの多様な指導のコツや工夫などの指導事例であった¹⁰⁾。それらは4つに分類された。第1に、遊びの要素を導入した指導事例であった。課題学習に入る前段階として、茅野ら¹¹⁾は、ゲームを取り入れた実践を行い、秦¹²⁾は、オノマトペや鏡のような遊びの動きから心と体を解きほぐす実践を紹介していた。両者の実践は、「子どもの心を忘れない」¹³⁾という、学習者の印象に残る指導言語と重なり合う指導であるといえよう。第2に、創作ダンスの授業における人間関係への配慮に関わる指導事例であった。北田は、「生徒との日常的なふれ合いがなくては、高校生の柔軟な見方を表現に導く“適切な”助言指導は行えないだろう」¹⁴⁾として、包括的に生徒と関わることの大切さを述べていた。また、ダンスが嫌いな生徒が陥りやすい誤解として、「人間関係のまずさからくる気分をダンス嫌いと同化した場合」¹⁵⁾を取り上げて、人間関係が作品づくりに及ぼす影響を指摘していた。

第3に、創作ダンス発表会に至る教師と生徒相互の学びの様相に関する指導事例であった。吉田¹⁶⁾、長尾¹⁷⁾、仙波¹⁸⁾、奥澤¹⁹⁾、片寄²⁰⁾、由利ら²¹⁾は、創作ダンスを授業内発表会だけでなく校内発表会まで発展させたことにより、教師も生徒も創作ダンスを通して一体感や達成感を体験して、指導上の課題発見と共に創作ダンスの特性を再認識した実践を記述していた。

第4に、創作ダンスの特性に関する指導事例であった。大津²²⁾は、不登校気味の生徒や身体にハンディを持つ生徒にプラスの波及効果をもたらしたことを成果の一端として指摘していた。

これら4つに共通することは、指導事例の多くが「全国ダンス・表現運動授業研究会」²³⁾が提唱する課題学習を用いた実践であることであった。

以上のことから、高等学校における創作ダンスの先行研究の動向は、創作ダンスの特性のひとつである心身の解放をめざす方向に、方向づけられていることが示唆された。

創作ダンスの特性は、村田が述べているように、「他の運動領域のように技術の構造・形ありきではなく、活動そのもののプロセスを大切にする。心と体を揺さぶり、踊る楽しさや動きの面白さに触れ、いつの間にか楽しく『なっていく』」²⁴⁾プロセスを通して心身が解放されていく運動であるといえる。中村によれば、創作ダンスで学ばせたい技能は、「どの題材(運動)

を学習するかではなく、その題材を用いてどんな技能(運動技能・創作技能)を習得し、それらを活用して自分らしい動きで表現するかである。そして、表わしたい主題・イメージを効果的に表現して作品にまとめ、踊ることができることである」²⁵⁾。

そこで、本実践研究では、生徒が共通に体験した修学旅行をテーマとして取り上げ、生徒が自分の体験を表現することを通して自己解放していくようにした。

第3項 創作ダンスの「教材づくり」の視点

本実践研究では、全国ダンス・表現運動研究会が実践する「課題学習」の指導法²⁶⁾を援用して、「教材づくり」の内容を構成した。まず、授業者＝研究者と学習者が一緒に動いてみることによる「『習得と活用(応用)』」²⁷⁾の円環を学習内容に取り入れることである。村田は、授業者＝研究者と学習者との関わり方の重要性を指摘しているのである。次に、学習者が鑑賞者として他者の視点で、作品をみることが求められる。授業の中に鑑賞を取り入れ、他者の視点で作品を見られるようにすることが必要である。

以上の内容を含めた創作ダンス教材として、教師と学習者が一緒に動いてみることによる「『習得と活用(応用)』」²⁸⁾の円環の学習過程を取り入れる、学習者が鑑賞者として、他者の視点で作品をみる、を「教材づくり」の内容とした。具体的な教材として、共通体験である修学旅行を題材にした教材を作成することにした。

第2節 本実践研究の目的と方法

第1項 本実践研究の目的

本実践研究の目的は、第2章で示した「教材づくり」の3つの視点、①個を大切にする、②省察をする、③同僚による学び合いをする、を含んで開発した創作ダンス教材を用いて高校生の身体認識を広げることである。それを通して「教材づくり」を成立させるために必要なことについて検討する。

第2項 本実践研究の方法

(1) 本実践研究で依拠した事例研究の方法論

本実践研究で検討した先行研究には、熊谷²⁹⁾、諏訪³⁰⁾、高橋³¹⁾、西³²⁾、岡野ら³³⁾の研究がある。熊谷(2003)は、母親となったひとりの女性が、再度ダンスを創作し踊る過程において、

自己の内面と向きあうことにより、どのように自我の拡充がもたらされたかを事例的に研究している。諏訪（2009）は、ひとりの男性被験者が、自己の野球のバッティングフォームを修正していく過程において、コツを掴むための身体知を解明していくアプローチを考察している。高橋（2011）は、跳び箱が跳べなかった小学校4年生の男児が跳べるようになった過程を取り上げ、本人の行動と教師の指導とに注目して、ナラティブ分析を行った事例を紹介している。西（2003）は、自己と他者が身体を介して出会う表現活動において、「自他の交流」や「共感」に着目した実証的研究を行っている。岡野ら（2011）は、縄跳び運動と跳び箱運動において、運動の苦手な中学生3名を事例として取り上げ、アクション・リサーチを用いて、運動の特性と学びの姿を解明している。特に、岡野らの研究は、アクション・リサーチの視点を考慮に入れ、体育における学びの過程を考察したもので、本実践研究にとって有効だと考えられる。そこで、本実践研究では、岡野らのアクション・リサーチの方法論にしたがうことにした。

（2）本実践研究の方法

研究期間：2010年11月9日から2011年1月11日(体育の授業、計12時間（詳細は表4-2参照））。

2010年11月 9日（火）創作ダンスの導入と予備調査

11月10日（水）課題学習Ⅰ「新聞紙と遊ぼう」

11月16日（火）課題学習Ⅱ「走るー止まる」

11月17日（水）課題学習Ⅲ「集まるーとび散る」

11月24日（水）課題学習Ⅳ「走るー止まる」と「群」

11月30日（火）課題学習ⅠからⅣの総復習

課題学習Ⅴ「ひとこまデッサン」

12月 1日（水）クラスごとの作品づくりと相互評価³⁴⁾

12月14日（火）群の作品とクラスごとの作品の踊り込み

12月15日（水）中間発表会（創作と鑑賞）

12月21日（火）作品の修正と踊り込み

12月22日（水）発表会（創作と鑑賞）

2011年 1月11日（火）作品の視聴と単元全体の振り返り

研究対象：授業者＝研究者が担当するA高校2年生A組でダンスを履修した女子生徒。学習者は全員で28名であったが、データに欠損値のある14名を除いた残りの14名を調査対象者とした。

単元名：創作ダンス

収集した資料：

- a. 予備調査として、創作ダンスに関して中学校の既習内容を記述させた。
- b. 各授業時間の残り5分間に本時の省察を記述させた。
- c. 創作ダンス単元全体の振り返りを、単元最後の時間に5分程度記述させた。

研究手続き：

a. 創作ダンス単元の1回目（2010年11月9日）に、中学時代の創作ダンスの既習内容の予備調査を実施した。設問項目は、1. 中学1年生から3年生までの創作ダンスの実施時期、2. 創作ダンスの授業を実施した時間、3. どのようなテーマで踊ったのか、4. グループの人数、5. 創作方法、6. 伴奏音の選択方法、7. 発表会実施の有無、8. 中学時代の創作ダンスの思い出（友達・学んだこと・先生に褒められた等）であった。学習者は各自のペースで回答を行った。所要時間は5分程度であった。このうち、「8. 中学時代の創作ダンスの思い出」に関する記述を、「教材づくり」の参考とした。

b. 学習者の予備調査の記述内容を分類した。以下の3点を基準として個々に分けた。第1に、一文で切った。第2に、1つの単語で回答しているものについては一文として捉えた。第3に、指示語を含む単語については、授業者＝研究者が文脈から判断をした。

分類の手順は以下のとおりであった。第1に、分けられた記述内容に通し番号をつけた。第2に、表4-1のように記述内容を番号順に並べた。第3に、これらをカードにし、2名の大学院生が独立してKJ法で分類した。第4に、2名の大学院生が、分類したカテゴリーをもとに、相談して一致したもののみを新たなカテゴリーとして採用した。

表4-1 予備調査の分類

1. 高低、大小をつけないといけないのが大変でした
2. みんな消極的で、協力した覚えがない
3. 練習の時も誰も動かず、それぞれが自分勝手なことばかりして、作品が完成しなかった
4. 二度とやりたくないと思った
5. 最終的には、放課後残って考えることとなったが、来ない人ばかりで、わざわざパソコン室まで利用したくせに何も得られず、発表当日も休む人ばかりだった
6. 先生には、こんなダメな奴らは初めてだといわれた
7. ダンスを考える大変さを学んだ
8. 友達と言いつたり、意見を出したりして大変だったけど、最後はまとめて達成感があった
9. 発表会の日に担任の先生に見てもらいビデオを撮ってもらった
10. 振りが完成したときはとてもうれしかった
11. 休憩時間も練習をした
12. 時間がなくて、急いで作った覚えがある
13. テーマとかなかなか決まらなくて大変だった
14. 「B中よっちょれ」というソーランを体育祭で踊った
15. 基本はあるけど、所々は自分たちでアレンジして声とかもつけたりした
16. なかなかダンスが全部を通して踊れなくて、休日に集まって練習した
17. 動きを大きくすること
18. 自分たちで音楽や踊りを決めてやった
19. 3年生最後のダンスの授業では、曲の通りに踊るのではなく、あらかじめテーマを創って踊りました
20. ヒーローをテーマにしてグループみんなで踊りました
21. 発想がおもしろいと先生に言われた
22. ダンスをみんなでしてとても楽しかった
23. 振り付けが難しかった
24. 振り付けや移動などを話し合いながら決めるのは、大変だった
25. 楽しくできた
26. みんなで、一つのダンスを協力して踊ることを学んだ
27. 協力してできた
28. ダンスをできない人とできる人の差ができていた
29. クラスの代表になってみんなを引っ張っていけるか不安だったけど、友達が協力していいダンスができた

その結果、次の9つのカテゴリーに分けられた。① 難しさ 7 (24.1%)、② 協力 4 (13.8%)、③ 自主性 3 (10.3%)、④ 楽しさ 3 (10.3%)、⑤ 教員 3 (10.3%)、⑥ 非協力 3 (10.3%)、⑦ テーマ 3 (10.3%)、⑧ 学んだ内容 1 (3.4%)、⑨ その他 1 (3.4%) であった。これらの

項目のうち、⑤ 教員、⑥ 非協力、⑨ その他の項目へ否定的な記述をしていたのは、A子ひとりであった。そこで、A子を今回の調査対象者とした。

c. 11回の研究対象のうち、2回目と3回目及び5回目から10回目は、授業の最後の5分間で振り返り用紙に、授業の感想を記入させた。4回目は、相互にグループの作品を鑑賞させたが、振り返り用紙に記入する時間がなく、11月19日（金）にVTRを視聴させた後、感想を記述させた。所要時間は、10分程度であった。毎時間の振り返り用紙は、形式を統一し、毎時間のテーマの部分のみ変更したものをを用いた。

d. 膝のけがにより、創作ダンスに参加出来ない生徒が1名いた（見学者（生徒）と記す）。見学者（生徒）は、2回目から10回目までの授業で一点固定式によるビデオ録画を行った。

e. 学習者は、ビデオに録画された授業記録を動きの省察に活用した。

f. 2011年1月11日（火）に、作品の鑑賞と単元全体の振り返りを行った。保健の授業を20分間使用して行った。

創作ダンス 12時間の単元構成：

創作ダンス（12時間）のテーマは、北海道への修学旅行を取り上げた「感動！北海道」とした。研究対象のA高校では、2年次の10月に北海道へ3泊4日の修学旅行を実施しており、その修学旅行へ授業者＝研究者も同行した。創作ダンス12時間の単元構成は、表4-2に示したとおりである。授業展開の手順は、先行研究に見た創作ダンスの課題学習を学習させたあと、クラス全体の群と各グループの小作品を繋いだ連作仕立てにして「感動！北海道」を表現させることにした。この方法は、基礎から応用へという段階を踏み、最後は授業クラスで一つの連作仕立ての作品を踊る方法である。

創作ダンス全12時間は4部構成とした。第1部では、1時間目で単元全体の導入を行った。その内容は3点であった。第1に、授業者＝研究者と学習者が共に中学校の創作ダンスの既習内容を知り、創作ダンスの概念と授業の約束事の共通認識を持つことである。第2に、創作ダンスのイメージを映像によって理解することである。第3に、中学時代の創作ダンスにおける人間関係を省察させて、学習者の授業へのレディネスを得ることであった。

第2部の2時間目から5時間目は、創作ダンスの基礎的な運動要素を課題学習として学習させた。創作ダンスの基礎的な要素とは、2時間目の「ひと流れ」の動き、3時間目の「メリハリ」³⁵⁾、4時間目の「群」の変化であった。5時間目はダンステクニックである「メリハリ」、「群」、「ひと流れ」の要素を使った復習として、クラス全員が一機の飛行機になりきった動きを行った。3時間目から5時間目は、創作して相互に見合う鑑賞者としての学習を行った。

6時間目は、2時間目から5時間目までの復習を行い、各グループの小作品づくりを行った。

第3部の6時間目から8時間目は、各グループの小作品を創作する時間であった。学習者4グループの小作品とクラス全員の飛行機の動きをつないで連作仕立てにした「感動！北海道」を表現する構成にした。

第4部の第9時間目から12時間目は、発表－鑑賞－単元全体の省察を行う時間であった。11時間目の発表会にむけて第9時間目は中間発表会を行い、10時間目は、9時間目の動きの修正を行った。12時間目は、ビデオ録画による作品の鑑賞と単元全体の振り返りを行った。創作過程においては、お互いが踊り手であり鑑賞者であるという自己と他者の視点の往還を行う学習展開にした。

表4-2 創作ダンスの単元計画と研究計画

クラス	時間	月日	曜日・限	時間	場所	学習内容	研究回数	研究計画
2A 28名	1	11/9	火・1	50分	化学教室	【創作ダンスの導入】 ①中学時代の創作ダンスに関する調査をする。 ②参考作品の視聴をとおして、創作ダンスの概念（作り手と鑑賞者の二つの立場）を理解する。 ③今後の授業計画を知る。単元全体の6時間目までは、課題学習を行い、後半は修学旅行の感動をクラスごとに繋いで連作「感動！北海道」に仕上げることを知る。	1	【資料4-1】 創作ダンス事前調査
	2	11/10	水・6	50分	体育館	【動きづくりと鑑賞】 課題学習Ⅰ「しんぶんし」を使って身体による表現をする。ストーリー性のある、「ひと流れ」の小作品を創ることを目標とする	2	一点固定式ビデオ録画 【資料4-2】 創作ダンス振り返りシート
	3	11/16	火・1	50分	体育館	【動きづくりと鑑賞】 課題学習Ⅱ「走る 一止まる」という運動要素をもとに、様々なバリエーションを加えて動きの足し算ができる。「メリハリ」のついた動きができることを目標とする。	3	一点固定式ビデオ録画 【資料4-3】 創作ダンス振り返りシート
	4	11/17	水・6	50分	体育館	【動きづくりと鑑賞】 課題学習Ⅲ「集まる 一とび散る」という運動要素から、「群の変化」を学び、グループで小作品を創る。動きのメリハリと空間を意識して動くことを目標とする。	4	一点固定式ビデオ録画 【資料4-4】 創作ダンス振り返りシート
	5	11/24	水・6	50分	体育館	【動きづくりと鑑賞】 課題学習Ⅳ「走る 一止まる」と「群」の運動要素を組み合わせて、修学旅行で乗った飛行機の動きに応用して、クラスで群になって動いてみる。踊った後に、ビデオで飛行機の動きを視聴する。	5	一点固定式ビデオ録画 【資料4-5】 創作ダンス振り返りシート
	6	11/30	火・1	50分	体育館	【動きづくりと鑑賞】 課題学習Ⅰ～Ⅳの総復習をする。 課題学習Ⅴ「修学旅行のひとこま」のデッサンをクラスごとに7～8名で行う。	6	一点固定式ビデオ録画 【資料4-6】 創作ダンス振り返りシート
	7	12/1	水・6	50分	体育館	クラスごとの作品づくりと相互評価		相互評価表を用いた
	8	12/14	火・1	50分	体育館	全体の飛行機の作品とクラスごとの作品の踊り込み	7	一点固定式ビデオ録画 【資料4-7】 創作ダンス振り返りシート
	9	12/15	水・6	50分	体育館	中間発表（創作と鑑賞）	8	一点固定式ビデオ録画 【資料4-8】 創作ダンス振り返りシート
	10	12/21	火・1	50分	体育館	作品の修正と踊り込み	9	一点固定式ビデオ録画 【資料4-9】 創作ダンス振り返りシート
	11	12/22	水・6	50分	体育館	発表会（発表と鑑賞） D先生のクラスと合同発表会	10	一点固定式ビデオ録画 【資料4-10】 創作ダンス振り返りシート
	12	1/11	火・1	20分、30分	化学教室	作品の視聴とまとめ。残りの30分は保健を実施	11	発表会の映像 【資料4-11】 創作ダンスのまとめ

○印は、研究対象授業を指す。学習者は28名であったが、データに欠損値のある者を除いた14名を研究対象とした。

第3節 結果と考察

学習者の予備調査において、ただ一人創作ダンスへの否定的な記述をしていたA子を事例研究の対象とした。以下、A子の変容として、感想文の記述内容は「 」, カテゴリー名は()で示した。

第1項 A子の感想文の記述内容の変容

第1回目に行った中学時代の予備調査の記述は、「先生には、こんなダメな奴らは初めてだといわれた」(教員), 「みんな消極的で協力した覚えがない」(非協力), 「練習の時も誰も動かず、それぞれが自分勝手なことばかりして作品が完成しなかった」(非協力), 「最終的には、放課後残って考えることとなったが、来ない人ばかりで、わざわざパソコン室まで利用したくせに何も得られず、発表当日休む人ばかりだった」(非協力), であった。

第2回目の記述は、「意欲がない」(非協力), 「自分の都合ばかり考えて、まわりに合わせることを知らない」(非協力), 「こういう奴がいると集団がまとまらなくて、良い作品ができないと思う」(非協力), 「けれども、いくら頑張っても意欲はわかない」(非協力)であった。

第3回目の記述は、「もう少し無理をしないと次からは、ダメになりそうだ」(難しさ), 「少し無理をして、プライドを捨てて頑張った」(学んだ内容), 「これを書いている今も顔から、火が出そうに感じている」(その他), 「恥ずかしい」(その他), であった。

第4回目の記述は、「自分がみんなについて行こうと必死だったのがわかった」(難しさ), 「もっと、積極的に取り組まなければならないことはわかっているが、感情を断ち切れない」(難しさ), 「もう少し、きびきびと動かないとみんなの足を引っ張るばかりになると思った」(自主性), 「吐き気がする」(非協力), 「踊ることに何も意味を見いだせない」(非協力), 「いっそのこと消えてしまいたい」(非協力), 「泣いてばかりで、あの場に不必要なことばかりしている」(非協力), 「自分が価値がない者に見える」(非協力), 「『こんにやく交通事故』自分が醜いことが良くわかった」(学んだ内容), 「飛行機の修正版を見て、それなりに良かったと思った」(その他), であった。

第5回目の記述は、「よくわからない」(難しい), 「でも、今は少しだけがんばれる気がする」(自主性), 「裸足になることに、すごく抵抗がある」(非協力), 「楽しい訳ではないが、初回ほど嫌ではない」(その他), であった。

第6回目の記述は、「今のメンバーなら、がんばれそうだ」(協力), 「ラフティングの動

きで船酔いした」(自主性)、「楽しかった」(楽しかった)、「でも、一緒に踊るメンバーによって、自分が態度を変えてしまうのは悲しい」(非協力)であった。

第7回目の記述は、「前回と変わった点が、なかなか覚えられなくて困った」(難しさ)、「でも、楽しかったから良かった」(楽しかった)であった。

第8回目の記述は、「これからも、この楽しい気持ちを持ち続けてがんばりたい」(自主性)、「楽しかったし、まあよくできて良かったと思う」(楽しかった)、「大勢の人に見に来てもらえて、恥ずかしかったけれど、とても嬉しかった」(楽しかった)であった。

第9回目の記述は、「新しいことをひとつ覚えたら、別の何かを忘れてしまう」(難しさ)、「先生のアドバイスを全く取り入れた方がいいのか、それとも自分たちで作った要素もある方がいいのか悩みどころである」(難しさ)、「今日は、あまり積極的に取り組めなかった」(非協力)であった。

第10回目の記述は、「積極的にがんばれて楽しかった」(楽しさ)、「練習ほどうまくいかなかったけれど、一応納得のいく作品になって良かったと思う」(学んだ内容)であった。

第11回目の記述は、「下手であったけれど、みんなについて行こうともがくことができ、達成感があった」(協力)、「実際の修学旅行のラフティングと同じメンバーで踊れたので良かった」(協力)、「忘れかけていた修学旅行を、もう一度体験したかのような気分になれたこと」(テーマ)であった。

このことから、本事例研究では、A子の記述の変容が見られた次の4回を研究対象として取り上げた。第2回目は「非協力」のみであったが、第4回目は、「非協力」の項目があるとはいえ、「難しさ」、「自主性」、「学んだ内容」、「その他」へとカテゴリー数が増加した。第6回目は、「非協力」の項目が1個となり「協力」、「自主性」、「楽しさ」へと肯定的な意見がみられた。第8回目は、「非協力」の項目が0個となり「自主性」、「楽しさ」へと感想が肯定的になった。よって、事例研究の対象とする授業として、第2回目、第4回目、第6回目、第8回目を取り上げた。

第2項 創作ダンス教材によるA子の行動変容

ここでは、次の4点からA子の行動変容の状況を論述する。第1に、授業実践として行動変容の見られた第2回目、第4回目、第6回目、第8回目の指導案を示した。第2に、A子の行動変容を時系列に従ってナラティブに記述した。第3に、感想文の分類からみたA子の感想をカテゴリーで示した。手がかりは、学習者の感想、A子の授業の振り返り用紙の記述ならびに

授業のビデオ録画である。

(1) 第2回目 11月10日(水)6限の授業におけるA子

① 学習指導案

第2回目 11月10日(水)6限				
① 学習目標				
a. 新聞紙に意識を集中させて、思いっきり動くようにする。				
b. ひと流れの動きができる。				
c. 視線の大切さを学習する。				
② 準備物 ・新聞紙30枚(約4日分) ・VTRカメラ ・三脚 ・白板 ・筆記用具 ・リズム太鼓 ・授業振り返り用紙				
段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点	具体的評価規準
導入 10分	集合・挨拶をする			
	1. 新聞紙を教具として使うことを知る	本時の学習内容を理解する。授業の約束を聞く。	新聞紙を手にする読み始めるので、頃合いを見てすぐに準備運動に入る。	
展開 35分	2. 新聞紙を使った準備運動(授業者=研究者と一緒に動く)	新聞紙を両手に持って、背伸びをしたり、左右に身体をねじったり、床に置いてストレッチや前後のジャンプをする。 ・マントのようになびかせて走る。 ・おなかに巻き付けて走る ・背中で新聞紙をキャッチする等。	日常の座っている動きから立って扱う動き、走って移動する。放り上げる。丸めてボールにする。壁に張り付く等空間を意識して動かさせて、難度を徐々にあげていく。	行動観察 新聞紙の動きに夢中になって動いているか
	3. 課題を動く			
	① 授業者=研究者の新聞紙と同じように動く	授業者=研究者の新聞紙の動きに学習者は呼応して動く。	・学習者は動き方がわからない場合は、授業者=研究者が実際に新聞紙になって動いて見せる。 ・イメージを持たせて動かせる。	行動観察
	② ひと流れ	ひと流れで動いてみる。	・最後の動きは学習者に「それからどうなるの?」と考えさせる。	
展開 35分	4. 二人組で動く	① 一人は新聞紙役、他の一人は操る人になって動いてみる。 ② ひと流れの動きを、新聞紙を持たないで動いてみる。	・ペアがいなくて、一人立っている学習者がいないかどうか気配りをする。 ・動きに困ったら、同じ動きを何回も繰り返しても良いことにする。	自分の役割を意識して動いているか
	5. 発表	③ 授業者=研究者にだけみせる発表場面に変更する。	・発表を恥ずかしがった時は、授業者=研究者にだけ一斉に見せることにする。	行動観察 高さやリズムの変化をつけて動きが繋がっているか
	6. 全員でひと流れ+視線の学習	各自ひと流れの動きをしながらバスケットボールのセンターサークルに集まる。その後、視線の大切さを学習する。	ひと流れの動きで群を意識させて集まり、視線を揃えることによる動きの効果の説明する。 事前に新聞紙になりきって集まるので、集まった時、	行動観察 集まったとき、新

			しゃべったりじゃれたりしないことを注意しておく。	間紙になりきっているか
整理	7. 片付け 8. 振り返り	新聞紙を片付ける。 振り返り用紙への記入をする。 講評を聞く。	授業の感想は床の上ではなく、ステージの端で立つて書くように指示をする。 思っきり動けたことを褒める。	知識理解
5分	9. 講評 10. 次時の予告	次時の予告を聞く。	次時は、「走るー止まる」の課題学習をすることを知らせる。	

②第2回目におけるA子の状況

第2回目は、「しんぶんし」³⁶⁾を使った表現を行った。この時間は、創作ダンス単元の導入として、「『しんぶんし』と遊ぼう」という課題学習³⁷⁾である。この時間のねらいは、新聞紙を使って心も体も解きほぐして、「表現」に結びつけようとするものである。導入として新聞紙を使って、身体を曲げたり伸ばしたりして準備運動を行った。その後、新聞紙を空中に放り上げて身体の一部でキャッチしたり、「新聞紙」を身体に巻いて落とさないように走ったり、マントに見立てて、両腕を上げて風になびかせて走ったりした。A子は楽しそうなクラスメイトとは対照的に、黙々と無表情で行っていた。展開の段階では、授業者＝研究者が新聞紙を操り、学習者は自分自身が新聞紙になりきって動く活動をした。授業者＝研究者が新聞紙を広げて左右に揺らすと、新聞紙に変身した学習者は両手を左右に開いて揺れて、授業者＝研究者の持つ新聞紙の動きに呼応するのである。

このように、新聞紙を使って思う存分、心を解放した後、次は、学習者同士ペアになり、二人組で新聞紙の動きをすることにした。この時、A子は、ペアになる相手がいなくて、体育館の端に立ちつくしていた。授業者＝研究者が「一緒に動こう」と誘うと、「恥ずかしい」とつぶやいた。A子は、授業者＝研究者と一緒に新聞紙が、左右に揺れて床に落ちる動きをした。その後、授業者＝研究者は他の学習者の動きを見るためにA子から離れた。A子は、近くにいた学習者と一緒に動くわけでもなく、立ち尽くして周囲の動きを見ていた。

次に、本時の第2の目標であるストーリー性のある「ひと流れ」の動きを学習させるため、学習者に体育館の中央へ、それぞれ新聞紙の動きをしながら集まるよう指示をした。授業者＝研究者は、ダンステクニックのひとつである視線の大切さを教えるため、天井のある一点を見あげるよう指示した。そのとき、A子は、授業者＝研究者が何度促しても下を向いたままで、決して顔を上げなかった。

後日、顔を上げなかった理由を尋ねると、常に空間の「端」に「心理的居場所」³⁸⁾を求めていた幼少時の体験を語った。また、新しいことに馴染むのに、何事も時間がかかる自分の姿を自覚していると語った。

A子は感想に、前述したように、「意欲がない」（非協力）、「自分の都合ばかり考えて、回りに合わせることを知らない」（非協力）、「こういう奴がいると集団がまとまらなくて、良い作品ができないと思う」（非協力）、「けれども、いくら頑張っても意欲はわからない」（非協力）という、非協力のカテゴリーに分類される言葉だけを4個記述していた。A子と授業者＝研究者との会話や感想文から、A子は自分が集団に馴染めないと考えていると推察された。

(2) 第4回目 11月17日(水)6限の授業におけるA子

① 学習指導案

第4回目 11月17日(水)6限				
① 学習目標				
a. 空間の広がりや高さの変化を意識して動いてみよう(群の変化)。				
b. お互いの作品を鑑賞しよう。				
② 準備物・VTRカメラ・三脚・白板・筆記用具・リズム太鼓・CDラジカセ・『学校体育実技指導ビデオ用楽曲表現運動・ダンスCD』〈中学校・高校編〉KMTU55002, 2003年。服部克久「9喜望峰への道」『音楽畑Best of Best60分世界一周』wpc7-10025, 1999年。・授業振り返り用紙・テーマを書く用紙・マジック8本。				
段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点	具体的評価規準
導入 10分	集合・挨拶をする 1. 前時の振り返り	本時の学習内容を理解する。 ・飛行機の練習 ・群の変化	自分が飛行機のどこの部分を担当しているのか、ということ意識して動く和良好的、書いたAさんの感想の紹介をする。	
	2. 準備運動をする	手を繋いで円になる。 8 8 4 4 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 のリズムで右回りに動きながらポーズやストレッチを行う。	学習者に、リズム太鼓をたたかせる。	行動観察 リズムに乗って動いているか
	3. 群(飛行機)の練習	自分が飛行機のどの部分を担当するのかを意識して、隣の人と走ったり回ったりするペースを揃えて動く。	飛行機のイラストを拡大して白板に貼り付けて、自分が飛行機のどの部分を担当しているのかという、イメージを持たせる。	行動観察 自分の役割を意識して動いているか

展開 35分	4. 集まる ーとび散る ーもっと小さく集まる ーもっともっと遠くへとんでいく	① クラス全員で行う。 とび散る順番を決めてそれぞれが好きな方向へとびちる。床に伏せたり、壁にくっついたりする。前回と少しずつ異なる高さやリズムの変化をつけて動く。 ② 6人組で行う。	授業者＝研究者がとび散り方や集まり方を、リズム、面、高さの変化をつけて師範する。面や高さの変化ができていない学習者は褒める。 いつも同じ動きをしている学習者には、授業者＝研究者がリズム、面、高さを変えて幾つか動いてみせる。	行動観察 リズム、面、高さの変化をつけて動いているか
	5. 6人組で作品を創る	「集まるーとび散る」の運動課題に、イメージを付けて動いてみる。 発表の要領を聞く。	動きやアイデアが行き詰まったグループには、同じ動きを繰り返して踊っても良いというアドバイスをしてまわる。 空間を広く使用しているか、「メリハリ」、高さの変化、リズム等を意識して、作品づくり等を行っているかを見て回る。テーマを全員に聞こえるように説明させる。正面の位置を紹介させる。踊り終わったら拍手を忘れないことも伝える。	行動観察 お互いの考えを尊重して、作品づくりに積極的に関わっているか
	6. 発表と鑑賞	2グループずつ発表する。	鑑賞者にわかるように大きく動く口伴奏をしながら動いても良いことを伝える。	行動観察 相手の良いところを見つけることが出来るか
整理 5分	7. 講評 8. 次時の連絡	講評を聞く。	初めての発表を褒める。 本時の作品は、次の時間に視聴することを伝える。	

② 第4回目におけるA子の状況

第4回目の目標は、課題学習「集まるーとび散る」という運動要素から「群の変化」を学び、グループで小作品をつくり発表することであった。この学習は、クラス全員が、体育館のそれぞれの場所から中央に集まって、四方八方へ飛び出し、また同じ場所へ高さを変えて集まるものである。遠くへ飛び散るという動きの「メリハリ」と、空間を意識した「群の変化」ができることを、学習目標とした。

導入の段階では、A子は、他の生徒と同じように動いていた。その後、展開の段階では、リズム太鼓の合図でとび散り、近くにいた学習者同士でグループを作り、「集まるーとび散る」のイメージからテーマを決めて、小作品を創った。A子は、とび散るところまではできたが、小作品を創るグループに入れずにいた。B子が手招きをしたので、A子は走って行きB子のグ

ループに加わった。

B子のグループでは、B子がリーダーシップを取り、「こんにゃくの交通事故」をテーマとした小作品を創った。「こんにゃくの交通事故」は、全員が円心に向かい左右の足を絡ませて、こんにゃくのねじれを表現した動きからスタートした。その後、広がったり集まったりした後、全員が両手を上に絡ませて集合し、背面から円の外に向かって走り、交通事故の衝撃で「こんにゃく」がとび散った様子を表現した。

A子は感想に、前述したように、「自分がみんなについて行こうと必死だったのがわかった」(難しさ)、「もっと、積極的に取り組まなければならないことはわかっているが、感情を断ち切れない」(難しさ)と2個記述していた。「もう少し、きびきびと動かないとみんなの足を引っ張るばかりになると思った」(自主性)と1個記述していた。「吐き気がする」(非協力)、「踊ることに何も意味を見いだせない」(非協力)、「いつそのこと消えてしまいたい」(非協力)、「泣いてばかりで、あの場に不必要なことばかりしている」(非協力)、「自分が価値がない者に見える」(非協力)と5個記述していた。「『こんにゃく交通事故』自分が醜いことが良くわかった」(学んだ内容)と1個記述していた。「飛行機の修正版を見て、それなりに良かったと思った」(その他)と1個記述していた。A子の感想は、「非協力」な記述があるとはいえ、カテゴリーの数から見ると「難しさ」、「自主性」、「学んだ内容」、「その他」とが増加したといえる。

第4回目はB子に招かれて走っていったA子の行動によって、B子へと繋がりが生じた授業場面があった。これらのことから、A子の行動はわずかながら踊る仲間や作品に繋がりを持とうとしていることが、示唆された。

(3) 第6回目 11月30日(火)1限の授業におけるA子

① 学習指導案

第6回目 11月30日(火)1限 修学旅行のひとつまデッサンをする				
① 学習目標 修学旅行で一番印象に残った場面をグループで相談して、動いてみる。				
② 準備物・VTRカメラ・三脚・白板・リズム太鼓・CDラジカセ・『学校体育実技指導ビデオ 用曲 表現運動・ダンスCD』〈中学校・高校編〉KMTU55002, 2003年。服部克久「9喜望峰への道」『音楽畑Bestof Best60分世界一周』wpc7-10025, 1999年。・授業振り返り用紙・筆記用具				
段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点	具体的評価規準
導入 10分	集合・挨拶をする			
	1. 前時の振り返り 2. 本時の内容を知る	本時の学習内容を理解する ・飛行機の練習 ・今までの課題学習の総復習 ・修学旅行ひとつまデッサ		

	3. 準備運動をする	ンをする 寒いので体育館の中を授業者=研究者と学習者は、ラインに沿って走る。学習者は二重円になり、手を繋いで二人組の身体でジャンケンをする。	走って止まるの課題学習を念頭に入れて、授業者=研究者も一緒に走る。 笑い声が出始めた頃を見計らって、次の内容に移行する。	行動観察 リズムに乗って動いているか
展開	4. 課題学習の総復習	「ひと流れ」, 「メリハリ」, 「群」, 「動きの足し算」, 「視線」などの総復習をする。	授業者=研究者は学習者と一緒に、素早く動いて、ダンスモードに持って行く。	
	5. 群（飛行機）の練習	自分が飛行機のどの部分を担当するのかを意識して動く。みんなで走ったり回ったりするペースを揃えて動くことを知る。	飛行機のイラストを拡大して白板に貼り付けて、イメージを持たせる。 走るスピードや右に回る時に隣の人を意識して動いているかなどを、考えながら動かせる。学習者の活動の様子に注意を払う。	行動観察 自分の役割を意識して動いているか
	35分	6. クラスのテーマの決定	4組ラフティング, 5組白クマ, 6組ラフティング, 7組美しいホテルを表現することに決定した。	高さやリズムの変化, 空間の使い方のアドバイスをします。 行動観察 高さやリズムの変化, 空間の使い方ができているか
整理	7. 本時の振り返り 8. 講評 5分 9. 次時の連絡	振り返り用紙に記入する。 よく動けたことに気づく。	作品づくりが、うまくいっていることを褒める。 本時の作品は、次の時間に視聴することを伝える。	

② 第6回目におけるA子の状況

第6回目は、今までの創作ダンスの課題学習を復習した後、各クラスで北海道修学旅行の「思い出のひとこま」となる中心の動きを創り始める時間であった。7～8名でグループを作った。A子のグループは、修学旅行の一環としてラフティングを漕いだメンバーと、ダンスのメンバーとが一緒だったので、ラフティングの楽しかった思い出を創作することにし、「ラフティング」をテーマにした。A子のグループは、ラフティングのゴムボートが進む様子を、上下左右に漕ぐ動きで表現した。授業者=研究者が、作品に「メリハリ」をつけるために、河に転落した人の有無を尋ねたところ、A子は、全員河に落ちたのを思い出して笑顔をみせた。この時間のA子は、ボートから転落する動きをめぐって友達と積極的に関わっていた。

A子は感想に、前述したように、「今のメンバーなら、がんばれそうだ」（協力）と1個記

述していた。「ラフティングの動きで船酔いした」(自主性)と1個記述していた。「楽しかった」(楽しかった)と1個記述していた。「でも、一緒に踊るメンバーによって、自分が態度を変えてしまうのは悲しい」(非協力)と1個記述していた。カテゴリーは数からみると、「非協力」が前回の5個から1個に減少し、「協力」、「自主性」、「楽しかった」という肯定的なカテゴリーの個数が増えた。A子以外の学習者も修学旅行の動きづくりには、多くのアイデアを出してきて、次時の作品づくりの動機付けに繋がっていた。

(4) 第8回目 12月15日(水) 6限の授業におけるA子

① 学習指導案

第8回目 12月15日(水) 6限 中間発表会				
段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点	具体的評価 規準
① 学習目標 a. 自分たちの作品の表したい内容をメリハリを付けて、踊ることができる。 b. 鑑賞の視点を理解して、相互評価への準備ができる。 ② 準備物・ビデオカメラ・三脚・白板・CDラジカセ4台・延長コード・発表用ポスター・伴奏音：服部克久「9喜望峰への道」『音楽畑 Best of Best60分世界一周』wpc7-10025, 1999年。『表現運動・ダンスCD2(中学校・高等学校編)』, 共同テレビジョン, KMTU-55002, 2003年。・授業振り返り用紙・筆記用具。				
導入 10分	集合・挨拶をする		来客の紹介と隣のクラス(E組)が参観に来る時間について知らせる。 学習者にリズム太鼓をたたかせる。	行動観察 リズムに乗って踊っているか
	1. 本時の目標 2. 準備運動	中間発表の目標と時程を理解する。 手を繋いで円になり、 8 8 4 4 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 のリズムで右回りに動きながらポーズやストレッチを行う。		
展開 20分	3. 踊り込み ①全体 ②グループごと	飛行機の練習を3回行う。 グループごとに練習をする。	1回目は場当たり、2回目は実際に動く、3回目は伴奏音付きで行う。 学習者の活動状況を見て回る	行動観察
	4. 発表に関する注意	発表態度と待機位置の確認をする。連作のため繋がって一つの作品なので始まりの位置に待機しておく。	(2) 発表態度の約束 ① 失敗しても笑わない ② 身体全体を使ってオーバーアクションで動く。 ③ 顔をあげて踊る。	
10分	5. 発表会	全員で飛行機→ホテル→白クマ→ラフティング→夜景の順に発表する。	音出しがうまくいくように、CDラジカセを3台並べておいて、見学者に手伝わせる。	行動観察 作品の意図を読み取っているか

整理 10分	6. 講評 7. 次時の連絡	来客から講評を聞く。 。振り返り用紙へ記入する。 ビデオ視聴の日時を知る。	労いと次の課題を伝える。 ビデオ視聴は12月17日(金)に行うことを伝える。	
-----------	-----------------------	---	---	--

② 第8回目におけるA子の様子

第8回目の中間発表会は、大学教員、校長、E組（隣のクラス）でダンスを履修した女子生徒32名が、鑑賞者として参加した。授業の目標は、鑑賞者に創作の意図が伝わるような作品づくりをめざすことであった。A子のグループ以外の作品は、「美しいホテル」、「白クマ」、「夜景」であり、それぞれ約80秒の表現をした。A子のグループは体育館の横幅23メートルを北海道の空知川に見立てて、ジグザグにかつダイナミックに進む「ラフティング」の様子を118秒表現した。A子は、グループの他のメンバーよりも大きな動きで、ボートを漕ぐ表現をした。

A子は感想に、前述したように、「これからも、この楽しい気持ちを持ち続けてがんばりたい」（自主性）を1個記述していた。「楽しかったし、まあよくできて良かったと思う」（楽しかった）、「大勢の人に見に来てもらえて、恥ずかしかったけれど、とても嬉しかった」（楽しかった）を2個記述していた。この回では、非協力のカテゴリーが0個となった。「自主性」、「楽しかった」という肯定的なカテゴリーに属する記述が見られた。

A子はこの後、持久走や部活動においても積極的に振る舞うようになった。創作ダンスの授業が、A子の自己効力感を高めて行動変容の契機をもたらした、と推測される。次に、こうした行動変容を促した内的変容について述べる。

第3項 創作ダンス教材による学習の効果—A子の内的変容—

第2回目の授業では、A子は、2人組にならず一人でぼつんと立っていた。授業者＝研究者が視線の大切さを学習させるために、全員で中心に集まって視線を天井に向けるように指示をした時も、A子は従わず下を向き続けていた。この時A子は、自分の行動は、かつて自分が中学時代味わった、非協力的なメンバーと同じ態度であることを思い出したと考えられる。この日のA子の感想には、「幾らがんばっても動けない、自分のように自己中心的な生徒がいては、先生は指導しにくいだろう」と書かれており、教師のまなざしから自分の姿を捉えていたと考えられる。つまり、A子は、教師の目線から自分を見て、自分を否定的に捉えていたと考えられる。

行動変容が見られた第4回目の授業では、B子の声かけが、A子のこれまでの否定的な自己理解を変容させるきっかけとなった。またグループ別の発表のビデオ録画を視聴した際に、A子は自分の姿を客観視することになった。A子は、「自分が醜いことがよくわかった。吐き気がする。自分が価値のない者に見える」という感想を記していた。これは、自分の姿を自分で見たことを示している。つまり、第4回目のA子は、教師の目線から自分へと視点をずらし、自分で自分に向き合ったといえるのではなかろうか。

第6回目の授業では、グループのメンバーと感動を共有した思い出がA子の心を開いたといえる。A子はラフティングの動きをしていたのではなく、まさに本気で一生懸命にボートを漕いでいたのである。このように楽しかった経験をグループのメンバーと一緒に身体で表現できたことで、教師の目線も自分を見る自分の目線も気にすることなく夢中になれる自分を発見できたといえよう。

第8回目の授業では、A子は、「楽しかったし、まあよくできて良かったと思う。大勢の人に見に来てもらえて恥ずかしかったけれど、とても嬉しかった。これからもこの楽しい気持ちを持ち続けて、頑張りたい」と感想を記述していた。A子は、創作ダンスで楽しい気持ちを持つことができる自分を発見したのである。A子は、グループのメンバーと作品をまとめ、その作品を構成する踊り手の一人として舞台に立っている自分、観客のまなざしと拍手を受け、素直に「嬉しかった」といえる自分を発見し、そこに喜びを感じたといえる。つまり、観客を前にした第8回目の授業（中間発表会）では、A子は自分の中の複数の自分を発見したといえよう。以上述べたように、教師目線から自分の目線へと視点を移動したこと、自分の中に複数の視点を持ったことが行動変容に繋がったと考えられる。

第4節 成果と今後の課題

第1項 「教材づくり」を成立させるために必要とされること

—創作ダンスからの示唆—

本実践研究の結果から、「教材づくり」を成立させるために必要とされることとして、授業者＝研究者、学習者、授業者＝研究者と学習者の双方という3つの立場から示唆された内容を論述する。

- (1) 授業者＝研究者に必要とされること

① 学習者と教材の特性について共通認識を図ること

創作ダンスは、現代的なリズムのダンスともフォークダンスとも異なり、「表したいテーマにふさわしいイメージをとらえ」³⁹⁾身体活動を伴って表現するダンスである。しかし、このことは十分に知られていない。学習者の既習事項やダンスの知識をよく調べて、学習者と授業者＝研究者との間で創作ダンスについての共通認識を持つことの必要性が示唆された。

② マイナスイメージを持っている個を大切にしている指導を行うこと

本実践研究で取り上げたA子の行動は、授業実践で日常的に起こっているありふれたことからであろう⁴⁰⁾。その日常性にこだわり、A子の行動変容を求めた授業によって、学習者の中で自分や教師、鑑賞者という視点の移動が生じることが示唆された。高田のいう、弱い子の立場に立った「個を大切にしている」を「教材づくり」に取り入れた成果だといえよう。

③ 心を開かせる「教材」を用いること

新聞紙という「モノ」⁴¹⁾に「意識を集中させて恥ずかしい気持ちをもつ隙を作ら」⁴²⁾ない実践は、創作ダンスの導入として多く用いられている。本実践研究でも「新聞紙」を用いて導入を行った。しかし、A子のように創作ダンスへのレディネスが整っていない学習者の場合、必ずしもうまくいくとは限らないことが示された。茅野ら(1995)⁴³⁾や秦(1995)⁴⁴⁾が指摘しているように創作ダンスの課題学習に入る前段階として、心と体を解きほぐすような幼児期の遊び体験の深みにまで遡ることが有効であるとされている。本実践研究では、それは、修学旅行での楽しい体験であった。この体験をもととして、幼児期の遊び体験が蘇ったと考えられる。こうした心を開かせる「教材」を探すことが大切である。

④ 鑑賞者という「他者の視点」を持たせること

作品の見せ合いやビデオの授業記録により、学習者は鑑賞者という「他者の視点」から自分の行動の省察を行い、自らの作品をよりよいものに高めようという意欲が生じた。一人の学習者の中に踊り手と鑑賞者という二つの視点をもたせることで、よりよい作品づくりに主体的に向かうことが示唆された。

⑤ 学習者の思いにまなざしを向けること

授業者＝研究者としての経験上、最近の学習者の傾向に変化が見られる。発表会を開催すると学習者は「見に来てほしい」、「目立ちたい」という欲求が強い⁴⁵⁾。学習者の思いを把握することの大切さを、高田は、「実践者にとってその日からすぐ必要になるものといえば、教える相手を理解するということであろう。相手を学ばないではよい実践など望むべくもないことになるからである」⁴⁶⁾と述べている。授業者＝研究者は、今を生きる学習者の思いを把握して、

学習者の感性に呼応する「教材」を探すが、「教材づくり」の尽きぬ課題だといえよう。

(2) 学習者に必要とされること

① 創作ダンスに対するイメージを素直に表出すること

「創作ダンス」といえば、ヒップホップのような現代的なリズムダンスの動きを創作したり、既成作品の動きをアレンジして踊ることだと考えられている。しかし、ダンスの学習内容には、現代的なリズムダンスとフォークダンス、自分の意思や感情を動きで表現する創作ダンスの3種類がある。本実践研究の対象者の学習内容は、創作ダンスであり、中学校まで殆ど学習経験が少ないダンスの種類を学習するのである。そこで、大切なことは、学習者と授業者＝研究者が「創作ダンス」のイメージや目的を共有することである。そのためには、学習者が創作ダンスに対するイメージや過去の学習経験について、良いことも悪いことも素直に表出することが双方向の「教材づくり」のために大切だといえる。

② 教材や課題への疑問を教師に伝えること

創作ダンスの初心者の学習者にとって、イメージから動きに結びつき易い過去の楽しかった経験を学習課題として選択すれば、学習者が主体的に活動することが示唆された。要するに、学習者の楽しかった生活経験の中から学習課題を選択するという、課題選択の必要性が示唆された。

(3) 授業者＝研究者と学習者の双方に必要とされること

本実践研究の第5回目に、創作ダンスの課題学習「走るー止まる」と「群の変化」とを併せて、作品の一部となる「飛行機」を全員で練習をした。クラス全員が一機の飛行機となり、各人が機体の一部をなす動きの表現をした。学習者と実践者＝研究者が飛行機のイメージを共有して表現を行わなければ、鑑賞者には飛行機として見えないことが共通の課題であることが示された。そこで、自分たちが飛行機を表現したビデオ録画から課題を発見して、更に修正を繰り返して最後は伴奏音に合わせて練習を行った。飛行機の練習をした学習者の感想には、「全員が気持ちを合わせて一体となり、飛行機になりきった」と記述していた。ビデオの撮影をしていた見学者（生徒）は、「時間を追うごとに飛行機の動きが揃ってきて感動した」と述べていた。

以上のことから、授業者＝研究者と学習者がイメージを共有して、鑑賞者という第三者にわかるように作品づくりを行うことが必要だということが示唆された。鑑賞者という第三者の視点を持つことが、授業者＝研究者と学習者の双方に必要とされることが示唆された。

第2項 成果と今後の課題

本実践研究で得られた成果は、次の通りである。第1に、過去の楽しい共通体験から「心を開く」教材を用意することで、主体性が高まることが示唆された。第2に、学習者に「他者の視点」を持たせることにより、複数の視点を持たせることができることが示唆された。第3に、授業者＝研究者は目の前にいる学習者の理解を根底にして、「教材」を共に作り上げる必要性があることが示唆された。

今後の課題としては、次の2点がある。第1に、今回の実践研究では、授業の中で発表会を行うことが、学習者の自己変容を促す契機になったと考えられる。今後は、発表会による自己変容の要因を実証的に明らかにする必要があるだろう。第2に、今回の研究対象の授業には、28名の学習者がいた。今回はA子の事例を取り上げたが、一人一人の学びが問題とされなければならない。そうした試みの蓄積が課題である。

付記：事例の公表に当たっては、本人と保護者の了解を得ている。感想文の記載においては生徒が特定されないように、内容が変わらない程度の修正を加えている。

注

- 1) 古賀万由香「異文化を踊る—インド舞踊のグローバリゼーションと日本での受容」三田哲學會『哲学』第128集，2012年，369-402頁。高野牧子「イギリスにおける親子ムーブメント教室」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』第1号，2006年，65-72頁，参照。
- 2) 島内敏子「1 ダンスとは何か」全国ダンス・表現運動授業研究会編『明日からトライ！ダンスの授業』大修館書店，2011年，135頁。
- 3) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』東山書房 2009年，86頁。
- 4) 文部科学省，高等学校学習指導要領，平成21年3月告示。
- 5) 村田芳子「巻頭エッセイ 必修化をチャンスに，今こそ面白いダンスの授業を！」『体育科教育』第60巻第2号，大修館書店，2012年，9頁。
- 6) 同上。
- 7) 芳野和代他「学校体育におけるダンス」『日本体育学会大会号』37A，1986年，268頁。
- 8) 齊藤千代子「創作ダンスにおける『楽しさ』についての研究—高等学校を対象として—」

- 『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第25号，1994年，115-128頁。
- 9) 朴京眞・村田芳子「日本と韓国のナショナルカリキュラムにおけるダンスの内容の変遷に関する研究—日本の学習指導要領と韓国の教育課程を対象として—」日本女子体育連盟『Research Journal of JAPEW』Vol.27，2011年，39-53頁。
- 10) 中村なおみ「中学校・高等学校 創作ダンスの基礎—はじめてダンスの授業に取り組む先生と生徒のために」日本女子体育連盟『女子体育』第41巻第7・8号，1999年，46-48頁。熊谷昌子・宮本乙女「中学校・高等学校 実践を通してつかんだあれこれ—いろいろな課題へつなぐ—」日本女子体育連盟『女子体育』第41巻第7・8号，1999年，49-51頁。高野章子・大庭千世子「中学校・高等学校 共同研究より 課題学習単元の実践と成果 群課題の実践」日本女子体育連盟『女子体育』第41巻第7・8号，1999年，52-54頁。島内敏子「中学校・高等学校 作品作りにつなぐ課題」日本女子体育連盟『女子体育』第41巻第7・8号，1999年，55-58頁。宮本乙女「はじめての創作ダンス～ダンスを『創る・踊る』技能を考える～」日本女子体育連盟『女子体育』第50巻，第7・8号，2008年，70-73頁。中村恭子・君和田雅子「はじめての創作ダンス～高校男子8時間の単元～」日本女子体育連盟『女子体育』第50巻第7・8号，2008年，74-77頁。村田芳子「ダンスの世界にスイッチ・オン～リズムに酔い，表現を楽しむ」日本女子体育連盟『女子体育』第50巻第7・8号，2008年，78-81頁。
- 11) 茅野理子・沼規子「高等学校における創作ダンスの指導」『宇都宮大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』18号，1995年，152-161頁。
- 12) 秦恵美子「創作ダンスの学習指導：作品づくりへの試み」金沢大学教育学部附属高等学校『高校教育研究』47号，1995年，71-85頁。
- 13) 山崎朱音・村田芳子「ダンス授業における指導言語と発言に至る思考の特徴に関する研究—学習者・逐語記録・指導者の側面から—」日本スポーツ教育学会『スポーツ教育学研究』第30巻第2号，2011年，15-17頁。
- 14) 北田明子「A.授業研究〔1〕創作ダンスの指導」『名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要』第22集，1977年，9頁。
- 15) 北田明子「創作ダンスの指導（2）—授業計画の点検—」『名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要』第28集，1983年，106頁。
- 16) 吉田友子「恒例の創作ダンス発表会」『大阪教育大学附属高等学校池田校舎研究紀要』

9巻, 1976年, 33-41頁。

- 17) 長尾芳枝「創作ダンスの指導：昭和62年度・63年度の実践とその反省(保健体育科)(教科研究)」『名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要』第34集, 1989年, 72-76頁。
- 18) 仙波由紀「高等学校のダンス 校内創作ダンス発表会に至るまでの実践例」日本女子体育連盟『女子体育』第45巻第1号, 2003年, 37-43頁。
- 19) 奥澤雅恵「感じあう心とからだのハーモニー」日本女子体育連盟『女子体育』第45巻第3号, 2003年, 37-43頁。
- 20) 片寄昌子「創作ダンスへのチャレンジ～教師と生徒が共に歩んだ9時間+α～」日本女子体育連盟『女子体育』第47巻第6号, 2005年, 40-43頁。
- 21) 由利直子・世羅晶子「中・高合同の創作ダンス作品づくりを通して：第22回全国創作舞踊研究発表会参加の取り組み報告」『広島大学附属中・高等学校研究紀要』第49号, 2003年, 63-69頁。
- 22) 大津展子「ザ・デフォルメマスター！！」日本女子体育連盟『女子体育』第53巻第8・9号, 2011年, 64-69頁。
- 23) 全国ダンス・表現運動授業研究会とは、次のような研究会である。「本研究会は『全国ダンス・表現運動授業研究会』という名称になってからまだ5年目ですが、その前身は25年間ダンス学習の実践研究を続けてきた『(社)日本女子体育連盟 授業研究グループ』です。またその前身は『(社)日本女子体育連盟 提案グループ』として、ダンスの「問題解決学習」を検討し提案してきた研究会です。『提案グループ』が立ち上がる前には、竹之下久三先生が松本千代栄先生(本研究会顧問)らと、清里研究会としてダンスの授業研究の礎を築いてくださっていたのです。こうして、昭和30年から現場での実践を大切に研究を続けてきた」と、記述されている。
(<http://dancejugyoukenkyukai.jimdo.com> から転載) (2014年10月6日取得。)
- 24) 村田芳子「巻頭エッセイ 必修化をチャンスに、今こそ面白いダンスの授業を！」, 9頁。
- 25) 中村恭子「3 ダンス学習の内容と方法」全国ダンス・表現運動授業研究会編『明日からトライ!ダンスの授業』大修館書店, 2011年, 141頁。
- 26) 全国ダンス・表現運動授業研究会編『明日からトライ!ダンスの授業』大修館書店, 2011年。

- 27) 村田芳子「座談会 今, 学校体育は...—変わるもの変わらないもの—」日本女子体育連盟『女子体育』第 50 巻第 1 号, 2008 年, 17 頁。
- 28) 同上, 17 頁。
- 29) 熊谷佳代「ダンス創作過程に関する事例研究」舞踊学会『舞踊學』No.26, 2003 年, 41 頁。
- 30) 諏訪正樹「身体的メタ認知: 身体知獲得の認知的的方法論」古川康一編『知の科学 スキルサイエンス入門—身体知の解明へのアプローチ—』オーム社, 2009 年, 157-185 頁。
- 31) 高橋健夫「18 ナラティブ分析の事例—できない子どもの学習行動の分析から—」高橋健夫編『体育授業を観察評価する 授業改善のためのオーセンティック・アセスメント』明和出版, 2011 年, 78-81 頁。
- 32) 西洋子「身体によるインタラクティブなコミュニケーション～身体表現の“現場での実践”と“研究”の統合を目指して～」(神戸大学学位論文), 2003 年 3 月 31 日。
- 33) 岡野昇・谷理恵・伊藤茂子・佐藤学「〈体育の学びを具体化する実践〉体育における『学び』の三位一体論」『体育科教育』第 59 巻第 6 号, 大修館書店, 2011 年, 32-36 頁。
- 34) 12 月 1 日の授業は相互評価を実施したため, 当日の授業の振り返りは記述していない。よって, 今回は調査対象としない。
- 35) ダンスキーワードの一つとして「メリハリ」と記述した(山崎朱音・村田芳子, 前掲論文, 15-17 頁)。
- 36) 本実践研究における創作ダンスの課題学習は「しんぶんし」と表記した。教具として新聞紙を使用する場合は「新聞紙」と表記した。
- 37) 全国ダンス・表現運動授業研究会編『明日からトライ! ダンスの授業』大修館書店, 2011 年, 10-13 頁。
- 38) 米元麻世・岡本祐子「青年期における心理的居場所に関する研究—心理社会的発達の見点から—」『広島大学心理学研究』第 10 号, 2010 年, 参照。
- 39) 文部科学省, 高等学校学習指導要領, 平成 21 年 3 月。
- 40) 根上優「大学体育授業の意義と効果」橋本公雄他編『未来を拓く大学体育—授業研究の理論と方法』福村出版, 2012 年, 14 頁。
- 41) ダンスキーワードの一つとして「モノ」と記述した(山崎朱音・村田芳子, 前掲論文, 15-

17頁)。

- 42) 全国ダンス・表現運動授業研究会編，前掲書，10頁。
- 43) 茅野理子・沼規子，前掲論文，152-161頁。
- 44) 秦恵美子，前掲論文，71-85頁。
- 45) 高橋美知子「高校生における自己愛傾向と学校生活満足感の関連についてー承認欲求からの影響についての検討ー」日本カウンセリング学会『カウンセリング研究』39巻1号，2006年，28-39頁。
- 46) 高田典衛『体育授業研究シリーズ5 よい体育授業と教師』大修館書店，1985年，224頁。

結 論

第1節 本研究から得られた新たな知見

本研究の目的は、生涯学習との関連から高等学校卒業後も「健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力」を持った学習者を育成するために、「教材づくり」の基礎的知見を得ることであった。研究1では、「教材づくり」の視点とは何かを高田典衛の「高田4原則」をもとに検討した。その結果、「高田4原則」から「教材づくり」の3つの視点として「個を大切にする」「省察をする」「同僚による学び合いをする」を導出した。

研究2では、保健におけるエイズ教材を用いて、上記の3つの視点を含んだ「教材づくり」の実践研究を行った。その結果、健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力の育成を図る学習者の「教材づくり」の視点として、次の3点が示唆された。第1に、「病者」という他者を自己の立場に置き換えて考えることにより、社会という横軸の広がりの中から健康観を考える「教材づくり」の必要性が明らかになった。第2に、「病者」という視点から健康問題を考えることにより、今まで気づかなかった社会との関わりにおいて自己の健康が支えられているという認識の広がりをもたらし、これを促進するという示唆を得た。第3に、自己の命は過去から未来へと繋がり合うものだという縦の時間軸で考えさせる「教材づくり」の必要性が示唆された。

以上から、自己の視点を、「病者」という他者や、繋がり合う生命という過去から未来へと視点移動をさせることにより、自己の問題として考えさせる「教材づくり」の必要性が示唆された。

研究3では、体育における創作ダンス教材を用いて、上記の3つの視点を含んだ「教材づくり」の実践研究を行った。その結果、健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力の育成を図る学習者の「教材づくり」の視点として、次の3点が示唆された。第1に、過去の楽しい共通体験から「心を開く」教材を用意することで、主体性が高まることが示唆された。第2に、学習者に「他者の視点」を持たせることにより、自分、他者、自分の中のもう一人の自分など、複数の視点を持たせることができることが示唆された。第3に、授業者＝研究者は目の前にいる学習者の理解、特にマイナスイメージや否定的な思いを根底にして、「教材」を作り上げる必要があることが示唆された。

以上から、「教材づくり」の鍵は、教師が縦軸や横軸へと視点を動かすことにより、学習者の視点を複数にすることによって行動変容を促すことが肝要であることが示唆されたといえる。

研究2と研究3の実践研究の方向性を、授業過程研究とありふれたことがらという2つの

立場から考察をする。第1に、秋田喜代美は、学習過程研究を取り上げる理由を、次のように述べている。秋田は、「教師個人の成果主義と競争原理による教員評価の傾向が強められている」¹⁾現状において、「校内における授業や教材研究という、学校における自律的な専門職開発の制度によって、教員の資質を継続的に高め保持してきた日本の教師の学習システムはさらに衰退してゆくだろう」²⁾と憂慮しているのである。ここから、「教育学がこれまで志向してきた、ある思想家や研究者の学術理論や制度政策を読み解くグランドセオリーの構築に対して、いまこの教育実践の内側に働く教師が持つ実践の理論からのグランデッドなセオリー構築を教育の現場に関わりながら志向する視座」³⁾の大切さを提言している。つまり、「マイクロな教育実践研究、ローカルな事例に基づく新たな教育学構築の方向性」⁴⁾を提唱しているのである。

第2に、研究2のエイズの授業実践と研究3の創作ダンスの授業実践は、特別な授業ではなく、ありふれたことがらを授業研究の対象にしている⁵⁾。それは、生徒との関わりの中で見いだされた課題の解決の糸口を、生徒と教師の省察や同僚の学び合いの中から探すことを示している。

以上から、本実践研究の方向性は、秋田や根上の授業研究の文脈と同一であるといえよう。秋田は教師の学びを次のように述べている。「知識社会において教師は教える者として養成され教育される存在から、教えることを学び、子どもに教材を教えることを通して学ぶ学び手としての存在へと転換してきている。学校が核となる原理や概念をどの生徒も深く理解できる効果的な授業を教師が協働して持続的に作り出す場になり、教師が同僚とともに学ぶことが求められてきている」⁶⁾のである。つまり、教師が、生徒とともに学ぶ学び手として、生徒や同僚から学ぶことが、教員の資質を継続的に高めて保持していく契機となると述べられているのである。

本実践研究において取り上げた「教材づくり」では、自己へ理解を深めるために「病者」や「鑑賞者」という他者の視点を組み込んで「教材づくり」を行った。このことにより、自らが主体として生きる行動変容のための「教材づくり」についての基礎的知見を得ることができた。

本研究により新たに得られた知見は、次の通りである。第1に、「高田4原則」から導き出された「個を大切にする」、「省察」、「同僚の学び合い」の3点に加えて、高等学校保健体育科においては、「他者の視点を持たせる」とことと「心を開く」という2つの視点が必要であるということである。第2に、「教材づくり」において重要なことは、教師自身が「教材づくり」を行

う際に空間軸と時間軸において複数の視点を持つこと、それにより、学習者に空間軸と時間軸において複数の視点をもたせる必要性があることである。

第2節 今後の課題

今後の課題として次の3点があげられる。第1に、今回の「教材づくり」の研究は、高等学校の女子に限定したが、女子だけに効果的なのか、男子にも効果的なのかは、検証できなかった。今後は、男女に調査対象を広げ、男女ともに効果的な「教材づくり」を行いたい。第2に、「教材」の選択幅を広げることである。保健の「教材」はエイズばかりではない。体育の「教材」も創作ダンスばかりではない。例えば、保健では、生活習慣病、ストレス対応、労働と健康などがあげられる。体育では、体づくり運動、陸上競技、球技などがあげられる。これらを、生涯にわたって継続するという視点で保健体育科の「教材」として検討することが考えられる。第3に、今後、アクション・リサーチを行う多くの授業者＝研究者とその成果を共有して、小・中・高等学校の発達段階に即した、生涯、健康で豊かなスポーツライフが継続できる実践力につながる学習者の「教材づくり」を行っていくことである。

注

- 1) 秋田喜代美「教師教育から教師の学習過程研究への転回－マイクロ教育実践研究への変貌」
矢野智司他編『変貌する教育学』世織書房，2009年，45頁。
- 2) 同上。
- 3) 同上書，48頁。
- 4) 同上。
- 5) 根上優「大学体育授業の意義と効果」橋本公雄他編『未来を拓く大学体育－授業研究の理論と方法』福村出版，2012年，14頁。
- 6) 秋田喜代美，前掲書，46頁。

参考・引用文献一覧

- アーサー・クライマン/ 江口重幸他訳『病いの語り－慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房，1998年。
- 秋田喜代美「教師教育から教師の学習過程研究への転回－マイクロ教育実践研究への変貌」矢野智司他編『変貌する教育学』世織書房，2009年，45-75頁。
- 有田和正『教師修行双書3「学び」を変える教材づくりへの挑戦』明治図書，2007年。
- 馬場四郎編著『授業の探求』東洋館出版社，1973年。
- 茅野理子・沼規子「高等学校における創作ダンスの指導」『宇都宮大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』18，1995年，152-161頁。
- 遠藤保子「エイズを身近に感じて学ぶために（1年保健）」『体育科教育 別冊⑮』第45巻第8号，大修館書店，1997年，117-120頁。
- 江刺幸政『体育教育における教材構成の理論的基礎』創文企画，1999年。
- 福田正治「感情の階層性と脳の進化－社会的感情の進化的位置づけ－」日本感情心理学会『感情心理学研究』第16巻第1号，2008年，26-28頁。
- 藤岡彰「HIV感染，AIDSの危機的状況とそれに対する教育格差と性教育の問題」昭和女子大学『学苑・総合教育センター特集』811号，2008年，63-70頁。
- 藤岡信勝『教材づくりの発想』日本書籍，1991年。
- 藤田和也「アメリカ合衆国保健教育事情1 エイズ教育は保健教育の最重要課題」『体育科教育』第40巻第6号，大修館書店，1992年，77-79頁。
- 浜上洋平「体育教師志望学生の教材内容についての知識が相互作用行動に及ぼす影響－3名の教育実習生を対象とした事例的検討－」『東亜大学紀要』第16号，2012年，13-26頁。
- 秦恵美子「創作ダンスの学習指導：作品づくりへの試み」『高校教育研究』47号，金沢大学教育学部附属高等学校，1995年，71-85頁。
- 長谷川榮『教育方法学』協同出版，2009年。
- 広岡亮蔵『教育学著作集第1巻 学力論』明治図書，1968年。
- 細谷俊夫『教育方法 第4版』岩波書店，2006年。
- 市川博「子ども中心アプローチ」日本教育方法学会編『日本の授業研究－Lesson Study in Japan－授業研究の方法と形態<下巻>』学文社，2009年，50-59頁。
- 出原泰明「高田典衛の授業論」中村敏雄編『戦後体育実践論第2巻 独自性の探究』創文企画，1997年，223-239頁。

- 五十嵐哲也「高校生及び大学生の HIV 感染予防行動を規定する要因」日本学校保健学会『学校保健研究』第 44 巻 第 3 号, 2002 年, 207-214 頁。
- 池田恵理子『エイズと生きる時代』岩波書店, 1993 年。
- 今津孝次郎「アクション・リサーチ」安彦忠彦他編『新版 現代学校教育大事典』ぎょうせい, 2002 年, 20 頁。
- 今村嘉雄・宮畑虎彦編集代表『新修体育大辞典』不昧堂, 1976 年。
- 稲垣忠彦『教室からの開放』評論社, 2000 年。
- 稲垣忠彦「学びの扉を開く教材づくりを」『悠』20 巻 2 号, ぎょうせい, 2003 年, 12-15 頁。
- 伊藤博子『体育教員をめざす学生のために 高田典衛先生から学んで』北斗書房, 2010 年。
- 伊藤宏他「女子大学生の短距離疾走能力の特性を生かした短距離走の授業研究」日本スプリント学会『スプリント研究』8 巻, 1998 年, 1-8 頁。
- 伊藤美智子・林信恵「教師行動と生徒による授業評価から見たダンス授業の検討」日本体育学会『体育学研究』第 47 巻第 4 号, 2002 年, 333-346 頁。
- 伊藤俊夫編集代表・国立教育政策研究所社会教育実践センター『新訂 生涯学習概論』ぎょうせい, 2010 年。
- 岩田靖「体育における教材づくりの意義と課題」『体育科教育』第 38 巻第 1 号, 大修館書店, 1990 年, 58-61 頁。
- 岩田靖「高田典衛の教材づくり論」竹田清彦・高橋健夫・岡出美則編著『体育科教育学の探究—体育授業づくりの基礎理論』大修館書店, 1997 年, 236 頁, 236-238 頁。
- 岩田靖「体育における学力論の出現と発展」中村敏雄編『戦後体育実践論第 3 巻 スポーツ教育と実践』創文企画, 1998 年, 191-210 頁。
- 岩田靖「運動の楽しさと教材づくり」『体育科教育』第 46 巻第 8 号, 大修館書店, 1998 年, 16-18 頁。
- 岩田靖「体育になぜ教具が不可欠か」『体育科教育』第 51 巻第 10 号, 大修館書店, 2003 年, 10-13 頁。
- 岩田靖「改めて『教材づくり』の意義を問う」『体育科教育』第 56 巻第 4 号, 大修館書店, 2008 年, 56-59 頁。
- 岩田靖「授業のイメージーションに支えられた教材づくりの必要性」『体育科教育』第 58 巻第 4 号, 大修館書店, 2010 年, 60-63 頁。

- 岩田靖 『体育の教材を創る－運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて』大修館書店，
2012年。
- 菅野俊郎 「体育科の運動強度（VO₂max・HR・PPPE）からみた教材分析」岩手大学教育学部
附属教育工学センター『教育工学研究』第8号，1986年，67-85頁。
- 片寄昌子 「創作ダンスへのチャレンジ～教師と生徒が共に歩んだ9時間+α～」日本女子体育
連盟『女子体育』第47巻第6号，2005年，40-43頁。
- 加藤潤子 「エイズと“対話”する－“エイズ時代”を生きるふたりのすてきなコミュニケーション
のために－」『体育科教育 別冊⑩』第41巻第3号，大修館書店，1993年，135-139頁。
- 数見隆生 『教育保健学への構図－教育としての学校保健の進展のために－』大修館書店，
1994年。
- 数見隆生 「保健の教材づくりとそのあり方」森昭三・和唐正勝編著『新版 保健の授業づく
り入門』大修館書店，2002年，138-156頁。
- 北真佐美・岡沢祥訓他 「体育授業における生徒の身体的有能感と授業評価との関係」『奈良
教育大学教育研究所紀要』第31巻，1995年，15-23頁。
- 北田明子 「A.授業研究〔1〕創作ダンスの指導」『名古屋大学教育学部附属中高等学校紀
要』第22集，1977年，4-9頁。
- 北田明子 「創作ダンスの指導（2）－授業計画の点検－」『名古屋大学教育学部附属中高等学
校紀要』第28集，1983年，99-111頁。
- 木原雅子 『10代の性行動と日本社会－そしてWYSH教育の視点－』ミネルヴァ書房，2008
年。
- 貴志泉 「エイズ患者・感染者のサポート」『体育科教育 別冊⑩』第41巻第3号，大修館書
店，1993年，140-143頁。
- 小西加保留 石川雅子他 「HIV感染症による長期療養者とその受け入れ体制に関する研究」
日本エイズ学会『日本エイズ学会誌』9巻2号，2007年，167-172頁。
- 厚東芳樹 「教職経験年数という物理的条件が教師の反省的思考に及ぼす影響：小学校低学年
の男性教師について」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』2011年，第112号，59-71
頁。
- 古賀万由香 「異文化を踊る－インド舞踊のグローバリゼーションと日本での受容」三田哲學會
『哲学』第128集，2012年，369-402頁。
- 小林篤 「高田典衛の体育授業研究を見直す」日本体育学会 『体育学研究』第44巻第5号，

- 1999年, 411-420頁。
- 小林一久『体育の授業づくり論』明治図書, 1985年。
- 近藤真庸『体験的「エイズ教育」実践論』あさひ工芸, 1995年。
- 近藤真庸「エイズと共に生きる」保健教材研究会編『新版「授業書」方式による保健の授業』大修館書店, 1999年, 153-159頁。
- 近藤真庸『保健授業づくり実践論』大修館書店, 1999年。
- 熊谷佳代「ダンス創作過程に関する事例研究」舞踊学会『舞踊學』No.26, 2003年, 41頁。
- 熊谷昌子・宮本乙女「中学校・高等学校 実践を通してつかんだあれこれ—いろいろな課題へつなぐ—」日本女子体育連盟『女子体育』第41巻第7・8号, 1999年, 49-51頁。
- 櫛引宣子「患者・感染者への偏見・差別の実態から考える」『体育科教育 別冊⑩』第41巻第3号, 大修館書店, 1993年, 123-130頁。
- 鯨岡峻『エピソード記述入門 実践と質的研究のために』東京大学出版会, 2007年。
- 前川ちよの「性感染症の授業」『体育科教育 別冊⑮』第45巻第8号, 大修館書店, 1997年, 113-116頁。
- 松本富子「2 ダンス学習の目標」全国ダンス・表現運動授業研究会編『明日からトライ! ダンスの授業』大修館書店, 2011年, 136-139頁。
- 松岡重信他「現代体育教授学の構想と展望(Ⅲ)—体育業研究の趨勢と問題点と展望—」『広島大学教育学部紀要第二部』第42号, 1993年, 121-130頁。
- 松岡重信他「体育科教育学と社会システム論—体育授業の記述問題に焦点をあてて—」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部 文化教育開発関連領域』第54号, 2005年, 275-283頁。
- 松岡重信他「皮肉を込めて「研究」を語れば.....—体育科の授業評価研究の動向と展望—」『日本教科教育学会誌』第28巻第4号, 2006年, 71-79頁。
- 三村和則「教材づくり」山崎英則他編『教育用語事典』ミネルヴァ書房, 2009年, 141頁。
- 宮本乙女「はじめての創作ダンス～ダンスを『創る・踊る』技能を考える～」日本女子体育連盟『女子体育』第50巻第7・8号, 2008年, 70-73頁。
- 宮里和宏「『エイズ』教育と自主的・実践的態度の育成」『学校体育』第50巻 第7号, 日本体育社, 1997年, 70-74頁。
- 水間正雄「葉害としてのエイズ」『体育科教育 別冊⑩』第41巻第3号, 大修館書店, 1993年, 144-147頁。

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 体育編』東洋館出版社，2008年。
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 保健体育編』東山書房，2008年。
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』東山書房，2009年。
- 森昭三『これからの養護教諭－教育的視座からの提言－』大修館書店，1991年。
- 守屋慶子『知識から理解へ 新しい「学び」と授業のために』新曜社，2000年。
- 村上恭子「第3章 自分たちの生き方と結びついた『エイズ授業』－創作ダンスに発展した過程－」『健康教室』第45巻第9号，東山書房，1994年，120-131頁。
- 村田芳子「座談会 今，学校体育は...－変わるもの変わらないもの－」日本女子体育連盟『女子体育』第50巻第1号，2008年，6-17頁。
- 村田芳子「ダンスの世界にスイッチ・オン～リズムに酔い，表現を楽しむ」日本女子体育連盟『女子体育』第50巻第7・8号，2008年，78-81頁。
- 村田芳子「巻頭エッセイ 必修化をチャンスに，今こそ面白いダンスの授業を！」『体育科教育』第60巻第2号，大修館書店，2012年，9頁。
- 長尾芳枝「創作ダンスの指導：昭和62年度・63年度の実践とその反省(保健体育科)(教科研究)」『名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要』第34集，1989年，72-76頁。
- 中村恭子・君和田雅子「はじめての創作ダンス～高校男子8時間の単元～」日本女子体育連盟『女子体育』第50巻第7・8号，2008年，74-77頁。
- 中村恭子「3 ダンス学習の内容と方法」全国ダンス・表現運動授業研究会編『明日からトライ！ダンスの授業』大修館書店，2011年，140-143頁。
- 中村なおみ「中学校・高等学校 創作ダンスの基礎－はじめてダンスの授業に取り組む先生と生徒のために」日本女子体育連盟『女子体育』第41巻第7・8号，1999年，46-48頁。
- 中内敏雄『教材と教具の理論』有斐閣，1979年。
- 根上優「大学体育授業の意義と効果」橋本公雄他編『未来を拓く大学体育－授業研究の理論と方法』福村出版，2012年，14-44頁。
- 日本学校保健会『AIDS 正しい理解のために』第一法規，1992年。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版 第二巻』小学館，2006年。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版 第五巻』小学館，2006年。
- 西洋子「身体によるインタラクティブなコミュニケーション～身体表現の“現場での実践”と

- “研究”の統合を目指して～」（神戸大学学位論文），2003年3月31日。
- 二宮祐子「教育実践へのナラティブ・アプローチ—克蘭ディニンらの『ナラティブ探求』を手がかりとして—」『東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科学校教育学論集』第22号，2010年，37-52頁。
- 越智康詩「教育現場の不確実性と『省察』による実践の創造—教職のジレンマを乗り越えて—」臨床教育人間学会編『臨床教育人間学2 リフレクション』東信堂，2007年，51-72頁。
- 小田切孝子「課題学習としてのエイズへの取り組み」『体育科教育 別冊⑩』第41巻第3号，大修館書店，1993年，148-150頁。
- 岡野昇・谷理恵・伊藤茂子・佐藤学「〈体育の学びを具体化する実践〉体育における『学び』の三位一体論」『体育科教育』第59巻第6号，大修館書店，2011年，36-38頁。
- 岡沢祥訓・高橋健夫他「体育授業における生徒行動や生徒の授業評価に及ぼす要因の検討—中学校の体育授業のALT-PE分析を通して—」『奈良教育大学紀要人文・社会科学』第37巻第1号，1988年，49-59頁。
- 奥澤雅恵「感じあう心とからだのハーモニー」日本女子体育連盟『女子体育』第45巻第3号，2003年，37-43頁。
- 小野慶太郎『人間形成における 教材選択の視点』東洋館出版社，1982年。
- 大津展子「ザ・デフォルメマスター！！」日本女子体育連盟『女子体育』第53巻8・9号，2011年，64-69頁。
- 大関松三郎「巾とび」『大関松三郎詩集 山芋』百合出版，1951年，16-18頁。
- 朴京眞・村田芳子「日本と韓国のナショナルカリキュラムにおけるダンスの内容の変遷に関する研究—日本の学習指導要領と韓国の教育課程を対象として—」日本女子体育連盟『Research Journal of JAPEW』Vol.27，2011年，39-53頁。
- 斉藤千代子「創作ダンスにおける『楽しさ』についての研究—高等学校を対象として—」『静岡大学教学部研究報告（教科教育学篇）』第25号，1994年，115-128頁。
- 坂本勲「HIV感染者に対する偏見・差別の払拭をめざしたエイズ教育—ケース・スタディを用いて—」『学校体育』第52巻 第2号，日本体育社，1999年，65-67頁。
- 佐々木啓子「保健の授業からエイズを学ぶ」『体育科教育 別冊⑮』第45巻第8号，大修館書店，1997年，108-111頁。
- 仙波由紀「高等学校のダンス 校内創作ダンス発表会に至るまでの実践例」日本女子体育連

- 盟『女子体育』第45巻第1号, 2003年, 37-43頁。
- 柴田義松『授業の原理』国土社, 1976年。
- 島内敏子「1 ダンスとは何か」全国ダンス・表現運動授業研究会編『明日からトライ! ダンスの授業』大修館書店, 2011年, 134-135頁。
- 島内敏子「中学校・高等学校 作品作りにつなぐ課題」日本女子体育連盟『女子体育』第41巻第7・8号, 1999年, 55-58頁。
- 下田次雄「正課体育実技におけるグループ体操の実際と効果」『中部工業大学紀要B』13巻, 1977年, 65-69頁。
- 諏訪正樹「身体的メタ認知: 身体知獲得の認知的方法論」古川康一(編)『知の科学スキルサイエンス入門 身体知の解明へのアプローチ』オーム社, 2009年, 157-185頁。
- 鈴木正弘「『政治経済』における売買春の授業」『体育科教育 別冊⑩』第41巻第3号, 大修館書店, 1993年, 131-134頁。
- 立川昭二『病いと健康のあいだ』新潮社, 1991年。
- 高田典衛『子どものための体育科教育法—体育科の授業と教材—』大修館書店, 1967年。
- 高田典衛『体育授業入門』大修館書店, 1976年。
- 高田典衛『体育授業の改造』杏林書院, 1979年。
- 高田典衛『体育授業研究シリーズ1 よい体育授業の探求』大修館書店, 1982年。
- 高田典衛『体育授業研究シリーズ2 よい体育授業の構図』大修館書店, 1983年。
- 高田典衛『体育授業研究シリーズ3 よい体育授業の教材』大修館書店, 1985年。
- 高田典衛『体育授業研究シリーズ5 よい体育授業と教師』大修館書店, 1985年。
- 高橋美知子「高校生における自己愛傾向と学校生活満足感の関連について—承認欲求からの影響についての検討—」日本カウンセリング学会『カウンセリング研究』39巻1号, 2006年, 28-39頁。
- 高橋健夫他編著『新版 体育科教育学入門』大修館書店, 2010年。
- 高橋健夫編『体育授業を観察評価する 授業改善のためのオーセンティック・アセスメント』明和出版, 2011年, 78-81頁。
- 高野牧子「イギリスにおける親子ムーブメント教室」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』第1号, 2006年, 65-72頁。
- 高野章子・大庭千世子「中学校・高等学校 共同研究より 課題学習単元の実践と成果 群課題の実践」日本女子体育連盟『女子体育』第41巻第7・8号, 1999年, 52-54頁。

- 竹田清彦・高橋健夫・岡出美則編著『体育科教育学の探究—体育授業づくりの基礎理論』大修館書店，1997年。
- 武田裕行・松岡弘「エイズ教育の変遷に関する研究」『大阪教育大学紀要 第V部門』第46巻第1号，1997年，121-127頁。
- 友定保博「保健教育における〈エイズ〉の教育内容」（平成6-7年度科学研究費補助金総合研究（A）課題番号06301084 研究成果報告書『保健教育におけるエイズ予防教材の開発に関する研究』研究代表者：和唐正勝）1996年，9-12頁。
- 友定保博「わが国の保健科教育の歩み」森昭三・和唐正勝編著『新版 保健の授業づくり入門』大修館書店，2002年，19-31頁。
- 鶴見俊輔『シリーズ教育の挑戦 教育再定義への試み』岩波書店，1999年，107頁。
- 内山源『ヘルスプロモーション・学校保健—健康教育充実強化に向けて—』家政教育社，2009年。
- 内海和雄「体育科の学力研究」『一橋論叢』第090巻4号，日本評論社，1983年，529-549頁。
- 若林チヒロ，生島嗣「HIV感染症をめぐる社会福祉分野の課題—就労を中心に」日本エイズ学会『日本エイズ学会誌』7巻3号，2005年，189-192頁。
- 綿引芳夫「高校におけるAIDS教育の試案」日本学校保健学会『学校保健研究』第34巻第6号，1992年，254-259頁。
- 和唐正勝「エイズⅠ」『体育科教育』第36巻第11号，大修館書店，1988年a，19-21頁。
- 和唐正勝「エイズⅡ」『体育科教育』第36巻第12号，大修館書店，1988年b，21-24頁。
- 和唐正勝「8 エイズ」保健教材研究会編『続「授業書」方式による保健の授業』大修館書店，1991年，140-154頁。
- 和唐正勝「エイズのリスク認識の形成をめざす教材の開発」（平成15-16年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）課題番号15500471 研究成果報告書『エイズのリスク認識の形成をめざす教材の開発』研究代表者：和唐正勝）2005年，73-74頁。
- 山口満「教材とは」日本教材学会『日本教材学会設立20周年記念論文集「教材学」現状と展望』（上巻），協同出版，2008年，22-26頁。
- 山根一郎「恐怖の現象学的心理学」『椋山女学園大学人間関係学研究』5号，2007年，113-129頁。
- 山崎朱音・村田芳子「ダンス授業における指導言語と発言に至る思考の特徴に関する研究—学

習者・逐語記録・指導者の側面から」日本スポーツ教育学会『スポーツ教育学研究』第30巻第2号，2011年，11-25頁。

米元麻世・岡本祐子「青年期における心理的居場所に関する研究—心理社会的発達の見点から—」『広島大学心理学研究』第10号，2010年，229-243頁。

吉田昇他編『授業と教材研究 教育学(6)』有斐閣，1980年。

吉田友子「恒例の創作ダンス発表会」『大阪教育大学附属高等学校池田校舎研究紀要』9巻，1976年，33-41頁。

吉本均『授業の構想力』明治図書，1984年。

芳野和代他「学校体育におけるダンス」『日本体育学会大会号』37A，1986年，268頁。

由利直子・世羅晶子「中・高合同の創作ダンス作品づくりを通して：第22回全国創作舞踊研究発表会参加の取り組み報告」『広島大学附属中・高等学校研究紀要』第49号，2003年，63-69頁。

全国ダンス・表現運動授業研究会編『明日からトライ！ダンスの授業』大修館書店，2011年。

参考資料一覧

日本医師会感染症危機管理対策室：『日本医師会市民公開講座 知って防ごう性感染症 現状と対策』（DVD），NHK エデュケーショナル，2007年。

JEX CONDOMS のポスター（製作元 JEX 株式会社 2009年）。

日本経済新聞記事（2013年4月17日付朝刊）。

参考 web ページ一覧

Around You ～VOICES～ 今，ここに生きている私たちのメッセージ，3 私の一步（著：本庄真美子，朗読：林唯衣），著作：札幌市，企画：世界エイズデー札幌実行委員会，制作 AIR-G'FM 北海道，2010年。www.wad-sapporo.org/podcast.html（2011年2月8日取得）。

Around You ～VOICES～ 今，ここに生きている私たちのメッセージ，11 HIV ポジティブ1年生（著：リュウタ，朗読：油谷昭雄），著作：札幌市，企画：世界エイズデー札幌実行委員会，制作 AIR-G'FM 北海道，2010年。www.wad-sapporo.org/podcast.html（2011年2月8日取得）。

平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）地域における HIV 養成者等支援のための研究「HIV/エイズとともに生きる人々の仕事・くらし・社会」『「HIV 陽性者の生活と社会参加に関する調査」報告書』研究代表者：生島嗣，2009 年，19-20 頁。

www.chiiki-shien.jp/image/pdf/tomo_ni_ikiru.pdf（2011 年 2 月 21 日取得）。

若林チヒロ 生島嗣 小西加保留著「事例で学ぶ職場と HIV」。

www.chiiki-shien.jp/image/pdf/shokuba_to_hiv.pdf（2011 年 2 月 21 日取得）。

内閣府「平成 23 年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況 第 1 章 高齢化の状況」。 http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/24pdf_index.html（2013 年 10 月 21 日取得）。

厚生労働省「平成 22 年度 国民医療費の概況」。

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-iryohi/10/dl/data.pdf>（2013 年 10 月 21 日取得）。

厚生労働省「国民の健康寿命が延伸する社会」に向けた予防・健康管理に関する取組の推進 <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000019326.html>（2013 年 10 月 21 日取得）。

内閣府 平成 21 年度世論調査「体力・スポーツに関する世論調査」。

<http://www8.cao.go.jp/survey/h21/h21-tairyoku/index.html>（2013 年 10 月 24 日取得）。

内閣府「全国世論調査の現況 平成 23 年版」。

<http://www8.cao.go.jp/survey/genkyou/h23/h22-genkyou/index.html>（2013 年 10 月 24 日取得）。

厚生労働省「平成 23 年国民健康・栄養調査 結果の概要 第 2 部 身体活動・運動に関する状況」。

www.mhlw.go.jp/bunya/kenkyu/enjoy/dl/h23-houkoku-03.pdf（2013 年 10 月 28 日取得）。

厚生労働省「平成 23 年国民健康・栄養調査報告 第 3 部 生活習慣調査の結果」。

www.mhlw.go.jp/bunya/kenkyu/enjoy/dl/h-23-houkoku-06.pdf（2013 年 10 月 28 日取得）。

厚生労働省「平成 23 年度国民健康・栄養調査報告 第 4 部 年次別結果」。

www.mhlm.go.jp/bunya/kenkou/enjoy/dl/h23-houkoku-07.pdf（2013 年 10 月 28 日取得）。

日本ヘルスプロモーション学会「ホームページ」。

www.jshp.net/gaiyou/gaiyou-top.html（2014 年 10 月 2 日取得）。

厚生労働省科学研究エイズ対策事業研究班「正しいことを知ることから始めましょう エイズの今を知っていますか？」。

http://www.aidssti.com/m_007.htm (2014年10月3日取得)。

全国ダンス・表現運動授業研究会「本研究会の歩み」。

<http://dancejugyoukenkyukai.jimdo.com> (2014年10月6日取得)。

五島真理為「エイズは我々に何をもたらしたか」『エイズ対策入門』独立行政法人 国際協力機構青年海外協力隊事務局, 2010年, 12-26頁。 [http://s3-ap-northeast-](http://s3-ap-northeast-1.amazonaws.com/lindocs3/documents/659/files/0903fe227fcfcfa51c87351ac2ff10aa440cb.PDF?1324030824)

[1.amazonaws.com/lindoc-](http://s3-ap-northeast-1.amazonaws.com/lindocs3/documents/659/files/0903fe227fcfcfa51c87351ac2ff10aa440cb.PDF?1324030824)

[s3/documents/659/files/0903fe227fcfcfa51c87351ac2ff10aa440cb.PDF?1324030824](http://s3-ap-northeast-1.amazonaws.com/lindocs3/documents/659/files/0903fe227fcfcfa51c87351ac2ff10aa440cb.PDF?1324030824)

(2014年9月12日取得)。

内閣府 平成18年度世論調査「体カスポーツに関する世論調査」。

<http://www8.cao.go.jp/survey/h18/h18-tairyoku/index.html> (2014年9月21日取得)。

資 料

資料1 エイズの授業に関する調査資料と学習指導案及び振り返り用紙

1. 予備調査資料

エイズ予備調査					
1年()組()番:名前()					
あなたが、今までにエイズについて学習した内容と、高等学校で学習したいことについて書いてください。					
校種	学年	時期	誰に	何を	わからなかったこと
小学校	4				
	5				
	6				
中学校	1				
	2				
	3				
高等学校	学びたいこと				

2. 事前調査資料

<h3>エイズに関する事前・事後調査</h3> <p>あてはまる番号に○をしてください</p>	<p>2011年2月 日</p> <p>1年 組 番 名前()</p>
<p>1 自分は、性感染症には感染しないと思う</p> <p>① 強く思う ② 少し思う ③ あまり思わない ④ 思わない</p>	<p>7 エイズの感染を防ぐのに、コンドームは効果がある</p> <p>① 強く思う ② 少し思う ③ あまり思わない ④ 思わない</p>
<p>2 自分は、エイズには感染しないと思う</p> <p>① 強く思う ② 少し思う ③ あまり思わない ④ 思わない</p>	<p>8 一人の人と性交渉を持つことは、その性交渉を通じて間接的に他の多くの人と性的な関係を持つことになる可能性がある。</p> <p>① 強く思う ② 少し思う ③ あまり思わない ④ 思わない</p>
<p>3 エイズに感染している人と手を握っても大丈夫</p> <p>① 大丈夫 ② どちらともいえない ③ 大丈夫ではない</p>	<p>9 エイズ感染者は、年々増加している</p> <p>① はい ② どちらともいえない ③ いいえ</p>
<p>4 エイズに感染しても、完全に治すことができる</p> <p>① できる ② どちらともいえない ③ できない</p>	<p>10 エイズは、怖い病気だと思いますか。</p> <p>① とても怖い ② 少し怖い ③ あまり怖くない ④ 怖くない</p>
<p>5 現在、エイズの感染原因の多くは性交渉によるものである</p> <p>① はい ② どちらともいえない ③ いいえ</p>	<p>1. 本日の授業でよくわかったところ</p> <p>2. 本日の授業でよくわからなかったり、もっと教えて欲しいこと</p>
<p>6 エイズに感染しないための予防法を知っている</p> <p>① 知っている () ② 知らない</p>	

3. 学習指導案

第1時間目：2011年2月8日(火)10:50-11:40

- 本時の目標：① エイズという病気について理解する。
 ② エイズという「病者」について理解する。

準備物：① 近藤真庸「エイズと共に生きる」保健教材研究会編『新版「授業書」方式による保健の授業』大修館書店，1999年，153-159頁から転載した。【プリントNo. 1-No. 6】

② ライアン・ホワイト君の写真

ライアン・ホワイト他著，加藤耕一訳『エイズと闘った少年の記録』ポプラ社，1992年の表紙の写真転載。

③ ①から作成したフラッシュカード

HIV	CD4	ウイルスの弱点
熱	水	消毒剤
出口	入口	粘膜
出口	血液	精液
直接	肛門	ペニス
ワギナ	人間の体(白血球)	の中でしか生きられない
皮膚	からは入ってこない	

④ CD4に見立てた蓋付容器とウイルスに見立てた白と黒の基石を使用する。蓋はCD4に見立て、白と黒の基石はウイルスに見立てた。

⑤ 授業プリント【資料3-2】，【プリントNo. 1】から【プリントNo. 6】

第1時間目学習指導案

段階	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 10分	挨拶，出欠確認		
	1. 前時には感染症の一種であるSARSを学習したことを思い出す。	前時の振り返りと本日の授業の目的を話す。	
	2. エイズに関する予備調の結果を聞く。わからないことが多いのは性教育の学習が十分ではなかったのを知り，再度高校で学ぶことを知る。	エイズに関する事前調査として，小学校・中学校での学習内容，指導者，保健授業か保健指導かについては調査済みである。 学習者の小学校・中学校時代の事前アンケートの内容とその結果を学習者に公表して，疑問点を共有する。疑問点の背景には，わが国の性教育の動向があったことを知らせる。	
	3. 4時間分の学習内容の理解と毎時間授業の振り返りを行うことを知る。	事前調査や授業の振り返りを実施する目的は，次の授業改善に生かすことを知らせる。	
	4. エイズに関する事前調査を記入する。【資料3-2】	机間巡視をして生徒の様子を観察する。	関心・意欲
	5. 「ライアン・ホワイト君」からエイズという病気を考えさせる。	高校1年生の学習者と年齢に近い「ライアン・ホワイト君」の事例を用いて，人を通してエイズを考えさせる。	知識・理解

	<p>ドラマ仕立ての教材のため、学習者が母親役とライアン役になって、朗読を行う。</p> <p>朗読を聴くことを通して、登場人物の立場に立って、エイズを考える。朗読者は、役になりきって読む。</p> <p>【プリント No. 1】</p>	<p>CD4 とウイルスに見立てた教具を用意して、エイズという病気が具体的にイメージしやすいような授業展開にする。容器の蓋を CD4 に例え、容器の中には黒と白の基石を入れ、カビやウイルスがライアン君の体内にいることをイメージさせる。体内のカビやウイルスに壊されて CD4 の蓋が飛び出しやすい状態を、ライアンの体調が悪くなった状態と見立てさせる。</p> <p>朗読をする学習者は、配役になりきって気持ちをこめて読むように説明する。</p>	
展 開	<p>6. 感染経路について理解する。</p> <p>「HIV が混ざって出てくるもの」を2つ考える。</p> <p>【プリント No. 2】と【プリント No. 3】の朗読から、【プリント No. 4】をもとにフラッシュカードを黒板に貼り、エイズへの理解を深める。</p>	<p>免疫機能が、HIV に壊されない方法をまず自分で考える。その後、4人グループを作って話し合いを行い、発表をさせる。(社会的構成主義の考えを援用する)</p> <p>ライアン君のドラマ仕立ての教材から、エイズという病気への理解を促すために、フラッシュカードを用いて行う。</p> <p>エイズウイルスの出口・入口から、ウイルスの特徴や感染経路、人体の免疫について視覚的に理解させる。</p>	<p>免疫機能が、HIV に壊されない方法を考えて発表できる。(関心・意欲・態度)</p>
35分	<p>7. 「病者」との共生について考える。</p> <p>ライアンが学校に復帰した時、友人として一緒に何ができるかを考える。</p> <p>8. ライアンと何をして過すかを10個考える。</p> <p>【プリント No. 5】</p> <p>9. もしも、自分がライアンだったら、どんな言葉をかけて欲しいかを、想像してなるべく英語で答える。【プリント No. 6】</p>	<p>母親とライアン役を別の学習者に交代して、気持ちをこめて読ませる。「体の中にある HIV が、学校で友達の中に入るなんてありえないことだもの」という母親の発言が、「仮説」となる。この仮説を証明するために、感染の原理として「出口論・入口論」から考えさせる。エイズウイルスは、皮膚からは感染しないということを理解させる。</p> <p>ウイルスの弱点を理解させた後、日常生活では何ができるかを考えさせる。</p> <p>エイズの問題を「他人事」ではなく、いかに「自分のこと」として、考えさせるかが大切である。</p> <p>学校側の予想を裏切る展開の前で次時につなぐ。</p> <p>英語の表現が思いつかない学習者には、日本語で書いても良いことを知らせる。</p>	<p>感染経路について理解している。(知識・理解)</p> <p>ライアンとの共生について考えている。(思考・判断)</p>
整理 5分	<p>10. 本時の感想を記入する。</p> <p>【資料3-2】</p>	<p>本時のわからなかったところと、わかったところを記入させて、次時の授業展開に生かす。</p>	

第2時間目：2011年2月15日(火)10:50-11:40

本時の目標：「病者」との共生について考えることができる。

準備物：①フラッシュカード **HIV** **CD4** **ウイルスの弱点**
熱 **水** **消毒剤** **出口** **入口** **粘膜** **出口** **血液** **精液** **直接** **肛門** **ペニス** **ワギナ**
人間の体(白血球)の中でしか生きられない **皮膚からは入ってこない**

②『Get Away』『Welcome!』を表裏に書いたA3版のカード

③授業用プリント【プリントNo. 7】から【プリントNo. 9】

第2時間目学習指導案

段階	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 5分	1. 挨拶・出欠確認 2. 前時の疑問の説明を聞く。 【プリントNo. 7】 ①ライアン君の病気の原因は何ですか ②水泳をしても大丈夫ですか ③予防接種があるのですか ④エイズの感染原因は他に何かあるのですか ⑤CD4とは何ですか 3. 前時の最後の授業内容の確認をする。	【プリントNo. 7】学習者から出てきた質問は学習活動の項目に示した5点である。以下は生徒の疑問への回答である。 ① 血友病の治療に使われた血液製剤にエイズウイルスが混じっていた。 ② エイズウイルスの弱点をフラッシュカードで確認させる。 ③ 現在のところはない、ことを知らせる。 ④ フラッシュカードで確認させる。 ⑤ CD4の詳細いことは、3年生の選択生物で学習することを知らせる。 「学校へ行きたい」というライアンの願いに応えるために、友達としてプラカードに何を書いて迎えるか、という前時の復習から授業を展開する。	知識・理解
展	4. ライアンを迎えるための言葉を発表する。 【プリントNo. 6】 学習者は、自分が書いた内容を英語で発表する。全員歓迎の言葉や「一緒にハンバーガー食べよう」「お帰りライアン」などと書いている。	授業者=研究者は、机間巡視をしながら学習者が「英語」で答えた内容を読んだり、日本語に訳したりしながら、「なかなか良いね」、「そうですね」という短いコメントを挟みながら、クラス全員に発表をさせる。	病者との共生について考えて、発表ができる(思考・判断)

開	5. 学校当局の意外な展開を知る。配役を決めて続きを朗読する。 【プリントNo. 8】 配役は、ストーリーテラー、ライアン、クリス(ライアンに味方する女の子)、クラスメイト(全員)である。	『Get Away』というフラッシュカードを示して、学習者の意表つく。 ドラマ仕立ての朗読に、全員参加させる場面を作るにより、参画意識を持たせる。朗読を通して、共感や他者の立場にたつて、エイズの問題を考えさせる契機とする。	思考・判断
	8. 授業者=研究者から、「自分に出来る事」としてエイズ患者に面会に行った話を聴く。 学習者は自分の考えと、授業者=研究者が話した内容とを関連づけて理解する。	授業者=研究者が会いに行った患者は、ライアン君と同じ血友病患者であり、治療薬として使った血液製剤からエイズに罹った人であった。4回の面会で、患者さんから教わった内容を学習者に紹介する。 患者は、エイズウイルスで徐々に身体が弱ってきているにも関わらず、親族の支援を受けて最後まで命の炎を燃やすのだという、生への執着心を滾らせていた様子を話す。①「エイズ」と分かった時の気持ちの動揺、②仕事と日常生活との関り、③エイズという病気を理解して貰う行動として、名古屋フォーラムへ行く前日に、息をひきとったことなどを話す。患者を支えている親族や、医師の気持ちを話す。	
40分	9. 本日の授業で分かったところ、良くわからなかったところの感想を記入する。 【プリントNo. 9】	本日の疑問点を次時の課題に繋ぐために、本時の振り返りを記述して回収をする。	思考・判断
整理 5分			

本日の授業の振り返り ()組 ()番 名前 ()			
よくわかったところ	イラスト	よくわからなかったところ	イラスト

第3時間目：2011年2月22日(火)10:50-11:40

本時の目標：エイズウイルス感染の仕組みと予防について理解することができる。

- 準備物：① 本庄真美子著：朗読 林唯衣，私の一步，Around You～VOICES～今ここに生きている
メッセージ，著作：札幌市／企画：世界エイズデー札幌実行委員会／制作AIR-G
FM北海道2010年を録音したCD。
② カセットデッキ
③ 日本医師会感染危機管理対策室：DVD『日本医師会市民公開講座 知って防ごう性感染症
現状と対策』，NHKエデュケーショナル，2007年
④ ビデオデッキとプロジェクター
⑤ 皮膚からは，エイズウイルスが侵入しない簡易実験セット
⑥ 【プリントNo.10】から【プリントNo.12】
⑦ 3つの感染経路のフラッシュカード

第3時間目学習指導案

段階	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 10分	板書の指定席に従って，着席する。	本時は，DVD視聴のため，いつもの教室とは座席が異なるので，学習者が指定席へ着くのに手間取り，授業の雰囲気は，乱れることが予想される。そこで，授業者=研究者は事前に，座席の位置と本時の学習内容を板書しておく。	知識・理解
	1. 挨拶・出欠確認	学習が着席した頃を見計らって，板書内容を予め説明して授業を開始する	
	2. 本時の授業展開を知り，見通しをもって授業に参加する。	「HIVとエイズ」の違いが，理解しやすいように【プリントNo.10】を作成した。【プリントNo.10】をもとに図示をしたり，免疫機能の低下により，様々な症状が現れたりすることを知らせる。	
	3. 前時の疑問点「HIVとエイズの違い」をプリントで理解する。 【プリントNo.10】	【プリントNo.10】〈資料2〉の「5年で約90%死亡」の事項は，1993年当時の医学状況であり，現在，治療薬等の開発により死亡率が低下して，エイズは慢性疾患の扱いになったことを知らせる。	
	4. 感性経路が3つあることを理解する。 【プリントNo.11】	感染源と感性経路との関係についてフラッシュカードを用いて説明しながら，プリントに記入させる。	感染経路について理解している(知識・理解)

展 開	5. HIV感染の仕組みを簡易実験から理解する。 【プリントNo. 11】	粘膜を通して感染する仕組みの説明と「エイズウイルスは皮膚からは入ってこない」という簡単な実験を見せる。この実験は、近藤の実践にヒントを得て、割り箸に濾紙を巻き、その上に油紙をしっかりと巻く。ビーカーに赤い絵の具を溶かし血液に見立てる。このビーカーの中に油紙を巻いた棒を浸けて見せる。皮膚に見立てた油紙が防御して、粘膜からは血液が染みこまないことを可視的に理解させる実験を行う。	皮膚からは感染しないことを理解する（思考・判断）
	6. 感染者の手記の朗読を聴く。 エイズの問題は、他人ごとではなく自分のこととして聴く。性的ネットワークの図と、感染者の増加のグラフから理解する。 【プリントNo. 11】	朗読をすぐに聴かせることが出来るように、カセットデッキにCDを入れて頭出しをしておく。	
35分	7. エイズ予防 エイズ予防は、コンドームといわれる理由をビデオにより再確認する（7分） コンドームは、一種のバリアであることを理解する。	見せたい映像がすぐ出せるように事前準備をしておく。 大事なことは、「お互いにSTDや避妊の話し合いが出来る対等な人間関係」と「嫌なことは嫌と言える性的自己決定権」であることをビデオの中の岩室氏の話をもとに説明する。 昨年は、ビデオ効果が絶大で、エイズ予防の大事なことは「爪を切る」と何人もの先輩が答えたことを失敗談として話す。	エイズの予防法について理解している（知識・理解）
	8. 二人の人間関係のあり方について理解する。 【プリントNo. 11】	「二人の間でSTDや避妊の話し合いが出来る対等な人間関係」と「嫌なことは嫌と言える性的自己決定権」であることを理解させる。	
整理 5分	9. 本時の振り返りを書いて提出する。 【プリントNo. 12】	本時の振り返りの用紙を記述させて回収する。そして、次時の学習内に繋ぐ。	思考・判断

本日の授業の振り返り ()組 ()番 名前 ()			
よくわかったところ	イラスト	よくわからなかったところ	イラスト

第4時間目：2011年2月23日(水)13:25-14:15

本時の目標：① エイズ検査の必要性について理解する。

② 自分がエイズ感染者の立場に立った場合を考えて、「病者」への社会的支援について理解する。

準備物：① リュウタ著：朗読 油谷昭雄，HIVポジティブ1年生，Around You～VOICES～今ここに生きているメッセージ，著作：札幌市／企画：世界エイズデー札幌実行委員会／制作AIR-G 'FM北海道' 2010年を録音したCD。

② カセットデッキ

③ ポスター-Condom

④ 【プリントNo.13】から【プリントNo.16】，【資料3-3】

第4時間目学習指導案

段階	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 10分	<p>1. 挨拶・出欠確認</p> <p>2. 前時の4つの疑問点の回答を聞く 【プリントNo.13】</p> <p>①「HIVとエイズの違い」</p> <p>②「エイズ予防には、コンドームと言われているのに、なぜコンドームの売り上げが下がったのか」</p> <p>③「100%安全で確実な予防法はあるのか」 【プリントNo.13】</p> <p>④「予防のためのワクチンはないのか」</p>	<p>【前時への疑問に対して説明をする】</p> <p>①「HIVとエイズの違い」がわかっている学習者に説明をさせる。学習者の回答に加えて、具体物として、4月から教室においてある観葉植物が水不足と熱風に曝されて生気を失っている様子を、HIVウイルスに感染して体が弱ってきた人体に見立てて説明を行う。</p> <p>② 新聞報道の減少によりエイズ感染者が減少したのではなく、性教育の不十分さから、コンドームの減産が人工妊娠中絶の増加を招いたのではないかとされている、負の相関関係を説明する。</p> <p>③ 性的自己決定権と関連させて、性交渉を持たないという選択もあることを伝える。</p> <p>④ 予防のための最大のワクチンは「教育」であることを知らせる。だから今教育を受けているのだ、ということを理解させる。</p> <p>エイズ予防のポスターを見せる。 「持っている人はエロい人」というポスターを黒板に貼って、注意を喚起する。</p>	知識・理解
	<p>3. 男性同性愛患者の手記を聴き、関係性について理解する。 人と人とのつながり、病気と人との繋がりについて理解する。</p>	<p>朗読内容の要点を簡単に事前に話した上で聴かせる。 中学では、習わなかった「関係性」について学習させる。</p>	感染経路について理解している(知識・理解)
展	<p>4. 検査場所と検査方法について理解する。 【プリントNo.13】 【プリントNo.14】</p> <p>5. エイズの問題は、若者だけの問題だけでなく、中高年でも感染している現状がある。 病者となったら患者救済制度として慢性疾患のた</p>	<p>保健所だけは、匿名無料でエイズ検査が行なわれることを理解させる。 保健所によっては、土日診療が受けられることも最新の情報として説明する。 エイズは慢性疾患のため、高額医療費の請求ができることを知らせる。病気を患うことによって、プライバシーの侵害を受ける危惧があるので、患者救済制度の利用が低いことについても知らせる。</p>	社会との繋がりについて理解している(知識・理解)

開	め高額医療費の請求ができることを知る。患者救済制度があっても、利用が少ない現状があることも知る。	病気が、社会制度を変えてきたことも伝える。	
	35分	6. 「間を生きる」を読むことによりQOLについて理解する。 【プリントNo. 15】	【プリントNo. 15】「間を生きる」を読み、病気を抱えても生きていけることを理解させる。 QOLとの関わりについて理解している (知識・理解)
整 理 5分	7. エイズ授業4時間分のBefore& Afterと本時の振り返りを記入する。【プリントNo. 16】	学習者の感想は、次年度に活用することを知らせる。	思考・判断

授業振り返り用紙

【プリントNo.16】

()組 ()番 * 名前 ()

	項目	良くわかった	何となく分かった	何となくわからなかった	わからなかった	振り返りに対する理由、または感想
1	エイズ感染者の苦悩	1	2	3	4	
2	エイズ検査	1	2	3	4	
3	陽性反応後の支援	1	2	3	4	
4	間を生きる	1	2	3	4	

4. 事後調査

<p>エイズに関する事前・事後調査</p> <p>あてはまる番号に○をしてください</p> <p>1 自分は、性感症には感染しないと思う ① 強く思う ② 少し思う ③ あまり思わない ④ 思わない</p> <p>2 自分は、エイズには感染しないと思う ① 強く思う ② 少し思う ③ あまり思わない ④ 思わない</p> <p>3 エイズに感染している人と手を握っても大丈夫 ① 大丈夫 ② どちらともいえない ③ 大丈夫ではない</p> <p>4 エイズに感染しても、完全に治すことができる ① できる ② どちらともいえない ③ できない</p> <p>5 現在、エイズの感染原因の多くは性交為によるものである ① はい ② どちらともいえない ③ いいえ</p> <p>6 エイズに感染しないための予防法を知っている ① 知っている () ② 知らない</p>	<p>2011年2月 日</p> <p>1年組番 名前()</p> <p>7 エイズの感染を防ぐのに、コンドームは効果がある ① 強く思う ② 少し思う ③ あまり思わない ④ 思わない</p> <p>8 一人の人と性交渉を持つことは、その性交渉を通じて間接的に他の多くの人と性的な関係を持つことになる可能性がある ① 強く思う ② 少し思う ③ あまり思わない ④ 思わない</p> <p>9 エイズ感染者は、年々増加している ① はい ② どちらともいえない ③ いいえ</p> <p>10 エイズは、怖い病気だと思えますか ① とても怖い ② 少し怖い ③ あまり怖くない ④ 怖くない</p>
--	--

あなたが、エイズ授業を受ける前と後の変化について書いてください。

資料2 創作ダンスの授業に関する調査資料及び振り返り用紙

1. 事前調査 第1回目 2010年11月9日

平成22年11月9日

創作ダンス事前調査

2年()組 ()番 名前 ()



あなたの中学時代の創作ダンスの授業について、質問します。

- 1 いつ頃授業がありましたか
中学1年 何月頃 ()
2年 何月頃 ()
3年 何月頃 ()
- 2 何時間かけて創作ダンスの授業をされましたか ()
- 3 どんなテーマで踊りましたか 中学1年 ()
2年 ()
3年 ()
- 4 一つのグループは何人ぐらいでしたか ()人
- 5 創作方法について
(1) 先生が作った動きの一部を埋めた
(2) 全部自分たちで作った
(3) 既成作品を踊った
- 6 伴奏音について
(1) 先生が与えてくれた音に動きをつけた
(2) 自分たちが音楽を探してきた
(3) 自分たちが音楽を作った
- 7 創作ダンス発表会について
(1) 発表会を学年で行った
(2) 発表会を授業クラスで行った
(3) 発表会を外のステージ(学校行事)で行った
- 8 中学時代の創作ダンスの思い出 (友達・学んだこと・先生に褒められた等)

2. 創作ダンス振り返り用紙

第2回目：2010年11月10日

11/10		2年()組()番		名前()		
本日のテーマ：新聞紙と遊ぼう		学習目標：新聞紙になりきってひと流れの動きができる				
	ダンスの振り返り	大変 良い	良い	あまり 良くない	良くない	自分自身の振り返り (自己評価と関連して具体的に記入)
1	身体全体を使って運動ができた	4	3	2	1	
2	新しい発見があった	4	3	2	1	
3	テーマとあって、なりきって踊ることが出来た	4	3	2	1	
4	空間を意識して動くことが出来た	4	3	2	1	
5	仲間と協力できた	4	3	2	1	

第3回目：2010年11月16日

11/16		2年()組()番		名前()		
本日のテーマ：「走るー止まる, 走るー止まる, 止まる, 止まる, 止まる		学習目標：メリハリ				
	ダンスの振り返り	大変 良い	良い	あまり 良くない	良くない	自分自身の振り返り (自己評価と関連して具体的に記入)
1	身体全体を使って運動ができた	4	3	2	1	
2	新しい発見があった	4	3	2	1	
3	テーマとあって、なりきって踊ることが出来た	4	3	2	1	
4	空間を意識して動くことが出来た	4	3	2	1	
5	仲間と協力できた	4	3	2	1	

第4回目：2010年11月17日

11/17 2年()組()番 名前()						
本日のテーマ： 集まるーとび散る 学習目標： 群の変化を空間を意識して行おう						
	ダンスの振り返り	大変良い	良い	あまり良くない	良くない	自分自身の振り返り (自己評価と関連して具体的に記入)
1	身体全体を使って運動ができた	4	3	2	1	
2	新しい発見があった	4	3	2	1	
3	テーマとあって、なりきって踊ることが出来た	4	3	2	1	
4	空間を意識して動くことが出来た	4	3	2	1	
5	仲間と協力できた	4	3	2	1	

第5回目：2010年11月24日

11/24 2年()組()番 名前()						
本日のテーマ： 「走るー止まる」と「群」の要素を使って飛行機の表現をする 学習目標： 全員で飛行機の動きを行い、どうしたら飛行機に見えるかビデオで振り返る						
	ダンスの振り返り	大変良い	良い	あまり良くない	良くない	自分自身の振り返り (自己評価と関連して具体的に記入)
1	身体全体を使って運動ができた	4	3	2	1	
2	新しい発見があった	4	3	2	1	
3	テーマとあって、なりきって踊ることが出来た	4	3	2	1	
4	空間を意識して動くことが出来た	4	3	2	1	
5	仲間と協力できた	4	3	2	1	

第6回目：2010年11月30日

11/30 2年()組()番 名前()						
本日のテーマ： 修学旅行ひとこまデッサン 学習目標： 修学旅行で一番表現したいものを動いてみる						
	ダンスの振り返り	大変 良い	良い	あまり 良くない	良くない	自分自身の振り返り (自己評価と関連して具体的に記入)
1	身体全体を使って運動ができた	4	3	2	1	
2	新しい発見があった	4	3	2	1	
3	テーマとあって、なりきって踊ることが出来た	4	3	2	1	
4	空間を意識して動くことが出来た	4	3	2	1	
5	仲間と協力できた	4	3	2	1	

第7回目：2010年12月14日

12/14 2年()組()番 名前()						
本日のテーマ： 中間発表会に向けての踊り込みをする。 学習目標： ひとりひとり飛行機における自分の役割を意識して動く。グループの作品の踊り込みをする						
	ダンスの振り返り	大変 良い	良い	あまり 良くない	良くない	自分自身の振り返り (自己評価と関連して具体的に記入)
1	身体全体を使って運動ができた	4	3	2	1	
2	新しい発見があった	4	3	2	1	
3	テーマとあって、なりきって踊ることが出来た	4	3	2	1	
4	空間を意識して動くことが出来た	4	3	2	1	
5	仲間と協力できた	4	3	2	1	

第 8 回目 : 2010 年 12 月 15 日

12/15		2年()組()番		名前()		
本日のテーマ: 中間発表会 学習目標: 作品の意図が伝わるように大きく動こう。						
	ダンスの振り返り	大変 良い	良い	あまり 良くない	良くない	自分自身の振り返り (自己評価と関連して具体的に記入)
1	身体全体を使って運動ができた	4	3	2	1	
2	新しい発見があった	4	3	2	1	
3	テーマとあって, なりきって踊ることが出来た	4	3	2	1	
4	空間を意識して動くことが出来た	4	3	2	1	
5	仲間と協力できた	4	3	2	1	

第 9 回目 : 2010 年 12 月 21 日

12/21		2年()組()番		名前()		
本日のテーマ: 発表会に向けて創作の意図が伝わるように, みんなの意見を参考にして動きの修正をする。 学習目標: 相手に伝わる動きとはどんな動きなのか, お互いに見合って修正をする						
	ダンスの振り返り	大変 良い	良い	あまり 良くない	良くない	自分自身の振り返り (自己評価と関連して具体的に記入)
1	身体全体を使って運動ができた	4	3	2	1	
2	新しい発見があった	4	3	2	1	
3	テーマとあって, なりきって踊ることが出来た	4	3	2	1	
4	空間を意識して動くことが出来た	4	3	2	1	
5	仲間と協力できた	4	3	2	1	

第 10 回目 : 2010 年 12 月 22 日

12/22		2年()組()番		名前()		
本日のテーマ: 発表会		学習目標: 作品のテーマになりきって精一杯踊ろう				
	ダンスの振り返り	大変 良い	良い	あまり 良くない	良くない	自分自身の振り返り (自己評価と関連して具体的に記入)
1	身体全体を使って運動ができた	4	3	2	1	
2	新しい発見があった	4	3	2	1	
3	テーマとあって、なりきって踊ることが出来た	4	3	2	1	
4	空間を意識して動くことが出来た	4	3	2	1	
5	仲間と協力できた	4	3	2	1	

創作ダンスの授業を終えて



2年 ____ 組 ____ 番 名前 _____

1 自分達の作品を鑑賞して

2 私にとって、創作ダンスとは

3 創作ダンスをとおして学んだこと

4 創作ダンスをとおして楽しかったこと

5 今後，このような方法をすればもっと上手くなるけれど・・・

